

明治教育の賜なりと思惟すべからず。祖先の口碑が吾人の血液が吾人の血管中に流るゝに非ずんば如何てか能く茲に至る一方を觀れば、四十年來の西洋文物輸入の結果は往々にして我が國體度我が固有の風俗習慣に背戻する或物をも將來するを免れず。是猶交通日を開くるの結果としてたまく危険なる微菌を輸入し來るに同じ。古の道義は我を捨て、道に従ふを大旨とす。今や我を立て、道と相争はんとするの傾向所在に見ゆ。豈戰慄して恐れざるべけんや。國民教育を掌りて兒童教養の任に當るもの深く意を茲に致して常に歴史教育を忽にすべからず。

(三)

明治學術の進歩は歴史學に於ても非常の發達を遂げしめ、舊來の紕繆を訂正せしこと尠からず。然れども眞を探り實を尙ぶの餘り、却りて從來の傳説を打破し古來採りて以て風教の根本となせしものを顛さんとせし傾向あり。歴史の學術と國民の教化とは自ら別物たり。初等教育を受くる幾百萬の兒童

は悉く將來の歴史家たるにあらざる以上、國民教育としては寧ろ古來の傳説を重んじ、名分を明かにするを以て其の本旨となすべし。必ずしも事實の詮索を以て其の能事となさざるべきなり。若し歴史的眼孔を以て論ぜんか。保元、平治、平家、太平記等の著一として半ばは脚色を加へたる小説ならざるなく、後世の軍談雜史に至りては史學上殆ど一顧の價値なきものあらん。然れども此等の諸書が國民の風教を維持し名節を奨勵せし効果に於ては決して正史に譲らざるのみならず、むしろ正史以上たり。何となれば平易にして耳に入り易く、興味多くして心に記し易ければなり。娛樂を兼ねて知識を收得せしむるは教育法の上乗たるものにして、徳川時代に於て自然に行はれたる國民教育は此の點に於ては明治時代に超越せりともいふを得んか。徳いはず、現今の時代に於ても、目に一丁字無き市井の徒が寄る知識及び道義の念の或は却つて學校教育に獲たるも無きに非ざるにあらずや。健全なる娛樂也。

現今の家庭に向つて通俗軍談を供給せんとするの企圖は恐くは大方る所とならん。

(四)

家庭の修養は學校教育と相俟ちて始めて國民の大成を期すべし。校教育無かりし武家時代に於て、國民道德の維持せられしは主として教養に在りしなり。楠木正行の母、爪生保の母、細川忠興の妻等の事蹟を憶ふものは如何に嚴肅なる教誡の家庭に行はれしかを知らん。古のスパルタ武士の勇敢なりし逸話には婦人の美談を傳ふること亦尠からず。歴史軍談の書は此の點に於て亦婦人社會の讀物として推獎せらるべきものたり。西洋の諺にも「其の子を知らんと欲せば其の母を見よ」といふにあらずや。

(五)

今回廣文館主人金重輝一氏通俗軍談の書約二十餘種を選択して、之を世に布かんとするの計畫あり。序を余に請ふ。余其の擧を賛成し、平生感ずる所

を記して之に與ふ。庶幾くは家庭の間に於て大義名節を磨くの端を開き、進んで國民教育の補助たらしめんか、豈啻に廣文館主人の喜のみならんや。

文學博士 芳賀矢一  
しるす

### 緒言

- 一、本文庫發刊の趣旨は、芳賀博士の序に盡きたれば贅せず。また各篇の内容及び其作者等に關しても、別に同博士の解題あれば、讀者は就いて見らるべし。
- 一、本文庫に採録すべき書冊は、其種類一ならず、記載の事實亦時代を異にし土地を別にして、容易に統一するを得ず。加ふるに紙數の制限、原本入手の難易等の事情ありて、必ずしも一定の順序に據り難きも、每篇皆完結せる作物なるのみならず、本書の目的とする所も、敢て系統的歴史を教ふるにあらざれば、此小缺點の如き多く累する所なからんか。
- 一、本書校訂の方針に就きては、多數の中より最良書と信ずるものを底本とし、更に他書によりて嚴密なる校訂を加へたるは素より、家庭の讀物たる目的より、努めて誤脱なき完本を採るに注意せり。これと同時に、なるべく原本の面影を存せんため、口繪、挿畫等あるものは、其重なるもの

を原畫の儘に摸刻して、其體裁を僂ぶの料とし、また別に附する所の系圖の如き、一も省略する所なし。其他讀易からん事を期するより、使用の假名を一定し、振假名を施し、假名遣を正し、送假名を補ひ、句讀點を訂し、また極端なる充字、誤字、及び誤讀を來す恐ある假名は、原本の趣を損ぜざる限に於て、或は訂正し、或は漢字を宛て、以て其失を防げり。尤斯種の書に特有なる口調、讀癖等は、特に保存に努めたるのみならず、係結の相違の如きも、強て文法上の法則に従つて改竄せず。

附言本書第一卷は、發兌の日目睫の間に迫り、書肆の督促亦極めて急なりしたため、校訂其他につき尙遺憾とする所甚だ多し。特に讀者の寛恕を請はざるを得ず。第二卷以下に到りては、必ず完璧を期せん。大方諸君之を諒せられんことを。

明治四十四年五月

校訂者識

### 解題

多田五代記 十卷 元祿四年の刊本。滿仲、賴光、賴信、賴義、義家、源家五代の事蹟を敘す。羅生門の鬼の事、大江山酒吞童子の事、土蜘蛛の事、髭切膝丸の由來、前九年後三年役の顛末、凡そ鎌倉以前の源氏に關する武勇譚は大抵網羅し得たるを多とすべし。多田兵部の家に年久しく藏せりといふは假托の言ならん。卷末に瀧川昌樂庵の跋あり。昌樂は隨有と稱し、恕水と號す。松永昌三の門人にして、又俳諧に遊べり。

星月夜顯悔錄 一篇より五篇各五卷。六篇三卷附錄上下は高井蘭山の著。蘭山名は伴覺、字は思明、文左衛門と稱す。幕府書院番頭組與力高井伴昌の子。著す所本書の外三國妖婦傳、孝子嫩物語、那智能白糸、應仁記等あり。天保九年十二月、七十七歳にて歿す。鎌倉幕府武臣の正邪善惡を分ちて、勤善懲惡の意を寓せり。余少時此書を愛讀し、最も感興を惹きたるは荏柄平太の一條なり。鎌倉に遊

びて荏柄天神祠の前を過ぐる毎に、此の書を想起せざることをなし。  
 筑紫軍記 十六卷 主として大友宗麟の事蹟を叙し、島津龍造寺等との交戦を  
 記せり。宗麟は即ち義鎮にして戦國の末に於る一代の雄者なり。加藤清正の家系  
 を叙して、天御中至尊より天八下尊、天三下尊、天合尊、天八百日尊、天八百節魂  
 尊、數十代の系統を列ねたるは滑稽といふべし。明暦三年大友内藏助義孝の徳川  
 に召出されて五百俵を賜ふを以て筆を收む。著者を知らず。刊行せられたるは元  
 祿十六年。即ち赤穂義士四十七人が死を賜へる年。

### 多田五代記總目錄

#### 卷第一

- 維高維仁位を諡ひ給ふ事
- 滿仲誕生の事
- 源姓を賜ふ事
- 源經基位を授かる事
- 滿仲維時より軍旅を傳ふる事
- 純友征伐の事
- 滿仲雁を射る事
- 滿仲鬼神を討取る事
- 滿仲城地を賜はる事
- 滿仲住吉參籠並明神示現の事
- 多田初まり並住吉の神鏡大蛇に中る不思議の事
- 西宮左大臣高明公流罪の事
- 高明殿住宅焼拂ふ事

#### 卷第二

- 滿仲將軍に任ずる事
- 滿仲内の昇殿の事
- 秋忠行春等謀に依つて滿仲勅勘を蒙る事
- 渡邊綱母の命に代り並勇力の事
- 渡邊系圖の事
- 源賴光平吉秀を憑み吉秀心替りの事
- 橋姫海に沈む事
- 六郎賴光並母公若君を奪ひ捕る事
- 六郎賴光卿に尋ね會ひ並金時出づる事
- 渡邊荒童子に値ふ事
- 滿仲勅勘を宥され並秋忠行春罪科の事
- 卷第三
- 滿仲多田に移る事
- 幸壽丸命に代る事

幸得丸母歎き須達摩太子の事  
美女多田を落る源信僧都に値ふ事  
法花三昧院建立の事  
満仲京都の館強盗の事  
拾遺に入る歌の事  
源頼光、平維仲御息女に逢ふ事

卷第四

美女御前勘氣を宥され並小童子の事  
多田左近源満正卒す並虚空藏菩薩の事  
久我細手追刺の事  
満賢の母公明目となり並眼明彌陀の事  
女御入内の事  
上陽人の事  
弘徽殿の女御隠れ給ふ花山院御出家の事  
満仲多田の境を定むる事  
龍馬の事

満仲出家受戒の事  
出家功德物語並御臺剃髪の事  
源信僧都の事  
満慶法花三昧院に移り給ふ事  
花山院多田臨幸の事  
藤原保輔多田合戦の事  
多田満信三陳を問ふ事

卷第五

渡邊綱鬼神の手を討取る事  
渡邊綱歌の事  
鬚切膝丸の事  
満慶閑居の事  
満慶我木像を作り給ふ事  
兼家公宅饗宴附頼光馬を贈る事  
海賊追討使附保昌策の事  
平太郎能門多田に寄する満慶知謀の事

兵庫河合戦の事  
化生退治の事  
伊吹山酒天童子の事  
鬼切太刀の事

卷第六

頼光朝臣瘧病附山蜘蛛を討ち捕る事  
土蜘蛛の事  
巡見の事  
將軍柳花女より弓を傳ふ事  
花山法皇四君に通ひ給ふ附伊周隆家流罪の事  
將軍鞍馬參詣附鬼同丸の事  
藤原隆家訴狀の事  
中宮御懷妊附伊周隆家召し歸さる事  
満慶薨逝の事並天下の殺生を禁ずる事  
満慶公古今神力の事  
將軍狐を射給ふ事

勅命輕からざる事

卷第七

將軍逝去の事  
頼家の母公剃髪ていぼうの事  
渡邊綱病死の事  
成章時遠爲行等流罪の事  
平忠常謀叛附吳王手繼らざる藥と大なる瓢ひょうとを千金に買ふて軍に勝つて越の大國を取り大に得付さたる事  
兩大將召し歸さる事  
源頼信武勇軍術に法有り忠常降参の事  
謀叛人本意を遂げざる事  
頼信河内國を賜つて入部の事  
源頼義八幡參詣の事  
八幡太郎誕生の事  
源太九元服の事

卷第八

安部頼良登任重成等合戦の事  
 源頼義鎮守府將軍追討使に任ずる事  
 安部頼時矢に中る事  
 國解を進まづる事  
 河崎合戦源氏敗軍義家弓勢の事  
 將軍御詠歌の事  
 源頼信朝臣往生の事  
 真人光頼武則等官軍に與力せしむる事  
 將軍謀を爲して稻禾を刈らしめて敵貞任宗任を  
 挑出す、貞任宗任寄せ来る附武則軍評定並八幡  
 の神助有つて白鳩軍上に翔り竟に小松の棚を攻  
 め抜く事

卷第九

衣河關合戦並武則智謀附久清市助輕捷貞任が妻

の事

將軍鳥の海の棚に入つて敵の陳屋に酒有り士卒  
 争ふて之れを飲まんと欲す、毒有らん事を慮  
 り制止するの事  
 多田の御廟鳴動貞任が一族滅亡の事  
 貞任最後合戦の事  
 千世童子が事  
 則任女房沈水の事  
 降参人の事  
 義家弓勢の事  
 貞任等が首京都に上る、人々恩賞に預かる事  
 貞任が首を献ずる使者貞任が腹を梳り涙を垂る  
 る事  
 義家歌の事  
 頼家出家の事  
 大瀬三郎近宗殺心の事  
 箕和道心往生並忠俊地獄に落つる事

永覺箕和五郎忠俊に値ふ事

卷第十

頼義入道殿往生の事  
 眞衡秀武不和の事  
 秀武清衡家衡等を憑む事  
 源義家奥州下向の事  
 清衡家衡敵味方と爲る事  
 家衡將軍を追返す事  
 金澤合戦源満秀箭に中る並高木満秀の勘氣を蒙  
 る事  
 新羅三郎義光奥州下着の事  
 源氏の陣引拂ふ事  
 將軍伏兵を知り給ふ事  
 將軍剛鷹の座を定め給ふ事  
 源満秀軍氣を見る事附龜次鬼武勝負の事  
 金澤合戦の事

金澤の城落る武衡家衡一家亡ぶる事  
 義家國解を捧ぐる事

多田五代記總目錄終

清和源氏圖系

清和天皇

文德天皇の御子也御諱惟仁  
御母は淡殿后也

貞明親王

貞固親王

貞元親王

貞保親王

貞平親王

眞紙親王

經基王

關六孫王 始賜源姓  
鎮守府將軍

兼

忠

重

之

爲

清從五位下

滿仲

正四位下左馬助延喜十二歲御誕生 鎮守府將軍寬和二歲出家法名滿慶長德三歲八月廿七日薨逝  
不動の化身也甲冑帶御乘龍馬神と祭らる 贈從二位大將軍左馬頭

滿正

上總介天延元年八月廿四日  
卒廿四歲波豆村氏神與殿の  
婦と云は滿正也甲冑帶御の  
體自作也此所に滿仲滿正石  
堂あり滿昭律師一條天皇奉  
仕也

源藏丸

當歳にて父に後る  
子孫あり

滿信

多田左近多田に住  
源次丸三歳にて父  
を襲ふ六十歳卒す

滿秀

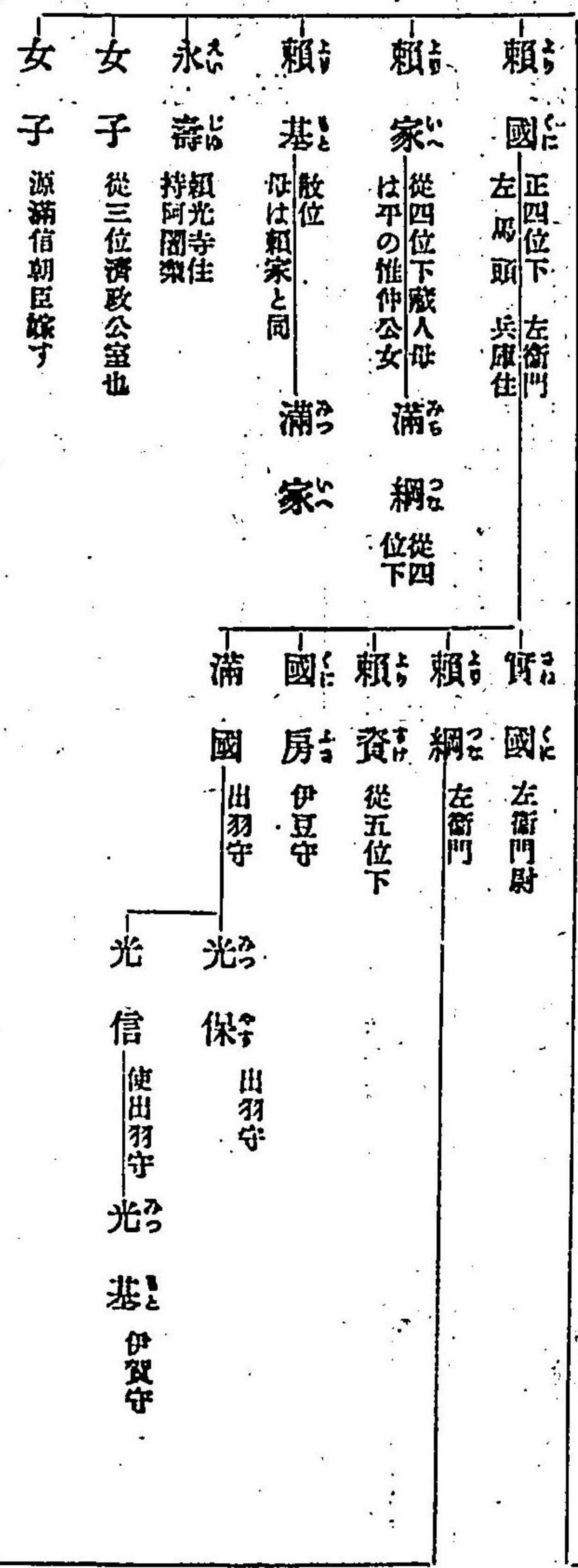
多田太郎  
母は源賴光女與  
州合戦功あり

滿國

左兵衛尉



頼光 四位下左兵衛尉天曆七歲七月廿四日誕生  
鎮守府將平治安元年七月廿四日逝去神に祭らる歌人も



讓位あるべしと奏評有りければ、維高の御方には即ち外祖左兵衛佐名虎参りけり。恩愛の道こそ哀なれ、今年三十四太遅く、背高く、七尺計の大男六十人が力あり。維仁の御方には能雄少將として細小の男、行年二十一其勇力も世上に聞ゆれ共、名虎には敵對すべきものに非ず。去ども果報冥加は二の宮の御運に任せ奉るべしとて、不敵に申請うてを参ける。旁兼ねて御祈師あり。二宮の御方には東寺の柿本真濟僧正なり。德行高く願て修驗譽廣く、天皇御歸依の僧なりければ、名虎是を語ひ付け奉りけり。二の宮の御方には延暦寺の惠亮和尚なり。行業年を重ねて驗あり。修徳日々に新なり。忠仁公と深く師檀の契を結び給ひけるに依て付け奉られけり。惠亮は西塔寶幢院に壇を構へて、大威徳の法を修せられけり。真濟は東寺に壇を飾つて、降三世の法を行ひ給ひけり。既に其の日に成りければ、名虎と能雄と出合たり。殆金剛力士の如し。堂上階下目を澄して是を見る。

門外門内足を翹て頸を延べて是を望む。源深うしては流盡す、根全うしては枝枯る習なれば也。祈誓効験を以て行徳の淺深を知るべき事眼前にして、東寺天台兩門の貴僧高僧惠亮真濟歸依の男女、各々手把つて談じ、心を虚にして望む。法に偏執はなければ互に勝負の荷擔人たり。能雄、名虎寄合せて手合するを見るに、名虎元來大力なれば、腕の力筋太く、力瘤突出して連れり。股の村肉籠めなり。肢の質付骨の連様、肩の波廣く、足の跋扈り、打見るにも勝色見せたる形勢なるに、能雄が腕首取つて引寄せ、高く指上げて、曳と聲を出て抛たりけるに、上下見物の男女、あはや二の宮の御方、打ち負け手に入らぬと思ふ程に、一丈餘上へ抛られて危ながら、つくとしてこそ立たりけれ。見る人戯呼々々と感嘆せり。又寄合せ互に曳々聲を出して、時移る迄撲闘たり。名虎は松の立てるが如く跋扈つて動ざりけるを、能雄は藤の纏ふが如くして身に絡付つて、小頸小脇を搔抓んで、

内崩外崩大渡懸、弓手に廻し妻手に廻して逆手に入  
れ鴨の入れ首木葉返しに請身を要とし、表の手にか  
け裏にて止め様々にこそ揉だりける。見る人興に入  
りたりける。勝負は未知されば、一の宮の御方よりは  
東寺へ使者敷波に立てられけり。忠仁公の方よりは  
二の宮の御方へ既に危く侍ると使を山門へ立てらる  
こと櫛の齒を引くが如し。和尚こは心苦しきこと  
哉、此の時不覺を我が山に残さんこと口惜し。二の  
宮の位に即き給はずば、命を生きても何かはせん  
て、熾盛の念力を抽てつ、爐壇に立たる劍を抜き健  
に把つて、自ら頭を突破りて腦血を伏ぎて芥子に交  
ぜ、香の煙に燃具して、歸命頂禮大聖大威徳明王願  
ば能雄に力を付け給ひ、勝事を即時に得せしめ給へ  
と黒煙を立て汗を流して揉にもみてぞ祈り給ふ。生  
佛本より隔じなし。信力本尊に通じ、本尊行者に  
加しければ、大威徳の乗り給へる水牛爐壇を廻る事  
三度、聲を揚げてぞ吠えたりける。其聲の大内に響

きければ、能雄に力をつきにける。名虎を脇に引扱  
み南庭を三廻りして、其後奥と云うて投たれば、名虎  
大地に打付られて、血を吐きて起上らず。藏人等走寄  
り大内より兎さ出して家に返し遣したりければ、三  
日過ぎて死にけり。惠亮腦を碎しかば、能雄に力は付  
きにけり。名虎相撲に負けしかば、維仁位に即給ふ。  
清和帝と申し奉るは、此の維仁親王の御事なり。

満仲誕生の事

上總助經基は、弓馬に達し、武勇の器量の仁なる  
に依りて、四位上に任じ、初めて武家に落ちて相摸國  
鎌倉に住す。家富ぬれば、内足つて外に待つことな  
し。唯佛神を仰ぎ仁義を宗とす。頃は醍醐天皇延喜  
十一年の夏、内室相勞しきことありて、一夕夢みら  
く、不動の利劍を賜つて懐中すと見る。是より誠に  
胎内に物あり。是を夫公に語る。經基の云く、若し其  
れ懷妊せば是明王の垂迹にて、男子の心動かず、自性

天然動き無き者ならん。我家の繁榮なるべき悦び何  
事か是に若んやと、心身を淨め善事を聞かしめ、琴瑟  
を聞かしめ、十三箇月を経て明十二年四月十日  
の明方誕生す。此の時彩虹屋上に横たはり、白雲殿頭  
を覆ふと見えしに、雲にてはなくして白旗なれば、外  
人は是を見て奇異の思ひをなしける。其小名を明王丸  
と稱す。母は藤原教有公の息女なり。

延長四年明王丸十五歳、元服して左馬助満仲と號す。  
六年満仲十七歳弓馬に達す。朱雀院御即位延長八年  
十一月なり。

源姓を賜ふ事

承平四年、平將門關東にて謀叛をもちし、東八箇國  
を討靡け、自ら平親王と稱す。經基鎌倉に御座ける  
が、急ぎ都へ上り奏聞し、追討使を勅許し給はれか  
しと望みしかば、其の早く注進せしに依つて、叙威  
ましまして、鎮守府將軍に任じ、始めて源の姓を賜

ふ。

源經基位を授くる事

同じく五年の春正月、源經基に位を授け給ふ。經基  
は貞純親王の御子。貞純は清和第六の皇子なる故、  
經基をして六孫王と號し玉はる。是より威名大に天  
下に振ふ。

満仲惟時より軍書を傳ふ事

抑此の軍書は、醍醐天皇の御時、延喜五年乙丑三月  
十一日に、左大辨宰相大江惟時に命じて、よき儒書、  
聖經、賢傳兵書を傳へ來るべしとて、沙金十萬兩を  
持せて異朝に遣し給ふ。惟時先づ金五萬兩を唐朝の  
天子昭宣帝に奉り兵府をもとむ。勅命に依りてさま  
くの儒書兵書ことくに相傳ふと雖も、言語侏儻  
にして通ぜざれば、此書通曉し讀み明すること能は  
ず。之に依りて延喜五年より承平四年まで、三十年間

留學して、先づ五經三史文選に通じて、經書三史の成  
功に依りて軍書武經の明法を著す。五代に入つて吳  
越の王元堪并に閩の惠宗延に謁見して九經を求め得  
て、朱雀院の承平四年甲午の年隋朝す。帝御感あり  
此の事を武士に傳へて、我朝の寶となさんと武夫の  
器量を撰び給ふに、智仁勇を備へたる武將なし。左  
馬助滿仲こそ、道天地將法自から備へる文武の將な  
りとて、大江惟時に勅して、八幡の御寶前において、  
齊する事三日にして之を傳ふと雖も、唐本の軍書な  
れば通讀せず。是に於て、未學者の爲、和字に訓し  
假名に述べて傳へければ、一ツとして通達せずと云  
ふ事なし。之を名けて訓閱集註說者曰其後世治まりて、鞍馬  
の毘沙門天王の寶殿に之を藏め玉ふに、七條朱雀の  
鬼一法眼と云ふ者寶殿より申下し、之を秘して石櫃  
に藏め、固鎖して相外に出さず。然るに源義經鞍馬に  
在りし時、平家の一族を亡さん志ありて、此兵書を  
鬼一法眼が鞍馬山より申下しける事を傳へ聞き、如

何にもして、鬼一に隨侍して、此軍書を得まく欲して  
謀を廻らし、鬼一法眼が舞となり、鬼一が他に行きて  
鬼一が亡きを窺ひ、其女と心を合せて求め出して、之  
を用ひて終に親の敵平家の一族を亡し玉ふ。其後  
楠正成之を用ひて、官軍に利ありて軍功莫大也。日  
向國伊東在京の時楠正成に親近せし時之を正成に傳  
ふ。爾來山本氏某西國に穿入せし時、之を伊東より傳  
へて關東に下り、武田氏の家に傳へて大に軍功を  
振ふ。是を小幡上總守の家臣岡本喜菴之を傳ふ。喜菴  
其嫡子の岡本宣就に傳へて、箕壁大星術を以て大に  
勝利を得たり。宣就是を細川家、小幡家并に北條家及  
び瀧川信益に傳へて、信益之を大成す。今の七書等、  
も此中に籠れり。別して六踏三略孫子なりと傳へ聞  
けり。惟時の云はく、世に學んで知る人は多し。生れ  
ながらにして利にかなへり。是誠に神助なるべしと  
感じ給ひける。

純友征伐の事

天慶二年春三月藤原純友西國にて謀叛す。小野好古  
と同じく純友征伐の爲め、經基滿仲父子共に西國に  
趣く。終に征伐して軍功あり。

滿仲長男滿正誕生の事

并頼光誕生の事

村上天皇御即位天慶九年四月十三日、天皇位を禪り  
て廿八日即位、天歷四年三月二日滿仲長男滿正生る。  
同八年七月廿四日頼光生る。

源滿仲鷹雲上の翔鳥を射る事

天德元年秋八月天皇嵯峨野に御幸なりし時、勅命に  
依て滿仲雲上の翔鳥渡る雁を射落し、帝の御感に預  
りける。天下弓箭の達人也と譽めざるはなかりける

滿仲鬼神を討ち捕る事

康和三年の秋、信濃國戸藏山に鬼神住みて、牛馬六

畜を掴み裂く由、人民歎き愁ひければ、公卿僉儀あり  
て、左馬助源滿仲を撰み出す。滿仲勅命を承はりて信  
州に發向し、下りて戸藏に到りて、事故なく鬼神を  
討ち平げ、八月十四日歸京して、鬼の首を庭上に持參  
す。頬は朱差の如く、眼の光は日月の如く、口の廣さ  
は缺盆に似、齒の大なること劍の如く、髪は逆に生  
へて棘の如く、手足の毛は銀の針を亂したるが如し  
帝御覽ありて、斯る奇怪なる癖者を事故なく退治仕  
る事、例し少なき武功なればとて、正四位下に叙し  
て信州を賜はる。

滿仲城地を賜ふ事

帝、南殿に燕居し給ふ時、滿仲を召され、汝常に能  
く朕が心に叶ひ、身を委ねて事ふまつる故、何事も震  
襟を安くす。然るに汝が父經基より汝に至りて鎌倉  
に居住すと雖、都遠きの間、近國にて心に叶ひたる  
所に居所を構へ、常に大内を守護すべしとの宣命を

悉らす。身に餘りて喜に堪へず。されば君の貴ぶ所は仁なり、臣の貴ぶ所は忠なりといひしも此事なるらん。如何さまにも此源氏榮ゆべき時なりける兆しにやと、世を擧げて云ひける。果して攝津の國に封侯し給ひけり。多田の庄新田に城を築き給ふ。目出度かりける源家なり。冷泉院御即位康保四年十一月

滿仲住吉に參籠并明神示現の事

五年の春、滿仲聊宿願の事ありとて、攝津國住吉へ參詣ある。御伴には藤原仲光、田井次郎左衛門尉正泥小太郎景吉、清原元俊、卜部兼氏、大江太郎光正等上下千餘人計なり、其行列道壯嚴重なり。二月上旬の頃なれば、餘寒最烈しくして、衣を通す風の音膚に夜して冷かなり。去れど春の暁には、峰の白雪むら消えて、谷の水もとけぬれば、白波まさる桂河、春のものとて、鶯の霞をわけて出て初めて、喬木に移り縋つる聲は、御心も浮き立つ計り麗かに、面を

吹きて寒からず。楊柳の風心長閑に吟ひつゝ、淀の大渡より御船に召れ、攝津國難波の浦にて楫人楳を止めければ、住吉の里に着給ひ、先づ明神の御前に再拜し、丹誠を抽んで懇念し如在の禮を盡し玉ひ、さて又紺紙金泥の妙法蓮華經一部、金造りの太刀一振、上箭二筋、神馬三疋、其外數の寶物資進ある。此財施法施の功を以て、大明神誠の志の深さを御納受あらんと、祝神主等に至る迄皆頼母敷思ひける。其後御寶前にて御神樂を奏し、或は色々の奉幣の聲新なり。此明神の本地の悲願垂跡を尋ねるに、高貴徳天の變身として名を佛教に顯し、今は叡哲聖主の周衛として化を神州に被むらしめ給ふとかや。されば延喜帝の御宇に久しく御造營なかりければ、葉破れ霧は不斷の香を燒き、扇は落ちて月常住の燈をかゝが如く零落し、玉樓と傾倒し、粉墻も空しければ、宮奴是れを歎きしに、有る時常に示現して、夜や寒き衣やうすさかたそぎの行合の間

より霜や置くらん

と聞かせ給ふにより、帝驚き思召て忽ち御造立ありし社とかや。斯る貴き御神なれば、一七日拜殿に籠らせ給ひ、丹誠無二の御祈、感應などか無らんと、神慮も暗に計られたり。更け行く月に御心をすまし、法華經讀誦なされけり。夜も深更に及び波納り松風静かなりし折節、御神殿の扉さりととなる音のしけるが、位官直さ老人の妙なる御聲を出し示現して曰く、王法を守護のため住所を求むる志の深ければ、此の矢を授與するなり。虚空に向て射給はゞ必ず住所に落べし。其地を尋ねて住居すべきなり。佛法王法に便りある地なるべしと、又内に入り給ふ。さては神勅なりと御覽あれば、白羽の矢一手弓取をへあり、奇異の思ひをなし、有難き御事と感涙袖を濕ほせり。所願すてに叶へりと、御悦かぎりなし。臘夜の曉かけて入る月も、社檀の砌に耀きて、一入尊く頼母しくぞ覺へける。

松陰の波に浮める月までも、深さや頼む住吉の神

と詠し弓と矢を取もち、猶王護の威を加へ給へと心を静め射給へば、此の矢雲井に飛びあがり鳴り廻ること鳴る雷に異ならず。北をさして行くこと見へしが五月山より戌亥なる少しこぶかき谷陰に、光を放つて落ちにけり。去れども餘人は是を知る事なし。唯滿仲ひとり見へけるは、不思議と云ふも愚なり。

多田の初住吉神竊大蛇に中る不思議の事

滿仲朝臣は明神の御前に向て歡喜の掌を合せ、拜謁し奉り、如在の禮を盡し、悦びの奉幣事をはり、能折からなればとて、かなたこなたを見給ふに、前は巨海漫々として雲煙天を浮め、波瀾、九域を呑んで、清江山を染めて藍よりも青し。若水渺々として幽なり。住の江の釣殿に詣て、は、彼の住吉の姫君

此所に御座てつく／＼と嘯きて、唯松風のためへず吹らんと琴撥鳴し給ひし有様は、岸に生ふてふ忘れ草忘れもやらぬと云ひし跡とかや、淺澤津守七度の濱此の所にて任原中將業平、雁鳴きて菊の花さく秋はあれど、春の海邊に住吉の濱と詠みしも、此處の事ならん。今日しも春のことなれば、實にもと思ひ合されけり。斯ても、時刻を移すべし事ならねば、宮奴どもに暇こひ、御馬にめされつゝ彼箭を尋ね出給ひ、天王寺に参りては、且念誦し、又駒に打のつて北をさして御出ある。遠山にかゝる白雲は花かと思へて面白や、渚は蘆屋難波濁、其名ばかりは朽ちもせぬ、長柄の橋の古を思ひ渡らせ給ひけり。未だ秋にはあらねども、露の玉河玉江里、猪名の篠原分けすぎで、立木も知らぬ山路の藤をひき、足をまといつて岩根をしのぎ、漸く峰に至り給ふ。その景ほとんど言語の及ぶ所にあらず、暫く四方を見給ふに、とある松下に怪しき庵の見えければ、不思議のちもひをな

し、立寄り是を見給ふに、千草を結びてやねとし、萩の編戸して晝だにも門を掩ひ、竹籬を引閉ちて悄然として、足音の窅然たる劍塚の扣くもなし。満仲軒近く立寄り、人やあると御尋ねありければ、良有つて誰と答ふる者を見れば、八十有餘の老僧の、眉に八字の霜をたれ、鬚髪は千莖の雪を疊むか如し。満仲問うて云く、汝爰に住んで幾の年を経るや。答へて云く、我此處にし數十歳の星霜を重ね。さて旁々は何故是までは来りけるぞや。我れ是へ来る事別義なし。此邊へ空より矢は落ちずや。老翁語つて云く、是より麓の谷はあれに見えたる山に包まれ、河水與へたへて千尋の池あり、此の池に九頭ある大蛇すんで水邊近く寄る者を取て呑む事敷を知らず、爾所に去ぬる曉、空より光物飛來てあれに見えたる山陰に震動して落ちしが、件の蛇、水に浮み波を逆き火炎を吹立て、喚叫ぶ聲山も崩るかと思侍りしが、あれなる山をつき切り、水は流れさつて斯様に平地と

成る事不思議也。此の外にさして何事も知り侍らずと申ける。是れより此の所を矢間村と名付くるとかや。其の後満仲は麓に下り御覽あれば、其の言の如く大きな毒蛇の九頭あつて、弓にてくらふれば伏したる長け七十二弓に及べり。十八の角、十八の眼、光りは日月の如く、喉の下なる鱗は圓のごとし。其の色は鮑貝の光に異ならず。彼の矢、角と角との間に中る。半は心腹貫ぬく。血の流れし跡、紅波萬水を染めなし、蜀江に錦を洗ふに似たり。見る者の肝を消し魂を失へり。則ち、首を切り九頭明神と祝ひ祭り給ふ。水引けし跡、多くの田の如くなれば、多田と名付け給ふ。其後地を引築し居とし、家を經營し城を築き、矢倉を造りて新田城と名付け、爰に在住したまへり。山水竹木兼備へたる所なる故、明神も此の地を示し給ふとかや。

西宮左大臣高明公流罪の事

左大臣殿流罪の故を原るに、冷泉院と申奉るは村上天皇第二の王子、御諱は憲平、御母は中宮安子と申奉る。左大臣師輔の御娘也。天曆四年五月御誕生まし、七月に太子に立ち給ふ。然れども邪氣の御祟ありて、御心地常ならざるに、村上天皇崩じ給ふ。太子御年十八にして御即位まし、けり。同年の十一月藤原實頼を太政大臣に任じ玉ひ、源高明を左大臣に任轉し、藤原師尹を右大臣とす。爰に又染殿式部卿の宮爲平公と申し奉る御座けり。此の御弟を守平公と號く。爲平公は村上天皇の御愛子にて、高明の婿なり。天皇御即位以後も御病癒ざるにより、爲平公御太子に立ち給ふべきと人皆思ひけるに、實頼と高明と不知に成り給ふ故にや、村上御遺勅なりとて、實頼のはからひにて守平公を立て、東宮とす。然れども、天皇御惱しは、さかんに御座あれば、承らへて天下を知召さんも、如何と思召しけるに仍て、朝政多くは實頼高明師尹など、して執行ひ玉

ふ。然るに安和元年三月廿五日、春も漸く暮れ、梢に  
残る鶯の聲とりどりなるに、鳳閣の西右近の馬場、高  
明卿の亭宅へ藤原千晴中務少輔源繁延武藏介藤原善  
時僧の蓮茂等を招きて巡盃の興を催さる。酒宴半  
すぎ、座も右次なる折しも、高明卿仰せられしは、旁  
會合するに、事更に散花をふしむにあらず、偏に頼  
み申度き事の候ふなり。叶へ給ひてんやと最かる  
しく宣ふ。人々承り、さても事新しき仰せや候。  
たとへ如何様の御大事にてもあれ、身に叶ひ侍らん  
程の御事はと、口をそろへ申しけり。高明うち笑み  
て、内々頼母敷人々なりと存し侍りし事少しも相違  
せず、喜び入る處なり。逆もの事に此上にも一身同心  
の旨子細あらじと一紙の誓言をとめ置かれ侍らんや  
とて、料紙硯を取出し給へば、其こそ最易き事に候  
ふとて、酔の紛れに、伊勢石清水加茂春日近くは天  
滿天神殘る處なく書入れ、頓て誓紙を差出す。恐な  
りとも云ふ計りなし。且く座定りて高明卿小聲にな

つて云く、別儀にてもなし、皆々存じのごとく爲平  
公御太子に立ち給ふべきの所に村上の遺勅なりと事  
よせて守平を春宮とす。爲平公は、天皇の御愛子な  
れば、天皇も是れこそ思し召るべきに、實頼が計ひ  
こそ奇怪なれ。爲平の御心の内御痛しくは思はずや  
旁は名將の後胤なれば、義兵を起し我本望を果し給  
はれと涙と共に宣ふ。人々さして思ひの外の事なれ  
ども、今更に辭退すべきにあらねば、是れは御大事  
の思し召し立也。去りながら斯く申し合せ侍るうへ  
は、兎にも角にも早く評定然るべくとあれば、其時繁  
延申す様は、千晴は爲平公を御伴してひそかに本國  
に趣き近國の武士を招き旗を揚げ給へ。善時も本國  
なれば、武州に立ち歸りて、日比重恩の者どもを語  
ひ引籠り給へ。某も阿波讃岐の方へ立て越へ四國の  
武士を催し、時日を定めて都へ打ち入るべし。蓮茂  
は調伏の法を修すべし。然らば佛神の威力によつて  
本望必ず遂ぐべし。吉日定まるまでは、此の所にて

會合すべきなりとて、其の日は退散に及びけり。善  
時つくづくと思ひけるは、由無き謀叛に入れられて、  
既に我家亡んとする處なり。何か一天の君一度勅詔  
ありし御事を下として計らひ、剩さへ弓を引き矢を  
放たんとすることを勿體なし。兎角返り忠せんと思へ  
ども、又誓紙の罪のがれ難し。如何せんと思ひける  
が、老母の前に出て申しけるは、我家既に榮ふ可き  
時節の至つて候へとて、高明殿の謀叛の次第委しく  
語る。母涙をばらばらと流して、わざはひ如何思ひて  
組したると云ふ。善時申しけるは、由なき事とは存じ  
しかども、是非無く誓紙を留置さ侍る上は、何とて辭  
退す可き道こそ侍らね。母大に立腹して云はく、汝よ  
く聞け、誓紙の科尤も免れまじし、併ながら神は非禮  
を請け給はずと云ふなれば、是れは又忝くも天子  
に向ひ奉りて、矢をはなち弓を引くべきとの誓紙、  
一天の主を尊敬するは正し。主に弓彎くは正しから  
ず。正しき者の頭には神寓り給ふ事明らけし。誓約

を背くを非禮と云はんや。是れを禮と云ふべきや。  
誓紙の科大ひなりと云へども、なんぞ是れ正にしか  
んや。早く返り忠せよ。左なくば我奏聞して汝も共  
に罪せんとあら、かに申さる。善時今は胸はれ心定  
めてければ、畏り入り候ふとて、其の夜やがて満  
仲の宿所に來つて謀叛の次第委しく語りて、其身は  
やがて歸りにける。滿仲これを聞きて事の體穩便に  
せば悪しかりなんと思ひ、急ぎ參内して事の由奏聞  
す。帝大いに驚かせ給ひ、高明を召しければ、高明  
此事とは夢にも知らず、常よりも猶聲華に見へ參内  
ある所に、檢非違使則眞出で向ひ、御陰謀こそあら  
はれ侍るにより、勅下此の如くなりとて、是非なく  
髪を剃り出家の形となし、太宰權帥にし、左遷遠流  
の罪に定まりける、其れよりして師尹を左大臣とし、  
藤原在平を右大臣となさる。備檢非違使をつかはし  
繁延并に僧蓮茂を捕へて拷問するこそ痛はしけれ。  
餘りにつよく責めければ、さらば殘らず白狀せんと、

左大臣高明卿の計らひにて、式部卿の宮を取り立

て、東國に趣き軍兵を起し、御即位させ奉らん。此  
事本意をとげば、繁延は播磨國を賜はらん。蓮茂は  
一度に僧正にならんとて、かゝる目に逢ふなり。藤原  
千晴も同類なりと申すによつて、源滿季に二百餘人  
を相そへ、千晴并に其子久頼、其外從兵を捕へて禁  
獄す。千晴僧蓮茂をば、猶も拷器に掛けて謀叛の意  
趣なほも徒黨を責め問ふ。餘りの堪へがたさに、蓮  
茂聲を上げて南無歸命頂禮金剛瑜伽秘密教主胎金兩  
部諸會聖衆傳灯阿闍梨耶龍猛龍智助け給へと、大聲  
上げて唱へければ、一乘密宗の力にや、拷木斷々に  
をれしかば、死罪一途に定まりてける。借て善時は、  
此こと本意を遂げずば、身のため悪しかりなんと思  
ひ、ひそかに滿仲に語りしかば、善時神妙なりとて  
賞を給はる。かゝりしかば大内騷動甚し。京中の男  
女今もや世の亂れもこるやと、子をさかさまに負ひ  
泣き喚ぶ。軍馬の馳遠く音天地に轟き、洛中洛外騒ぎ

あへり。

高明殿住宅を焼き拂ふ事

同四月二十三日檢非違使源滿季、藤原保昌等に仰  
せて、高明卿の住み給ひし西の宮の家を焼拂ふ。昔  
秦始皇項羽がために亡されて、咸陽宮に火を放らし  
かば、三十六宮三月が中烟火片々たりとかや。高明  
卿さしも目出度く住みなし給へる屋形、一片の烟と  
登り焦土となるこそ哀しけれ。

滿仲將軍に任せらるゝ事

文武の兩道を以て世を治むるの中、急なる時は武  
を以て治む。此のたびの事若しゆるかせならば、騷  
動の亂れ天慶の如くにもあるべきに、早速にしづま  
りて、朝廷無事なるは滿仲の功勞なりとて、正四位  
下左馬助源朝臣滿仲を鎮守府將軍に叙し、左馬頭に  
任ず。これよりして威名大に形れければ、源平藤橘

其外諸家の軍將等日々月々に門前に市をなす。

滿仲内の昇殿の事

今年八月十三日改元あつて、安和元年と云ふ。滿  
仲内昇殿を許さるゝとの沙汰あり。爰に清原秋忠と  
て僅かなる公家あり、高明殿流罪の事を憤つて、如何  
にもして滿仲をなき者にするならば、高明召しかへ  
されん事疑ひなし。誠や滿仲昇殿をゆるされ出仕す  
ると聞くなれば、其夜闇討にせんと事にふれて之を  
妬む。雲密三四輩も語ひ密々用意を構へける。忠秋  
獨り滿仲を恨むる事多し。忠秋の母若かりし時、去  
る人の通はれしに其人世を早くさり給へば、寡にて  
居り、高明殿も内々云ひより、秋忠を生めり。然れ  
ども世の嘲りを憚り、前の父の氏なれば、清原忠秋  
と名乗せたまひ、十二三歳の頃より村上天皇に仕へ  
奉り、今冷泉院まで宮仕へしけるなり。去るによつ  
て斯る思ひ立もありけり。十一月十五日豊明の節會

の夜、殿上にて打果さんと云ひける由、滿仲仄かに  
聞きて、我れ今武家の棟梁と云はるゝ身を持ちて、  
なほ公家ばらに相計られやみくと討たれなば、一  
身の耻のみならず、源家萬世の名を下さんも心愛し。  
身を空うして君に仕へるこそ忠臣といはん。所詮、  
謀ごとを以て此の難を遁ればやと、藤原仲光に仰せ  
て其の用意ありけり。郎等に渡部源五綱と云ふ者あ  
り。罷り出て、此度の御件には、某を御つれ給はり候  
へ。其ゆゑは仲光殿は物のわかちを能く知り給へば  
存じながら破り侍らんも、後の御尤めも難儀ならん  
某は未だ二十にもたらざれば、大内の例を少々破  
りても苦しからず。又は若氣とも御宥し侍らんかな  
れば、是非御件にはと云ふ。滿仲さ、渡部が申す所  
其ゆゑありと許さる。既に其夜にならしかば、滿仲  
は裝束の下に金作りの小太刀を帶ぎ、殿上の方へ歩  
み進む。爰に火のほのくらき方に、三四人計りの人  
陰見えけるが、將軍と見るより立ちむかはんとしけ

るが、満仲のてい、装束の下に太刀帯けるを怪み咎む。是こそ件くだんのくせ者よと、彼の太刀をさぐり出し、柄つかを持って四五寸計はかりもぬきくつろげ、斯様かやうの時は、必ず天魔てんまのわざにて事の難儀なんぎも起るとなれば、左様の時は此太刀にて一當々あてあてんための用意よういなりとて、又鞘さやに納め、さらぬ體ていにて通りける。火の光に輝かがやき合ひ、閃ひらきければ、彼の者等魂たましひを失ひ、待ち請うけたりし甲斐かひも無く、をめぐとにげさりけり。されども、出いでさまには討うんと云ふ所に、源五跡げんごせきより來りぬ。其體てい只ただごとにあらず、布衣ふいの下に腹巻はらまきし、黒塗くろぬの太刀をはき、庭上ていじやうにかしてまじり、殿上てんじやうの方を斜眼しやくがんめつめ、目めもはなはず守り居たりし類たぐひつきの威いしさは、肝魂かんたましひも失うせる計はかりなり。主君しゅきんの事に逢あはらば、何方いづかまでも切き入らんと思ふ、氣色けしき見えしかば、今夜こんやの闘たたかひは止めにけり。御遊みあそび終はつて退出たいしゆつある。満仲如何思まんちゆういかおもはれけん、藏人くらうじん成道じやうだうを招まき、此太刀少々こゝろ仔細しさいあり、若し御尋おんたづねもあらん時は、必ず上覽じやうらんにそなへ給へとて出てにける

次の日秋忠方の公卿内奏申されしは、満仲如何に武將ぶしやうの役に備はりたればとて、腰刀こしななを抜きあらはし、上うへをも恐れざる候さう、傍若無人ばうじやくぶじんに御座候おんざさうふと日々ひびに奏聞そうもんある。去れどもさして御咎おんがめもなかりき。其夜そのよ彼太刀たがは木太刀きたがなる事世ことよに露見ろけんあれば、忝かたじけなくも勅定ちよくてう有りしは、當座たうざの耻はぢを遁のがれん爲め、よこたへ差たれども、後日ごにちの訴うたへを恐れ木太刀きたがを帯おく條じょう神妙しんめうなり。さしも目出度めでたさ節會せつかいの座ざを穢けがさずして、災わざはひを鎮しづめ身を全いふして朕みづかに仕つかふ。これ忠臣ちゆうしんにあらずやとて、却かへつて寂感じやくかんに預あかり、剩あまさへ沙金さきん、綿絹わたぬいなど下くだし給たまひける。それより勅ちよく有りて、満仲まんちゆうには兵杖ひやうじやうを帯おし、上殿じやうだんありて、禁中警衛きんちゆうけいゑすべしと命めいぜらる

多田五代記 卷第一 終

多田五代記 卷第二 目録

- 秋忠行春等謀に依つて満仲勅勤を蒙かかひる事
- 渡邊綱母の命に代り并に勇力の事
- 渡邊系圖の事
- 源頼光平吉秀を憑たのみ吉秀心替かひの事
- 橘姫海に沈しづむ事
- 六郎頼光并に母公若君を奪うばひ捕とる事
- 六郎頼公卿に尋ね會あひ并に金時出づる事
- 渡邊荒童子に値あふ事
- 満仲勅勤を有あされ并に秋忠行春罪科ざいこの事

多田五代記 卷第二

多田兵部 輯

秋忠行春等謀に依つて満仲勅勤を蒙かかひる事

去れば昔、安和二年冷泉院御即位ご即位のころしも、満仲朝臣あそみの權威けんゐ慕あこみ、武名ぶな勇功ゆうこういよ／＼顯あはれける。此の武將ぶしやう内うちには仁義にぎぎの道正みちただしく行なひ、外そとには禮節れいせつ厚あつくして、帝みかどに仕つかへ奉たて忠信ちゆうしんありければ、上うへに南面なんめんの位正ゐただしく、下した北面ほくめんの禮讓れいじやう行なはる。満仲まんちゆう常に吐握とくたくの勞らうを自みづかにし、務つとめて英雄いゆうゆうの心を撃うければ、天下てんかの諸士しよし心服しんぷくする事、市いちに歸かへするが如く、水の卑ひに流ながるゝが如し。先代せんたいにも例れい少せうき武將ぶしやうなりとぞ人皆ひとみな稱譽しやうよしける。然しかるに佞臣ねいしん清原秋忠奸曲せうげんしゆうちゆうかんきよくの心を發はし、満仲まんちゆうを讒ざんし喪なはんと、水瀬みづせ行春ぎやうしゆんと云いふ奸臣かんしんを語かたらひ、策はかりごとを違ちがふしける。同十一月二十日の夜、大内縫殿陣おほうちぬいどのぢんにあや



しき人影の見へしを、是は何者ぞと尤む。此男たち走り逃しを人々追つめ見るに、未だ見なれぬ男なり。何人なれば怪や、名乗れ〜とせめ問へどもいらへもせず。如何さま仔細あるらん。拷問せよと檢非違使に渡しければ、是を刑部に命じて、拷器に寄せんと衣帯を脱しめければ、懷中より燈つげたけ、硫黄など出たり。さればこそ仔細ありと、猶も拷器に掛け水火間なく責む。餘り強く責めければ其時白狀す。我は源滿仲の家人三葉五郎俊貞とて、忍の者透破なり。儲も滿仲帝位を傾け奉らん企にや、某には大内に火をさし罷り歸れとの仰せにより、勿體なくは存しが主君の命なれば、力なく忍び入り侍る處に、運命限り有て、斯くやみ〜と著はれ候と、實しやかに白狀す。人々驚き滿仲何のうらみありてか、勿體無くも天子に向ひ奉り、斯惡逆を爲らんと云ふ處に遠江國の住人、水瀬行春馳來て、儲も滿仲謀叛の企、此の如く廻文の狀を持ち候を奪ひとつて候と大息つい

て訴へける。扱は謀叛疑ひなし。何とぞ召し出し然る可とて滿仲に仰せ合されたき御事あるの間、急ぎ滿正父子共に參内致すべきの由、檢非違使成道をして仰せ給る。滿仲見咎め、亦秋忠などが讒言と覺へたり。然は有りとして宣命なれば、喩へば罪に沈むとも參らては叶ふまじと、滿仲滿正父子共に花やかに出たり、參内ある處に、檢非違使成道罷り出て、惡逆事あらはれ候ふなるはと、頓て傍らに押し入れける。公卿參内して、はやく流罪か、死罪に仰せ付けらる可しと奏す。未だ頼光鎌倉にあるなれば、彼をも召登せ、其上の沙汰然るべしと勅定なり。扱郎等の中に渡邊源五綱と云ふ者は、重罪の者なれば、召し捕つて斬罪す可しと定まりける。こゝに滿仲の舅に近江守源俊朝臣進み出て袖かき合せ申されしは、父子が事科の實否定まる迄は、某に御預け給り候らへと奏聞あるに依つて、科の輕重定まるまでとて、密々に預け給ふ。

渡邊綱母の命に代り并に勇力の事

秋忠朝臣は滿仲父子を思ひの儘に失ひ、此上は渡邊を生捕つて罪すべしと下知す。仲光渡邊に申しけるは、仄に聞く御邊、擗捕て、是非無く坐せんと沙汰あれば、一まつ武藏の方へ下向あつて、頼光公と心を合せ、君を御世に出し給へ。某は當地に留まり御形勢をも聞き届け世上の風聞を察し、其上にて臆を定め侍らん。未だ何の仰せ渡されもなきに御所を出んも云ひ甲斐なし。去るも留まるも君の御爲なり。早々下り給へと云しかば、力無く忍んで東國へ下向す。住馴れし都と云ひ、ことに恩愛ふかき主君なれば、流石餘波やをしまれて、一兩月は洛外にたち忍びて居たり。渡邊家をすて落ちぬると沙汰あれば、源五が母、攝津國渡邊に在りければ、擗捕つて來る可しとて、究竟の十三十餘人に仰付、渡邊にある母が家を取巻き内に亂れ入りて見れども亡、儲は隠し置つらんと母を取て押へ御身源五が向後を知らぬ事は

あらじ、有のまゝに申せと責問ふ。母是を聞き何者なると思へば我子の敵なり。縦ひ知りてあればとて、老たる母が身を惜み、未だ盛りの子の在所を云はんや。ましてや知らぬ事なれば、何とか云んとさらぬ體にて居たりける。武夫どもは腹を立て、口賢き女や只今は左様に申すとも、水火の責にかゝりなばなど申さては有るべきぞと、引立てんとしたり。母怒つて源五が母とは知らざるか、狼藉なる奴原と、四方へはらりとつきのけて申すやう、參れならば行くべきにいらざる男其の腕だてとあざ笑つて居たりけるを捕へんとて轟しし士共、二三間も敢なく投られて這々立擗り苦笑ひし、渡邊殿の御母ほど御座けり。我々が斯く召捕て帝都へ上らんと云ふも上意なり。一天の帝の上意を背くは大罪の女なり。何國か玉地ならねば、終には讒責の武士を増さば左右なく擗捕上さるべし。若す繩目の耻に逢んより早く存じ無きの旨言上あらば、何の仔細か候はんと云ければ、母尤も

るが、満仲のてい、装束の下に太刀帯けるを怪み咎む。是こそ件のくせ者よと、彼の太刀をさぐり出し、柄を持って四五寸計もぬきくつろげ、斯様の時は、必ず天魔のわざにて事の難儀も起るとなれば、左様の時は此太刀にて一當々んための用意なりとて、又鞘に納め、さらぬ體にて通りける。火の光に輝き合ひ、閃きければ、彼の者等魂を失ひ、待ち請けたりし甲斐も無く、をめぐるとにげさりけり。されども、出さまには討んと云ふ所に、源五跡より來りぬ。其體只ごとにあらず、布衣の下に腹巻し、黒塗の太刀をばき、庭上にかしこまり、殿上の方を斜眼めつめ、目もはなたず守り居たりし頼つきの威しきは、肝魂も失せる計りなり。主君の事に逢ならば、何方までも切入らんと思ふ、氣色見えしかば、今夜の闘討は止めにけり。御遊終つて退出ある。満仲如何思はれけん、藏人成道を招き、此太刀少々仔細あり、若し御尋ねもあらん時は、必ず上覽にそなへ給へとて出てにける

次の日秋忠方の公卿内奏申されしは、満仲如何に武將の役に備はりたればとて、腰刀を抜きあらはし、上をも恐れざる後、傍若無人に御座候ふと日々奏聞ある。去れどもさして御咎めもなかりき。其夜彼太刀は木太刀なる事世に露見あれば、忝くも勅定有りしは、當座の耻を遁れん爲め、よこたへ差たれども、後日の訴へを恐れ木太刀を帯く條神妙なり。さしも目出度き節會の座を穢さずして、災を鎮め身を全ふして睨に仕ふ。これ忠臣にあらずやとて、却つて寂感に預かり、刺さへ沙金、綿絹など下し給ひける。それより勅有りて、満仲には兵杖を帯し、上殿ありて、禁中警衛すべしと命ぜらる

多田五代記巻第一 終

多田五代記巻第二 目録

- 秋忠行春等謀に依つて満仲勅勤を蒙むる事
- 渡邊綱母の命に代り并に勇力の事
- 渡邊系圖の事
- 源頼光平吉秀を憑み吉秀心替の事
- 橘姫海に沈む事
- 六郎頼光并に母公若君を奪ひ捕る事
- 六郎頼公卿に尋ね會ひ并に金時出づる事
- 渡邊荒童子に値ふ事
- 満仲勅勤を有され并に秋忠行春罪科の事

多田五代記巻第二

多田兵部輯

秋忠行春等謀に依つて満仲勅勤を蒙むる事

去れば昔、安和二年冷泉院御即位のころしも、満仲朝臣の權威募り、武名勇功いよく顯はれける。此の武將内には仁義の道正しく行ひ、外には禮節厚くして、帝に仕へ奉て忠信ありければ、上に南面の位正しく、下北面の禮讓行はる。満仲常に吐握の勞を自にし、務めて英雄の心を撃ければ、天下の諸士心服する事、市に歸するが如く、水の卑に流るゝが如し。先代にも例少き武將なりとぞ人皆稱譽しける。然るに佞臣清原秋忠奸曲の心を發し、満仲を讒し毀はんと、水瀬行春と云奸臣を語らひ、策ごとを違ふしける。同十一月二十日の夜、大内縫殿陣にあや

しき人影の見へしを、是は何者ぞと尤む。此男たち走り逃しを人々追つめ見るに、未だ見なれぬ男なり。何人なれば怪や、名乗れ〜とせめ問へどもいらへもせず。如何さま仔細あるらん。拷問せよと檢非違使に渡しければ、是を刑部に命じて、拷器に寄せんと衣帯を脱しめければ、懐中より燈つげたけ、硫黄など出たり。さればこそ仔細ありと、猶も拷器に掛け水火間なく責む。餘り強く責めければ其時白狀す。我は源滿仲の家人三葉五郎俊貞とて、忍の者透破なり。儲も滿仲帝位を傾け奉らん企にや、某には大内に火をさし罷り歸れとの仰せにより、勿體なくは存しが主君の命なれば、力なく忍び入り侍る處に、運命限り有て、斯くやみ〜と著はれ候と、實しやかに白狀す。人々驚き滿仲何のうらみありてか、勿體無くも天子に向ひ奉り、斯惡逆を爲らんと云ふ處に遠江國の住人、水瀬行春馳來て、儲も滿仲謀叛の企、此の如く廻文の狀を持ち候を奪ひとつて候と大息つい

渡邊綱母の命に代り并に勇力の事

秋忠朝臣は滿仲父子を思ひの儘に失ひ、此上は渡邊を生捕つて罪すべきと下知す。仲光渡邊に申しけるは、仄に聞く御邊を捕て、是非無く坐せんと沙汰あれば、一まづ武藏の方へ下向あつて、頼光公と心を合せ、君を御世に出し給へ。某は當地に留まり御形勢をも聞き届け世上の風聞を察し、其上にて臆を定め侍らん。未だ何の仰せ渡されもなきに御所を出んも云ひ甲斐なし。去るも留まるも君の御爲なり。早々下り給へと云しかば、力無く忍んで東國へ下向す。住馴れし都と云ひ、ことに恩愛ふかき主君なれば、流石餘波やをしまして、一兩月は洛外にたち忍びて居たり。渡邊家をすて落ちぬると沙汰あれば、源五が母、攝津國渡邊に在りければ、搦捕つて來る可しとて、究竟の十三十餘人に仰付、渡邊にある母が家を取巻き内に亂れ入りて見れども亡。儲は隠し置つらんと母を取て押へ御身源五が向後を知らぬ事は

て訴へける。扱は謀叛疑ひなし。何とぞ召し出し然る可とて滿仲に仰せ合されたき御事あるの間、急ぎ滿正父子共に參内致すべきの由、檢非違使成道をも以て仰せ給る。滿仲見咎め、亦秋忠などが讒言と覺へたり。然は有りとして宣命なれば、喩へば罪に沈むとも參らては叶ふまじと、滿仲滿正父子共に花やかに出たり。參内ある處に、檢非違使成道罷り出て、惡逆事あらはれ候ふなるはと、頓て傍らに押し入れける。公卿參内して、はやく流罪か、死罪に仰せ付けらる可しと奏す。未だ頼光鎌倉にあるなれば、彼をも召登せ、其上の沙汰然るべしと勅定なり。掎郎等の中に渡邊源五綱と云ふ者は、重罪の者なれば、召し捕つて斬罪す可しと定まりける。こゝに滿仲の舅に近江守源俊朝臣進み出て袖かさ合せ申されしは、父子が事科の貸否定まる迄は、某に御預け給り候らへと奏聞あるに依つて、科の輕重定まるまでとて、密々に預け給ふ。

あらじ、有のまゝに申せと責問ふ。母是を聞き何者なると思へば我子の敵なり。縦ひ知りてあればとて、老たる母が身を惜み、未だ盛りの子の在所を云はんや。ましてや知らぬ事なれば、何とか云んとさらぬ體にて居たりける。武夫どもは腹を立て、口賢き女や只今は左様に申すとも、水火の責にかゝりなげなど申さては有るべきぞと、引立てんとしたり。母怒つて源五が母とは知らざるか、狼藉なる奴原と、四方へはらりとつきのけて申すやう、參れならば行くべきにいらざる男其の腕だてとあざ笑つて居たりけるを捕へんとて犇さし士共、二三間も敢なく投られて這々立舉り苦笑ひし、渡邊殿の御母ほど御座けり。我々が斯く召捕て帝都へ上らんと云ふも上意なり。一天の帝の上意を背くは大罪の女なり。何國か王地ならねば、終には讒責の武士を増さば左右なく搦捕上さるべし。若し細目の耻に逢んより早く存じ無きの旨言上あらば、何の仔細か候はんと云ければ、母尤も

と應じつ、我子の爲に棄ん命、露許りも惜からざれば行べしと、傾掌してぞ出てにけるをとり足とり源五が母を搦めて、綱が行末を尋ねんと、只今六條大宮を通ると云ひ渡りけるが、綱蜜に之を聞き思ふ様、我れ實の母にてもなし。吾孤にてありしを孕生長給はりし其の恩を報せずして、却て愛目にあはせ申す事人倫の道ならず。亦然りとして我敵の手に渡りなば、君の先途を見届けず却つて不忠の臣となりなん。身がな二つ、一つは君を輔け、一つは母を助けたやと、母の通りし方を見やり足すりして居たりしが、屹と思ひ直し、いや／＼頼光公の知勇凡人の所爲に非らず、母は敵の手に渡り水火の資に懸らん事、五刑三千第一の不孝也と、跡を慕ひ追つかけ行く。五條通りにて追付く。監輿の棒を引留め、此れは綱が母にては無きか、我が行末を知らん爲ならば母をかへせ、我索に掛らん。さなくば己れ原一人も残さず頭ねぢさつて捨んと云ひければ、磐固の武士是を見

て、いや／＼貴殿出て給ふ上は母を連行くに及ばず。和殿を尋ん爲なれば、母をば返し申べし。其太刀此方へ給はれ。綱聞きて、先／＼母を出し給へと云へば、否々御身索かゝり給はざる中は、出し申すまじと、震ひ／＼云ひければ、綱聽きて然らば綱を掛よとて、吾と繩をぞ掛りける。母は是を見て嗟平情なや源五、我は老木の花咲く事もなき者、明日をも知ぬ露の身の何命の惜からん。和殿は未だつゝや二十に足ぬ身の若木の梅の冬籠り、春待ち得べき身を持ちて老たる母を憐れんて来る事の愛思やと、抱きつきて歎かるとなり侍りし御恩の程、報するまでこそなくとも吾ゆへ罪に沈め申さん事、勿體なさよ。勅勘の身なれば一度遁れ出たりとて、籠の内の鳥の如し。是れ皆前世のむくひなり。返す／＼も御恩送らず討たれん事の口惜やと、鬼の様なる源五も東西知す泣きにける。除所の見る目も哀れなり。流石にたけき武夫

も皆々袖をぞぬらしける。時刻移りて悪かりなん、此方へ／＼へと引分くる。母は夢幻の心地して情を知らぬ武士共や、暫く名残を惜ませよやと悶へ焦れ玉へ共、耳にも兎角聽入らず源五を引連れ秋忠が前にぞ引出だす。秋忠悦び、密に河原にて頸を刎ねよとあれば六條河原に引出す。なはとりは山野源内春次大山太郎春道とて世に知れたる大力、是ぞ大事の因也と、源五につけたる繩をば我帯に結び付たり。太刀どりは武邊末永と云ふ者也。敷皮敷せ西向にしたり。源五目を怒らかし四方を皆みまはし、如何に末永汝は日外の遺恨を以て望んで打手に出つらん。悪くさるなば、頰骨に喰付べしと眼を見開き申ける。髮筋さかさまに指あがり、噴る體爲身の毛も豎つ計りなり。末永聽きて何條我手にか切んず。腹喰付んとや。いらざる口をさかんより最後の念佛申せ。それ思ふべき所にて思へ、歎くべき時歎かざれば不覺なり。無益の事を云はんより、心を静め實の道を

もとめよ。源五聞き、誠に和殿は善知識なり。有難し、末永殿去れば雪仙童子は虎を拜し、釋尊は鬼神を禮し半偈をうく。我は亦和殿を頼まんで生死の苦海を渡り、彼岸に著き惡所を逃れ、惡しきと思ふ奴原を一々に踏殺し今の無念を晴さん。結縁あれや人々と、大聲あげて笑ひける。末永腹を立ち、いて汝に笑はせんと、太刀すわと抜打たんとすれば、突と立て索どりに引立て飛ぶが如くに走りける。譬へば杖に係ける荒馬がはなれて蒐るに異ならず。大力の癖なれば飛鳥の如く、或は曠野に虎を放ちたる如くにて敢て追付者はなし。無殘やな繩取は微塵に碎け失せにけり。源五は南無八幡と云ひつゝ、兩手をのべれば、太く戒めたる繩寸々に切れたりける。とある木陰に立より息つき居たりしが、末永殿に思ひ知せんと、傍なる大木ねぢさつて真向より胴をかけ、落花の如くうち碎き其の太刀を奪ひとる。磐固の武士も、此を見て人間にてはなきぞと、太刀長刀をうち

捨て東西に逃失せけり。源五は又母を肩に引かけ、渡邊に立ち歸り、知る人の方に預け置き、其の身ばかり東國にぞ馳せ下りける。

渡邊綱家來歴の事

茲に、箕田源氏一流の名家有り、姓は源、氏は渡邊、字は源五、諱は綱、其始祖を委敷原ねるに王子を出て遠からず。かけまくも、忝なくも嵯峨天皇の王子源融公に源氏の姓を賜ひ、左大臣に任じ從二位に叙せらる。贈諡于從一位、世號河原院是也。融生源昇、昇生源仕、仕得罪於天皇、貶流于武藏國箕田、仕生源充於箕田、名源次、充食采邑於武藏國箕田、而生渡邊綱於箕田、號之箕田源氏、又曰嵯峨源氏是也。仁明天皇四代之孫源敦養之爲子、敦者多田滿仲之孫也。綱生源久、號之松浦源大夫判官、始住肥前國下松浦郡、因爲氏改松浦源大夫源久、依之、關大臣より以來一字名乗也。是れ亦松浦の祖也。家の紋は

三ツ星ニツ引き兩棍の葉也。其後數代を歴て松浦肥前守義、將軍義教公の恩顧を蒙り、故に御腹巻錦絆切毛氈鞍履等を賜ふ。今家に在り。去る嘉吉九年六月十四日義教赤松滿祐が爲に弑せられ玉ふ。即ち計音平戸に開へ上京して、心に赤松征伐の寄手に加はらざる事を恨みて、頻りに弔禮を齎る事感戀なり。是に於て鐵衣を脱て薙染の身となり、墨の衣を身に絡ひ、其名を天叟と號し、終に平戸に歸る。剃て善山普門禪寺を建て、義教公の尊像を安置し、朝夕香華を供し、苗裔の敬仰止むこと無きに及ぶ。其昔義教公御前に源義出仕の時好んで赤烏帽子を著朝す。故に義教公自ら其貌を圖して、而して之を源義に賜ふ。義之を拜戴す。義拜戴の後南禪寺に寄進すと云ふ。されば世の諺に數寄には肥州の赤烏帽子と云り。其子源鎮信、文武の良將也。剃髮して宗靜と號す。式部卿法印に任ず。然に仕は箕田に播遷せられし時充を生むに由て、充は無官無位にして卒しぬ。是皆箕田源氏の

支流也。其折しも母源五を懐胎しけるが歎の内に平産す。一七夜に丁つて其母死ぬ。源五孤にてありしを充が娘清子はを懐きとつて哀み養ふ事實子の如くす然れども家貧ければ、とり重ねたる歎きの中に又歎きを重ねぬ。姨思ひけるは父源次未後に遺言せられしは、此子もし男子ならば、滿仲公を頼み奉れと云ひ置きければ、いざや都に登り、此子が天命に任せんと、乳母一人つれ我が懷に抱えて、遙々と山川江海を凌ぎ、越えて二條の御所に來り斯く細々と云ひ入ければ、滿仲召して一度之を見て奇とし、麟兒鳳雛の神童よのつねの器にあらざれば、よく守立て生長よとて、攝津國渡邊と云ふ所にて、所領二十町給はつて乳母の領に下行して養育し、十三歳にて召出され君邊をさらず勤仕し、十五歳にて渡邊源五綱と名乗り器量人に勝れ、力強く知恵かしく、文武仁義の道に依れり。有る時源五、十五六歳の時、彼か力を試し見給ふに、五十人許りにて上げる大石を輕々と捉

げ、曳と云ひて高屏を擲越ければ、滿仲舌を卷き玉ふ。二十計りにては日本に俊者なかりき。武勇の名畧顯はれ、世上に其名高き源頼光の武臣四天王と稱する其の一人なり。世風毛の美を繼て、武家の棟梁日域の臥龍、源家治世の輔佐たり。

源頼光平吉秀を憑む吉秀心替の事

同じく十二月六日藤原仲光が使鎌倉に下りて、偕も君御父子御召に依て参内ある所に勅勘を蒙せ給ふとて、御行方の知れさせ候はず。承れば御一門の御方に御座とも、又は京童へのとり沙汰には、須摩の浦に遷れさせ給ふとも申し、讒者確かに知れ侍る上は、彼の方にかけ入り頭ねお切て棄てんと存ずれ共、君の御爲還つて罪深かるべしと存じ候へば、口惜くも御屋敷を守り徒に罷り在り候、定めて御召文参るべし。御用意候へと大息ついて申し上る。頼光驚き帝の勅勘は是非もなし。讒者有と云へは口惜しや。偕は討

し見給ふに、五十人許りにて上げる大石を輕々と捉

て上り其奴原を討つて棄て儘なきの旨を奏聞するか  
又は此所に引籠り討死を究るより外別義なしと宣へ  
ば、御母儀は聞き給ひ、死罪とも流罪とも實否知れざ  
る中は、暫く何方にも忍び、有無を聞き定め其後如  
何様にも定め給へ。帝の恐れも候へば、今一度は城  
を出て給へと再三諫言ある故、母公并に頼光の妾照  
日上、又は千代若九四人、照日上の父相摸の住人平  
吉秀が館に入給ふ。吉秀大に驚き、こは無念の御事  
や、去りながら、天は誠を照し給へば、最頼母敷  
榮へ申さん。某が宅にて時節御待候へと、最頼母敷  
もてなしけり。さればにや人間の身あれば必ず病あ  
る習にて頼光は心地例ならず打腫ませ給ふ。人々枕  
もとに立寄様々看病あると云へども、治術力を失ひ  
露命糸を懸殆く見へ給ふ。頼光重き頭をあげ人間の  
命は生るより定あり。三界の導師釋尊だに梅檀の烟  
とのぼり給へば、泥んや白地の凡夫をや悲むべきに  
あらね共、時こそあれ我今終りなは父上を誰あつて

世に立て申すべき。其上母上を始め、何れも闇夜に迷  
ひ給はんと思へば惜き命なりと、涙にかきくれ給へ  
は母公を始め奉り皆々涙に咽つゝ、兎やせまし角やあ  
らんと悲みける。實にや世の中と人の心と飛鳥川、  
早くも替ると聞きしかど、是は又睦まじかるべき御  
中なる吉秀俄に心替り、長男吉國次男秀吉を近付け、  
如何に汝等よくさけ、頼光は勅勘の者也。殊に重病  
を受けたり。是を思ふに佛神にも棄られたり。總し  
て婢は素他人なり。殊に我娘は妾なれば是れ實の聲  
にあらず、運命盡ぬる者どもと憐みて、此事上聞に  
達しなば我々か一家の滅亡なり。搦とつて京都に上  
り、恩賞を望まんと云、兄弟來り是こそよき御企也我  
々も内々左様に存じしかと父上の御心を憚り兼て申  
出さず候。未だ頼光命のある内に急ぎ都へ引上り給  
へ頼光は大力の聞へあれば少勢にては叶ふまじと一  
度に大勢押入り、手とり足とり索をかけ蜘蛛十文字  
に結てぞ搦めける。照日の上は夢現とも辨へず、所

詮斯様の浮世に存へんよりは、死んには如かずと思  
はれしが、自も父上と一所と思召さん耻かしさよ。心  
の内の曇らぬを夢許りも知せ奉り兎にも角にもなら  
ばやと思ひ、忍び入らんとしけれ共、四方殿しく固  
ぬれば入るべき様もなし。如何はせんと立ちたりし  
が思ひ濟して屋の上に登り、見おろして是よりも飛  
びなば五體も碎け失ぬべし。好々逆も死ぬる命惜む  
べき身にあらずと只一筋に飛給ふ。男とても目暗む  
べきに、斯かる女性の事なれば、暫く消え入り給ふ、  
良ありて息出で御傍に立より、嗟乎うとましの御形  
様やと格子にとりつき、落つる涙に搔暮て居たりし  
が御見参に入るも耻かしや、定て自も父と一處とこ  
そ斯淺間しき企を同心しつらんと思召さるべき事の  
辱しや。自ら夢にも存じ侍らず、重き病氣の其上に  
斯押込られ給ひ、苦くも嘸や口惜く思召れ候はん。  
如何に御臺所千代若殿の御心の内推量られて御愛し  
や。心にまかせぬ愛世やと、人々を見合せて消入やう

に歎ける。母公涙を押へ御身の心常々知りたる事な  
れば父と一處となどや思ふべき。只兎に角斯程まで  
愛目を見つる我々が果報の程こそ恨みなれ。親とな  
り子と也夫婦と生るも此の世ならぬ縁ぞかし。今生  
の名残惜まじと互に目と目と見合せて、且く涙に咽  
ばる。無慙やな、頼光は病氣愈々頻にて前後覺え  
ず御座しか、亂るゝ心を取直し、御身も親の子なれ  
ば、兼て契も變ずべしと思ひしに、斯心を我が方に  
通はしけるかや。憑しや流石某ほどの者が斯くなり  
行くこそ天命のつきぬる故也。昔般紂王は夏臺に囚  
はれ文王は美里に捕らはる。上古猶此の如し。去り  
乍ら病氣だになかりせば、斯やみくとはならじも  
のを、御身は若木の末かけて匂も深き園の梅、盛の春  
を待給へ。身は朝露の置き初めて日かけ俟間の命な  
り契りをきにし兼ことを思ひ出し候ひなば、一遍の  
念佛をも廻向して給はれと宣へば、照日上は聞て、何  
自らに末の春を待てとは、余の夫を又重よとや、父の

子なれば人と思召ぬも理なり。去り乍ら貞女の道は背かじと、思ふ心を竹ならば割ても見せ進せたや。所詮濁りし世に住めばこそ君より先にと思へばいと涙はせきあへず。又倒れ伏てぞ歎きける。母公涙を押し短氣は人の疵也必ず命を全ふし、我々が後世を吊らひてたび給へ。假令ば蓮花は淤泥の中より出て其穢しさに染まず、清漣に洗つて潔く香あり。其の蓮花を取つて其淤泥を取るべからずと云ふなれば、父が心は濁るとも、御身をなどか覺束なく思ふべしやと宣ひつゝ、一首斯こそ聞えける。

濁江に生るはちすの花なれど、そまぬ心は人知るらめや、

照日承りこは忝な御歌やと取敢えず返し、

濁江に流れて下る石清水、我身獨はすむ

甲斐もなし、

と聞へしが、是迄なり人々と、守り刀をすはとぬき心もとにさし通し、あつと計を最後にて消いりける

ぞ痛はしき。人々驚き救はんとすれども甲斐をなき。君が一日の恩の爲姿が百年の身を誤るとは誠なる哉

橘姫海に沈む事

昔景行天皇の御宇に東國の夷とも謀叛しけるに由て、日本武尊を大將として東國へ征伐の爲に遣はされける。尊先づ伊勢大神宮へ參詣し倭姫にあふて寶劍を給つて進發ある。駿河の國に到り給ふ時、野へ出て鹿を狩る夷ども、火を放つて尊を焼殺さんとす。尊帯さ給へる寶劍、自からぬけて燃え來る草を薙ぎ拂ふ。尊又燧を鑽つて火を放つ。其火敵地の方へもえて行き悉く燒き殺さる。其れより相摸の國に到り、上總の海を渡る時、風悪くして尊の御船危かりければ、皆色を失ひ駭く處に、橘姫と云ふ妾を、旅途の御伽に相具し給ひたりしが、是の難風は龍神の尊へ祟をなすならん。我れ君の命に代り申さんとて、自ら海に沈みしかば、忽ち風穩かになり、御船岸に

つきしとなり。橘姫は尊の御命にかはり、今の照日の上は、情を忘れずして自殺す。恩の爲に命を輕んずる志、とりくにも、優しかりける事ともなり。

六郎頼光并に母公若君を奪ひ

捕る事

平吉秀は情なくも三人の人々を籠輿に取載せ、磐固の武士の打圍み、日月の光をだに見せざれば、更に夢現の心地せり。昔一行阿闍梨寶鏡が譏言によつて、火羅國に移され給ひし時の苦しみも、是にはいかて勝るべきと思はれけるも理りなり。住馴れし古郷の方を早晚跡になしつゝ、唐河原、砥上原、大磯を過ぎ小磯を歴て湯本宿と聞きしかと、岩間を傳ふ谷の水、涙催す瀧のおと聞くさへ袖を濡しける。箱根の山に差掛り岩の陰道ふみ鳴らし、魂は山行の深さに傷しめ、愁は岸寺の故さに破る。冬も早や半過ぎ行く折なれば、雪吹き散らす松の風、山彦答へて幽に響

く斧の音、彼と云ひ是と云ひ、御心を傷しめ給ふ媒とはなれり。頼光斯くぞ打詠し給ふ。

思ひさやつま木こるてふ斧の音にいと、

歎の數を添ふとは

と聞えければ、心なき東夷共も云ひ傳へ聞き傳へて私語つふやきけり。歌とやらんは知らざれども、何となく哀に深く覺ゆるはと、皆々袖をしぼりける。其後は湯をも水をも進らせつゝ、事に觸れて様々勞り奉る。かゝるるあら夷の武さ心も和ぐるは誠に和歌の徳とかや。既に夕日西山に淪み野寺の晚鐘音信る時にこそ三島の宿につきにける。其夜の主をば卜部の尼公とて、以有る者なりしが、此子細を聞き一子六郎を招き語つて曰く、今此の囚を如何なる人ぞと思ひしか御身が父の主君満仲公の御臺公達にて御座とや。御身が父兵庫殿は六孫王より満仲公まで二代相傳の郎等なりしが、思はざるに御勘氣蒙り此所に引き籠り終に果て玉ひぬ。既に末期に及んで我こ

そ角空しく果つるとも努々六郎捨へからず。一度は君の御目に懸て下部家を繼がせ亡父に喜せよと申しをかれしかば、和殿成長するに付ても如何なる人も頼み君の御見参に入ばやと思ひ、我れ心あつて斯様の事をも今迄は營みたり。人こそ多きに今夜我屋に宿申す事、是れ君の御出世をなし奉り、下部の家を再び引興さんと天の與ふる所なり。天の與ふる所をとらざれば却て天の尤めありと云へば、勇力は加様の時の爲ならずや、一命にかへ君を奪ひ奉れと甲斐しくも諫ける。六郎承り父の遺言君の爲め身は七花八裂碎骨炮烙の刑に逢ともなど奪捕らては置候べき。急き足柄の方へ忍び道にて相俟ち給へと言つ。昔小碓尊女の形となりて川上梟師と云者を打ち給し例思ひ出し、郎等の山上平次兵衛宗安を招き、荒々言ひ含め、門外にて相待と、謀り合せて遊君の貌となり絹打被き銚子に土器とりそへ殿に御酒進せんと近付きよる。吉秀悦び優き女や旅の疲を晴さ

んには酒に過ぎたる薬なしと召よせ差うけ一つ酌んで女にさす所を手をむす取て少も働せず。小太刀を胸におしあて、汝我を知らずやと絹ふはと脱捨て大の眼に角をたて、はつたと噉んで曰く、是は滿仲公の郎等に下部六郎と云者也。あの人々を助て關門の外へ出し奉りあれなる男に慥に渡す可し。さなくば己か頭を脱て吾も此を避じと云へば、吉秀驚き肝魂もあらばこそ、わぢく振聲になつて云ふやうは、噫子供よ父を不便と思ひなば人々を出し進らせ我を助よ。大力士に擱れて息絶んとするはと、涙を流して云ければ、秀吉さしも敢ず、斯ある上は父兩共に打て捨んと飛んでかゝる。吉國をし留め此の人々は我々が身に丁たる敵にてもあらばこそ、只所領の望み計りなるに争か父には思ひかへん。それ出せよと籠打ち開き門外に出しける。宗安待うけ然々の御事也此方へくと御伴す。六郎今は心やすしと思ひ、如何に人々囚たまはる上はさらば此の人返さんと引起る

體にて腹引ぬき投出す。悪き男の所爲や、餘すな洩すなと飛掛る。察したりと聲をかけ、開撃の捨刀、真向小額小げさ大げさ胴ざり細腰頭腕當るを幸に、はらりくと薙たりける。其外大勢に手を負せ東西へ追散しける其の隙に、二階座敷へ飛び上り、拔道よりそつと下り、跡も見せず駆抽けて主人の御跡を尋行く。斯とは知らて大勢天井に懸上ると云へ共、大剛強の勇士下部六郎取籠たるなれば、かけ上り踏込み討ち取らんと云ふ者一人もなく、近くよりては悪かりなん、如何はせんと詮議に夜をを明しける。

六郎頼光卿に尋ね會ひ  
并金時出づる事

下部六郎は跡を慕ひ足柄山に分け入り、御前に敬て相見し忠臣の心底を演奉れば御喜は限なし。頼光卿宣ひけるは、吉秀悪心忽ち身に報ひ汝に討れ思はぬ死を致す事天網恢々更に遁る所なし。されども汝智

勇の謀略遅ければこそ我かく虎口を逃れたり。汝が働き言語を絶する處なり。殊に先祖の郎等に廻逢ふこそ天なる哉。我危き命逃れし験にや宿病忽ち瘥天命を全ふす。されば過し夜の夢に、松竹の若葉の緑末かけて榮る春にとかへりの花と云ふ事を新に瑞夢を蒙りしが、我斯く捕籠られ牽牛花の日影待間の露の身の猶仇なりし命なるに、殊に大病に侵されて苦む故、斯く夢を見る事は吉凶分ち難く我と心を疑ひしに、汝が助に遇ふ事思へば神助の靈夢なり。竹の若葉の末かけてと見し吉想に任せ、汝が名乗をば末竹と云ふべしとて下部六郎末竹と云れける。母は仰を承り忝なの御錠やな、夫の兵庫、君の御揚氣を蒙りしこと最後まで返々申せしに、斯る時節に會ひ奉り名乗まで下し賜る御恩の程、草の陰なる父亡魂こそ悦申べし。相かまへて末竹よ、愈々忠を抽て、君を御世に立て申せと、餘りの事の忝さに御前をも憚からず嬉泣にぞ啼きにける。頼光この山に御座の



程は、六郎が母が妹近き里に在けるが、童を語ひ松の落葉を搔聚め爪木を拾ひつゝ好にもてなし、朝食夕食の八木の煙たへせぬ營は、實に優しくぞ思ゆる。頼光は御不例日を追て快ければ、此山の景氣を見ばやとて峯より下り嶺を攀ぢのぼり東の方を見やりつゝ、あの雲の下にてや在んと故郷を慕ひ玉ひ、又彼照日上のことを思召し出され、涙しぐれて袂を濡すらき別れ、朝雲暮雨の御もの思ひとはなれり。昔日本武尊は橘姫に後れて、碓日峠にあがり東の方を顧て、橘姫の餘波を思出させ給ひ、吾妻と云て歎かせ給ひしより、東をあつまと云なれば、其は碓日峠此は足柄峠、其は昔此は今の事なれ共、慕ふ心は異らず。末竹も宗安も共に袖をを絞りける。遙に嵩を見給へば、雪山重上げて連なれば寒風衣に徹し、谷に望めば雲霧たなびき荆棘道に横はり、巖廻りの水の音より外露おとなふ物なし。適事とふ者としては、友呼ぶ猿の聲なほ腸を断なんと御心細き折節、人聲聞

近く聞えける。不思議や斯る深山幽谷に我ならて來る人の亦もあらじと思ひしに、是は如何様我々此に在を知つて討手の者の來るにやと、肝を消し心を迷して腰の刀に手を掛け待所に、千尋の岸壁を傳ひ岩間隠より一人の老女十六七の童子の手を引來て、我こそ山野を巡る賤女賤男にて侍る。此童子が父は武名正しき姓氏高き武功世に類なき勇士なれ共、罪を天子に得て此山林に身を匿し、夫婦薬を探り果を拾ひ是を里へ出て賣り衣食に充つ或は春夏は茂たる大木の枝を削て巢を作り鶴鷓一枝の安を得、或は秋冬は巖窟の内に冷居し仙術を學び朝來一片の霞を服し菊水を吞諸念起らざるを薬となし、今年一百五十年の齡を保つ。然れども子息なき事をなげき山神へ祈をかけ此童子を生むと雖も、山嶽にのみありて人倫の交りを知ざれば、親武士の種と云ども人間の道を知らねば唯鬼畜に身を類し禽獸と群となし、身を畜類に落さしめん事の不便さに、此子を人倫に交はらせ、

武家の事業を繼ぎ仁義の道を知せばやと願ひども、主君と頼人なし。君の神勇を窺ひ計るに凡人の所爲にあらず。さるに依て此噲童を奉る。家臣となさせたび給へ、時えて仕る君なれば、此が名乗をば金時と召れ給へ。彼本より山々峯々へ攀上り木樵薪を伐採り薬を取て所作となし世を營みける故、山へ上り谷を馳る事鹿猿熊虎よりも力勝れければ、鹿猿を捕へ朝夕の糧の料として父母を養ひ衣食を富す、身を練り力を試し勇を勵み力業早業は彼等が不斷の弄馴たる事なれば、家臣となさせ給ひ不覺をとる者に侍らず。如何に噲童、親とな思ひそ、身を委て君に事まつれ、常々云聞せし如く、我壽命迫り、來る十三日には此の世の縁つき死すべきなり。汝人間に交り能君に事まつり天下治平の功を助けよ。我後世を吊ふべからず。我死を信の死と思ふべからず。屍解坐脱立亡とて魂は飛揚して上界の仙女に至るべし。汝官祿に就て大名となるべし。其時觀臺を造り構へて

我を迎へ待つべし。其節來て遇べし。必ず行末武運長久に守るべし。如何に人々萬事は憑み申すなりと云畢て、谷の木の葉をけたてつゝ去と見えしが、忽にこそ失にける。金時も流石恩愛のなごりなれば、暫くあきれて見送り居たりけるが、頼光見給ひて恩愛の細を切せんと思召し、未練なる小冠者やなと傍なる大石提げえいと云て投給へば、弓手へひらき宙に取り、在し所にそつと置き、驚く氣色はなかりける。頼光喜び、神妙く、夫傳聞く黄石公は兩三度まで地下に履を落しつゝ張良が心を見る。汝を家臣となす上は汝が心を引見しなり。今の足踏身の剛、心剛にて大力家臣として頼し。然らば主従の盟約せん。名乗は母が望みなれば坂田噲童子金時となされける。是に付ても源五は何とかなりて在やらん。此等二人に綱を相添もつならば、日本國中に我が上に立ん武將あらじ、能々是も力なしと、柚人の住すてたる柴の編戸に暫く日敷を送らる。説者謂らく、此

坂田の金時が出處を世の人知らずして、鬼女の子と草双紙に誤り書す。確に仙士の子なる事を知ずして、流石の武士仙士の子を鬼畜に陥しむること辟ことならずや。此事跡日本列記傳にも見へたり。

渡邊荒童に値ふ事

源五綱は頼光へ謀て申上げ有無の安危を定んと、親友の方にて馬を借乗て只一人下りしが、頼光居城を忍出させ給ふと聞しかば、何國を差て尋んも覺束なしと、進退爰に極り思煩ひ、駒を控へ思案を廻し居りしが、此より都へ登りても詮なし。如何さま東國に立越なばよもや隠は有まじと亦駒を進ませ行程に、足柄山に指かゝり行べき先を見渡せば、何かは知らず七尺有余の男手鉞提げ四方を睨てひかへし煩、鬼か人かと怪しまれ、通らん路には大木を捻ぢ伏せ、斬棄たる死人は山の如し。尋常の者ならば其儘逃も失べきに、源五少しも驚かず、實も道にて聞しは、足柄

山には鬼あつて往來の者を通さずと云は是なるべし。縦令鬼なればとて何程の事の有べきぞと、馬の上より逆茂木引のけ谷へ投捨て、飢に臨みたる折節儲着これなりと、死人の肉を押切てさも甘さうに食す。件の男見咎め、天晴心ちよき男や、逆の事には是をも進んと、死人の股を押さり鉞に刺貫いて衝出す。源五是を見て、世に情ある男や、不禮は御免候へと立寄り口に含み舌打して喰にける。荒童子手を打て偕は我が尋求むる人にて御座けるにこそと思ひ、故を語り申さん。斯申す某は信州碓日の荒童子と申者にて候が、六歳にて母に後れ、七歳にて父に後れ、徒らに生立ち、武藝を好み、力業早業弓矢打物とつて恐らくは人に負じと心には存ずれども、未だ武勇の名を揚す、餘の事の無念さに戸藏の明神に參籠し祈り申す所に、神託あつて、足柄山に到り勇力を勵まさは源頼光と云ふ武將に値べし、其こそ凡人にてあらず、三國一の勇者、主君と遇なば武勇の名を末代までも

留むべしと新に靈夢を蒙りしかば、此所に來り往來の者に渡合ひ志を伺ひ試見るに、是ぞ身方にせんと存る者なし。御覽候とほり打棄たる死人は一二百も侍らん。御身の體只人に非ず、頼光にては御座すや。如何に〜と尋ける。源五さ、扱は君の武略神慮に叶ひたりと嬉くて、我こそ頼光の家臣に渡邊源五綱と云者なり。云々の事にて御行方を尋ね侍るなり、君御世の時ならば尤同道申べけれども、今は落人の御身と云ひ我も世になし者の浪人なり、科なき御身を諸共に罪に沈めて益なし。君世に出給ふと聞えなば必ず尋來り給へよと辭去て、さらばと立別れんとすれば、荒童袖に執付き、世に御座す主君を悪むは常の習、今の先途を見るこそ忠臣とも云べけれ御邊に似合ぬ御詞や、但某が心を引見んとや斯申す上は是非一所に君の御行末を尋つ、將來永く我心底を見せ侍らんと申切し居たりけり。源五聴て、よ、頼母し、此上は兎も角も御望に任すべし此方

へ來り候へと二人打連れなほ山深く分登る。かゝる所に金時末竹は四方の有さまを見居たりしが、末竹はやく見咎め、此男等が體たらく一定君の打手に來ると覺えたり、如何せんと云ふ。金時さして、何者なれば何條事の有て是まで踏たて來れるぞ我々が仕家を汚すものならば、其をは去すまじさぞ、若偽るものならば我手に掛け首捻切て捨んと、二人手を取組み細き道をぞ塞ぎける。荒童見て、世の知れたるあふれ奴原かな、目に物見せんと飛て掛る源五あし留め、何事も我に任せ給へと立寄、斯道をせくは朝家よりの宣言か亦是守護の仰か、謂を聞んと云ふ。金時さ、夫は何とも云ば云へ、我等未だ言語聞き知らず、只此道通すまじと留て仁王立に突立たり。荒童さ、去ば悪き冠者原や、微塵になさんと大きな松木捻ぢ切つて手ごろに持て斜に構ひつゝ振廻せば、金時打笑つて、優き男の腕立やと、傍にありし大石の五尺有余もあらんと見えしを輕々と提さげ、

片手を放て指上ぐれば、末竹も源五も太刀の柄に手を掛る。頼光此人聲を察し見給へば渡邊の源五なり。天晴危き事とも也、兩方我家一騎當千の郎等なり、闘諍止よと制し宣へば、四人の勇士御前に跪く。如何に源五満仲は恙なしや、源五承り、我々都に在ながら何とも面目なき事の候と、右の次第委細に申上る、頼光聞玉ひて、譏者知れぬれば罷り登り曇なきの旨を奏聞し安危をさほめん。偕それなる者はいかなる者ぞと宣へば、源五初終を申せば、扱は我武勇神慮に叶ふ嬉さよ、いて汝にも名乗を付ん、碓日の荒童貞光とめされ家臣とこそなされける。一人ならず二人ならず四人まで金鐵の郎等を扶持せし、我朝に雙ひあるまじ。是れ須彌の四王を移し四天王と言ふべきなり。實や古へ漢朝に商山の四皓か橋中を出て漢の景帝を祐けしも斯こそあらめと、御悦は限なし。四人頭を地につけ、有難の仰せ哉、最早我が君神慮に叶はせ給へば、御運ひらかせ給ん事疑ひなし。

此の上は敵何十萬にて寄來るとも、我々敵の虚實を計り謀を好んで成し、懸入り駆通り打敗り大勇を振ふものならば、異國の韓信陳勝も争てか敢て當るべき、天下の倭奸の武將ぬる公家原ども千百萬騎よせ來るとも、臭腹に聚る蠅を拂ふに似るべし。斯天下を引うけ軍して君を御世に出し奉らん事、掌の内に握るが如し。早々御上り候へと勸め進む形勢は、戦はざる前にはや勝色見せて未頼母しくそ覺えける。

備中勅勘を宥され并秋忠

行春罪科の事

満仲朝臣は讒者の虎口に依て勅勘を蒙り、憂さ思ひに打沈み、暫時逐客となりつゝ浪々の身にて御座しが、天は誠を照し神は正直の頭に宿るとかや、満仲幾程もなく逆心なき事寂聞に達し、秋忠行春が策にて、秋忠か家の子園田藤太と云者を語ひ、満仲の侍と名乗らせけると世にこれを風聞す。帝驚き思

召し給ふは、昔延喜帝は時平大臣の讒誣に由て罪なき菅丞相を流刑し給ひてこそ、焦熱地獄に落たまひ終に噴魂の煩迅雷となつて霹靂して内裏を焼拂せけるを怖しく思召し、急ぎ満仲を召出し、汝に過無き旨公卿詮議ましくて勅勘をゆるし給ひ、其の上官職共に相違あらざるの勅許なり。さて又秋忠は遠島へ流刑せられ、行春は斬罪に定め給ひて終に死刑に處せられ畢ぬ。之に依て頼光も歸浴あつて再び帝都を守護し、國を治め天下を平ぐるの功莫大なり。且諸親戚朋友の舊盟を結び修して、互ひに憂さ酷さを語て幽情を慰し、忠勤を述べられ、目出度世とぞなりにける。

多田五代記卷第二 終

多田五代記卷第三目錄

- 滿仲多田に移る事
- 幸壽丸命に代る事
- 幸壽丸の母の歎き並須達摩太子の事
- 美女多田を落ち源信僧都に値ふ事
- 法花三味院建立の事
- 滿仲京都の館強盜の事
- 拾遺に入る歌の事
- 源頼光平維仲卿息女に逢ふ事

多田五代記卷第三

多田兵部輯

滿仲多田に移る事

安和二年の春、滿仲朝臣は其身に、聊罪科なければ、二度運を開き、本の如く政務を決断しける。世に智仁勇備りたる忠臣なりと、人口嗷々と稱譽しけり。而御子多く御座さ。一男上總介滿正、次男左兵衛尉頼光、三男千代若丸、四男美女丸とて、何も影體優美にして智勇兼備へ給へり。去りし冬は思はざるに押籠られ、うき思ひにうち沈み御座しが、この春はひさかへ嬉げにして、聲花に榮へ給に付ても、つらく以爲、人間有爲の樂みは浮べる雲の如く露の如く電の如く、生老病死のかりの身也。我既に兼官寵職に預り、此上にたとへ大傅相國に登るも終に保得ることなし。老少不定の塚眼に遮るること初めて驚くべきならねども、今さらに出來たることの

様に覺えて、剃髮染衣の身とも成り、密に閉ち籠り、臨終の夕をまち、順次の曉佛の御迎を得んと此上の望みなれば、出家の御暇を奏聞ありけれども御赦免無し。かかねて奏し、職を遁れ公事等嫡子なれば満正に譲らんと宣ふ。満正の云く、我に短命の想ある上出家の望も候へば頼光へこそと申されければ、出家の望とある上はとて頼光に定まりける。之に依て安和二年春三月十五日將軍多田に入り給ひて退隠したまふ。今年五十八歳なり。同年夏五月頼光大内の守護判官代となる。

幸壽丸命に代る事

満仲朝臣は出家の御いとまを申といへども御有しなし。さては徒に數日を重ねても益なし。一子出家して九族天に生ずと云なれば、四男美女御前とて今年十五歳に成給ふ繪に書きたる女の如くなれば美女御前と召れて御慈み深く御座しを、中山寺と云ふ所

に善觀と云ふ僧の御座せしに預置き給ふ。されども惡逆類にして人をあやしむる事度々にて一山是を歎しかば、亦召歸され、傍に置て出家功德の利を説進むと雖も、我武家に生れて出家に功德ありとて争か飾を剃り落さん乎、喩一命は塵泥になげうつとも出家御有し給ひ候へと云て經の紐とくまでも無りしかば、滿仲以爲、我政道輔佐の名を汚す身に、子なればとて斯る不孝惡人は免しがたし。五刑三千にして罪不孝より大なるはなしと説玉へば、所詮うつて捨んにはと、太刀引拔き丁と打つ。はつと云うてとび失せぬ。理りや、此間中山寺にて兵法の術を學び且つ劍術を得たりしかば飛鳥の如くして、藤原仲光が家に來りてしかくの事と云しかば、此方へ入せ玉へとかくし置く。世の中の人の口ほどうたてしき事はあらず。惡事千里を行とかや、滿仲早く聞給て仲光をめし、美女丸は汝が宅にありと聞く、急ぎ首を打て見參に入べき也と仰せける。仲光畏て、未

だ御若年に候へば、一度御命に背かせ給ひ、今一度教訓申すものならば、やはか御承知なくて候ふまじし。臣不肖なりと雖も時々御異見仕るべしと敬ひて言上す。滿仲の曰く、かれが儀は惡見すてに露見あれば、是五刑第一の不孝の癡者也。去れば理の殺生は菩薩の萬行に勝れり。是を慈悲の殺生と云ふ。仲光、又御詞を返すは恐餘り有り候へ共、君の御慈悲は他人にだに御座せば、殊には御親子の御中、其の上孔子の曰く、君臣父子夫婦兄弟朋友は人の大倫捨つべからずと承る。況んや此は父子の大倫は天倫なれば輕々しく御殺害然るべからず。君常に理に暗からぬ御行跡なるに、唯今當然の大道をなひがしるになさるべきとは存じもよらぬ御事、恐れ多き申事に候へ共、若君いまだ若冠にましませば、一度は御背さ候ふ共かさねて嚴父の至諫などか背さちはさんや。不肖仲光常に申上げるは、君の御爲には一命を捨つ可きと年來御奉公仕る。争か思召し忘れ給ふべし。

某に御預け給り侍らん上はひがこと努々候ふまじし。其とても御赦免無くんば先某が首をめされて其の後はと、双眼に涙をうかめて申上ぐる。滿仲の曰く、汝知らずや、菩薩若し重罪をなさんを見ては、發心思惟して憐愍の心を以て然も彼命を斷じ違犯する處無し之れ功德を多く生ずと見へたりと仰ければ、仲光申さく、されば菩薩の行は、我身を苦め他人を助くと承る。其上金剛經に曰く、歌利王追々獸到佛前、獸在何處云、佛不忍傷生故不言所在、爲歌利王割截身體、我於此時無我相、無人相、無衆生相、無壽者相、故不生嗔恨、と宣ふ。又鳩の釋に身を掛て鳩の命を介け玉ふ事もあり。君の御子は正しく佛の爲め衆生なれば慈悲に隔はあらず。又大賢方曰く、不教而殺之謂之虐。又曰、不教而殺曰網。民、君の御子に能く孝道を教へ給はば、争か不孝の罪に陥り給んやと強諫いたせば、金言耳に逆ひ良薬口に苦き習慣なれば却つて氣色を損じ玉ひて、我が

心にまかせずば汝も不忠の者たるべし。更に他人に仰すべしと、御太刀を給り御座を立せ給ふ。仲光も道理なき怒りに觸れ詞なくすごとくと退出し我が宅に歸り、兎やせん角やあらましと思ひに餘る涙河、袖のしがらみせきかねて、暫く佇み思案がほにて固唾を呑んで居たりしが、爰に幸壽丸とて今年十五歳になる一子のありしが、つくつくと父の有様を見て御涙貌不思議也、若君の御事ばしあられなく仰出され候か、御語り候らへや父上様と云り。父聞きて、去ればこそとよ、若君を討ちて參る可しとの仰により色々御諫を申し上ぐると雖も、御憤深く御座あれば承引なければ力及ばず御請は申し、かども、同主君の事未だ御弱年の事なれば、争か討奉るべきと語り棄てぞ泣にける。幸壽丸も諸共に涙にくれて居たりしが、幸壽暫く打案し、さては爲方なの御ことや、我思ひ出したり、唐土の紀信は車にのつて主君の命に代り、我朝安倍介丸は君の矢面に楯塞つて

仲哀皇の命に代る。其流矢玉體に中る。我亦左の如し、先陣を驅て討死するもまつたく同じ理り也。我既に若君のため捨る命露ばかりもをしからじ。自ら恩を請ること他に異に誠に海の如く山に似り。意は恩の爲めにつかはる。命は義によつてかるし。今我頭をさつて是君なりと陳じ披露し給はば、さのみやはか御見知り有べきや、是にすぎたる術なしと離れ切て申上ける。父仲光聞て、さてくちとなしく申つる者かな、誠に武士の主君の命に替る事驚くべきにあらず。汝は我心を克えてしかな。去ながら老木の我はあとに残り、つぼみて出たるなてしての花よ月よと生立つ、年頃奉公いたせしも、汝を世に立てん志也。幸壽さ、今若君の爲に棄る命鴻毛よりもかるし、早々我首をさつて大君の御憤を冤止玉はんにはと。仲光以て然りとす。幸壽の云く、母上のまさに牛母の犢子を失ひ啼哭する如く嘆き給ふべし。御志のほど御勞り侍れども、斯と申しなば強ちに

幸壽丸の母歎き并須達摩太子の事

御歎きましまさば心亂れもやせん、文を殘し申さんとさらくと書とめ、肌守に髪を取りて、形見は人のなきあとの思の種とは申せ共、せめてはと思ふ計りの印なりと父に渡し、南無阿彌陀佛と聞えしが腹かき切れば則介錯し、目くれ心も消えける。幸壽丸今我先立て何の世に又も遇ふべき道ならず、殊に親子は一世の中なるに、如何なる因果の報ひにや親となり子と生れかゝる難義に逢ふ事よと暫涙に咽びけるが、時刻うつりて叶はじと泣々うすぎぬに推しつゝみ、御前に罷出て此よしを言上す。君の仰せには、克仕りたり、善々何方にも投捨ておくべしと仰せつゝ、更に悲の色も見え給はず。いかに武士なればとて流石岩木ならぬ恩愛の道なるに、吁御心強やと御前伺候の諸侍直垂の袖を絞りける。仲光の心の内こそ哀れなれ。諸人いかてか此隠密の事を知るべきなれば、主を打ちしふかく仁と皆仲光を口々に惡みける。

藤原の仲光は我宅に歸り幸壽丸が母に語らんとすれば、是は夢かよ淺ましとさうたる首を見て走寄り、はつと叫びとり付て、こは何となりたる有様やとさえ入けるも理りや、乳母も仲光ともに目くれ魂消えて泣き居たり。昔を傳へさぐりに、須達摩太子と申すは六波羅蜜の其の一つ檀波羅蜜を修行ある、財はつくる期あり希施すべきものなし。かゝる折柄隣國より波羅門來て物を乞ふ。施す物なし。波羅門さ、布施の行を修し給ふといへばこそ國を隔て里を越て遙々と尋來りたり。是非何にても御座なくばあの二童子を與たまへ。布施の行の願なれば、人の心に隨はねば其の願空しくなる行なれば、勞しくは思ひ給ふも波羅門に與へ給ふ。御母宮は花摘みて山より下り給ひつゝこの由を聞召し天にこがれ地に伏して啼哭し給へば、天地震動して御涙の落しあと赤く染り

て其の所今の世までも赤地となりてありとかや。それは亦も逢世の御座ありしが、死して歸らぬ死出の旅路、殊に親子のならひにはかたわなるだに最惜きに、是は姿も美しく智慧才覚も人にこえ、花の姿は散はて、又來る春も咲かたみ、今は紅顔緑髪も替果てて淺ましげに見へければ、共に袖を絞りける。仲光常に何事もへだてなく頼み奉る僧を一人請じける。聖宣ひけるは、母上の御歎き御理りに侍れども、さらだに女人は罪深き御事に候へば、さしも御最惜き若君の思はずも失せ給ひぬるを御吊もなく斯御歎き候ふは、惡き道へもとし長き世の闇路となりやせん、只後世を御祈あつて助け給ふをこそ親となり給ふ御情にて侍れ。先立ち給ふを歎きたまふは去ることなれども、なき人の御ためにはよみぢの障りとなりなん。其上これは主君の命に替ること義の輕からざる處と云ひ、ことには此ことわりは我々四人ならては又も知る者のなし。皆美女御前なりと

思ひ候ふ處に、若し他人にも推量せられて君の御耳に入らば、忠功も詮なからんかと様々教訓ありし御僧も、衣の袖を顔にあて感涙を押しかね給ふぞ有難き。母も少し心を取り直しければ、仲光傍に立寄り右のあらまし細々と語りさかせ、幸壽が文を母に渡す。ひらき見るに其の詞に曰く、君のため父の爲美女御前の御命にかはり奉るなり。かくと知らせ奉るも安く侍れども、あながちに御歎き候らはば長きやみぢともなり侍らんか。雪見の窓のをれ竹の、世は逆と思はし召すらめど、子に後ること例なきにしもあらず。穴賢歎かせ玉なよ。我れ浄土にいたりなば父母と同じ蓮の臺に座し、永く闇路を照しつゝ更に御恩を送るべし。人世七十古來稀にして五十の夢の世の中に、終に此身は朝顔の日影待つ間の露の身を義の爲捨つる惜からず。最後の御見參にもいらざるは、さぞ歎き給はん勞しさに、思ひおかれてそゞるに涙せきあえず、筆の立處も覺えずなん侍る。

君の爲命に替る後の世の闇路を照せ山の端の月  
あだし野に終に置べき露草の身は幸の壽なりけり  
美女御前の御こと必ずよきに勞り給ふべし。何とぞ諫めたまひ御出家をすゝめまゐらせて、二度父君の御勘氣をゆるされ給はんをこそ我れ草のかげにても喜び思ひ侍るなれば、如何なる佛事吊ひよりこれこそ我が死にける本意にて候らへ。かへすゝ御名残こそ惜く侍る也とぞ書きにける。母は是を見ていよく心も消え目もくれけれども、きつと思ひなをし、恨めしの仲光殿や、心強の幸壽やな、若君の御命に替るをばなどかは母が留むべきに、最後の有様を見もし見えもする上は、何しにかくは歎きな、我子ながらもけなげ人也と聞えしは、歎の中の喜とせめての事に思れて、最も哀は勝りける。斯くて野邊に送りける。比しも小雨降りければ、何れ涙とあらそひて、絞ぬ袖はなかりけり。母かくぞ思ひつゞけ、  
我歎き涙の雨と降りぬれば

獨りやぬれて君が行くらんと詠しもなほ哀なり。美女御前にかくと申し上げければ、是は如何なる事ともや、露ばかりも其ことを知るならば、さはせまじものをと後悔あるも理りなり。是と云ふも自ら出家せざりし故なれば、父の爲幸壽が爲めなれば我發心せんと、彼僧を師として大乘圓頓の十重禁戒を受け菩薩修行に入り給ふは、有りがたかりし事どもなり。

**美女多田を落ち源信僧都に値ふ事**

人の子としては孝にとどまるところを聞しに、美女御前は不孝なりしかば、父の御勘氣を得たまへども、仲光の働さにてからさ命を助り深く忍びて坐しけるが、終には其かくれあるまじなれば、亦愛き事も聞ぬ先に、何方にも身を隠し出家の道を勵まん、如何あらんと宣へば。仲光承り、何までも是にと存侍りしかど、さがなき人の口なれば亦御耳に達しなば

如何仕らん。幸ひ源信僧都こそ貴き聞え在しまし世  
 舉て是を貴めば、御憑みあつて御弟子となり給へ。  
 某し方より能々申入れんと、仲光が郎等に浦邊小太  
 郎重道と云ふ者を御供に添奉る。美女御前も重道を  
 深く頼母敷者に思召し、只一人御供にて、夫婦の者  
 に暇をこひ、命あらば亦見ることもあるべしと涙と  
 ともに宣へば、仲光承り、何とて左程まで御心弱く  
 渡らせ候ぞ、某斯て有内には父君へ克申上げやがて  
 御迎に参る可しと甲斐々々しくは申しかど、しほし  
 ほととならせ給ふ悲さに涙ながらに別れける。多田越  
 を通らせ給ふにも、住馴し古郷の方を見下せば、白  
 雲萬疊行客の跡を埋み、早晩しか家山を立障つ。夜  
 も甚く更ぬれば、旅人絶て凄じく、樵歌牧笛の音も  
 なし。耳になる、物としては、松風窓に音信て、岩も  
 る水に袖絞る。棄てられし身の悲しさは行末とても  
 さこそとは思ひ續け給ふにより、一切歩み給はねば、  
 重道御手引とりて急くとすれば夏の夜の、五更の鐘

の音高く、今宵も明けぬと打響き、何に付ても心細  
 くぞ思はれぬ。明けて残れる月影は雲井の空にかす  
 かなり。五月山を見上れば、雨も涙もさみだれて、吳  
 服の里や玉坂山、我を誰かは待兼山、花の散積ると  
 詠みし阿久刀河、關戸の宿と聞ゆれど、我が涙はと  
 いまらず。山崎の宿を過給へば、今を初の旅の道、  
 御足たゆませ給しかば、とある處に御宿めされ、爰  
 は何くぞ伏見の里、敷物もなき賤が屋の軒も都もま  
 ばらなれば、物思ふ身の旅宿の空、鶉衣の短くて、  
 夜とても安く寝れねば、伏見の里とさこゆれど、窓  
 にもいたくもる月を詠め明して行くほどに、能き法  
 の師にあふ坂山もほど近し。山科の里過ぎて四宮河  
 原と聞しは、昔延喜第四の宮蟬丸と申せしが、此所  
 に世を棄て口號み、世の中はとても角てもと詠じ給  
 ふ跡とかや。逢坂山に來りては、  
 守る人のあるとは聞けと相坂の  
 せきもとめぬ我涙かな

關山に差掛り、嵐に傳ふ鐘の音、あれこそ名にしあ  
 ふ關寺と響きつゝ、心耳を洗て深省を發しけり。貴  
 き御法に大洋の浦、湖水波淨くして沖にゆるる、釣  
 舟の、跡に消え行く波の泡までも、夢幻泡影の理り  
 無常を示しつゝ、偏へに有爲の有様、三千の法は一念  
 にあらはすと自己に答へて思しける。さらだに知  
 らぬ旅路は悲さに、二八にさへもたらぬ身の殊にわ  
 りなき御姿、桃季の粧たをやかに、繪に寫したる女  
 の如くなれば、美女御前とめされつゝ、父母の寵愛  
 淺からざりしかば、人の重んずること風に草木の靡  
 くに似たり。斯りしかば榮華に誇り驕樂橋々とし逸  
 遊敷々たれば、父の御諫を背きつゝ、未さびはなる  
 身の曲として、親の諫め世の誦りを慎しむに心の暇  
 なく、左行右行に亂れ去り、意の駒のはなれつゝ、心  
 ここに在ざれば見れども見えず。聞ども聞えず。文  
 を攤け經の紐とくまでも無かりしかば、一殺他生の  
 利にまかせ既に討んとし給ふが、危き命を遁出で、

足痛げなる少人の御有様、誠に天人の五衰の悲み、  
 人間にもありけるものと推測られて勞しや。かゝり  
 ける所に、源信僧都は道を通らせ給ひつゝ、美女御前  
 を見給ひて、是なる兒の目の内人に變り、重暈有て  
 氣高きよ。如何用ある體、いかなる所の人ぞ、何方  
 へ座るやらん。子細ある氣色なりと尋ね給へば、是  
 は源信僧都の御方へなん参る者也。源信とは則ち愚  
 僧の事なり。何の爲御尋ねあるぞ。これは攝津國の  
 者にて侍るが、朝露の快樂に穢され夕日の終焉を知  
 らずして、父の練言を用ゐざりしかば、父の勘氣を  
 被むり身の置所の候らはねば、不圖佛經により、樹  
 下に一宿再びする事莫れの金言を聞き、十二頭陀の  
 行を修し、生死の苦海を出離し、一念發起無量罪と  
 聞く時は、御弟子とまかりなり、出離の法問の一句  
 も承はり候はん爲なり。大悲の御憐みをたれ給はれ  
 と涙とともに語り給ふ。其時重道御前に出て、仲光  
 が詞をのへ其後文を捧ぐ。僧都さといひ、さてさ



て勞しの御事や。さては修行の望とや。夫此の如きの有様を、喜家には、邪正一如、煩惱即菩提と立て、淨土眞宗には去此不遠とも説き、華嚴には、唯身の淨土己身の彌陀と即菩提の理に任せ、出離の縁これなり。此方へ來り候らへと寺にぞ伴ひ給ひける。

源頼光正四位下攝津守と爲り

法花三昧院建立の事

多田の里に住給ふなれば多田新發意滿仲とぞ申しける。源信僧都に謁して、初めに法華經をさし、次に梵網經不殺生戒を口説ありし日より、滿仲、以爲、我れ常に鷹をこのみ、物の命をとる。生とし生るもの何んぞ命を疎かに思はんや。我れ更々にこれを樂みとは思はねども、民の訴を直にさかん爲の謀なれども、佛の御禁に背く。死しては地獄に入る。愚に拙しとて、夏飼の野鷹一時に野に放ちて殺生長くとまり給ひ、善惡につよき御心なればにや、末代ま

て發心の手本ともなり給ふべきなりとて、有り難き例に云ひける。されば鳥類と雖も主にすてられたるを悲んでや、空に舞ひ木にとまり、近所を去らず。兼ねて奏聞をとげ、七八町さつて西の方に一字を建立せらる。安和年中より事はじめて天祿元年に至り、二年かけ造立こと畢る。阿彌陀堂、釋迦堂、不重堂、僧堂、庫裏、鐘樓、方丈、廊下、惣門、山門まで、ことごとく造り出されたり。登きたてたるたぐみの綺羅々々しく朝日の山の端に出るが如し。金銀、珠玉を以て鏤めければ、おのが様々色めきて、吉野龍田の花紅葉、春秋ちらぬ計り也。傳へさく佛生國祇園精舎の昔しもかくやと思ひ遣れたり。既に供養の日になりしかば、慈惠僧正御導師に請じ給ひ、貴賤群集をなしけり。天王寺の樂人來りて舞樂を奏し、八音の樂器妙にして心耳を澄して殊勝なり。導師は如法の大衣を着し、高座に上り願文の説法良久し。誠に長舌海潮音園音竹を裂くが如く、懸河の

辯水を流すに似たり。道俗隨喜の涙を流しける。滿仲朝臣より下源氏の門葉に至るまで覺へず歡喜の眉を開きつゝ、法衣の袖を絞りつゝ、煩惱業苦の雲はれ、眞如相の月影に生死の闇も晴ぬらんと信心肝に鈍じける。天花風に散じて梵音雲に響き異香寺中にあまり、導師高座より下させ給へば、中河馬之丞御布施の役にて、金銀或は綾羅錦繡の被物を引き、其外色々の珠玉を持ち運ね積上たり。滿座輝き亘りける。御深心の程は布施にこそ顯れたり。經に曰く如來布施の功德をときて宣はく、三千界の草木を截集めて、其の草爰の木と見分け 十方無量の河より流れ入し水を、大海にて其の水爰の水とは知れども、布施の功德は説盡し難し。喩へばかうげんじゆは一夜に百丈生ひのぼる。誠に芥子許りの種子さへ此くの如し。ましてや是大施の功德、思遺こそ慙もしけれ。此座に連る僧俗、此結縁に依つて無始罪障の雲消を生死の睡覺めて、未來には無苦の寶刹に生きん事悦の

中の悦び也。則此寺を法花三昧院と號す。僧坊苑を並べたれば、法花讀誦の道場もあり、或は秘密瑜伽の精舎もあり、圓頓止觀の床に臨む大衆もあり、或は西方に心を移し念佛三昧の堂場もあり、目出度かりし佛地となる。則華山院の御勅願所也。亦是武家祈禱所として、慈惠僧正を講師として、八講を修し給ひ、末代まで源氏の枝葉榮ゆらん。滿仲斯様の大善根をうる給へばなり。今多田院と云ふ。ふは此の寺也。鷹の尾山と云ふ。鷹近所を去らざるによつてなり。

滿仲京都の館強盜の事

天延元年四月二十四日の夜盜人ども滿仲朝臣の京なる宅を圍んで、雲霞の如く亂れ入る。然ども中門能固めければ左右なく内へ入らず、廣場に猶預す。如法夜半の事なれば敵御方見へ分かず、只騒動する計也、されども御所を守る侍みな物に慣たる兵なれば、ひしくと甲冑を着し門を開き、夜討は誰人ぞ名を聞

んと喚れど、盗人なれば答へもせず、只無理に推入んとす。満仲も自ら三人張の弓をつとり縁の柱に寄かけ押張り、指つめ引つめ射給へば、前に進む奴原矢場に三人射倒され、矢風に恐れひらくと引き退く。満仲下知して、さして手に立つ程の敵にては無ぞ。一々に組めや者共打てや殿原と宣へば、ことがな、太刀の刃金の銀試んと思ふ程の若侍、我もくと打て出る。盗人言ふ様は、満仲は多田におはせると聞しに、案に相違したりと、門の外に出てさまに側に火をさしければ、盗火盛んに發り、これを防がんとする隙に盗人どもは退散す。魔風はげしく吹き來つて類火に罹る、家三百餘宇也。満仲の舍弟武藏守源満政に仰せて内裏を守らしむ。定めて盗人共のなせる事なるべし。遺恨の夜討ならば斯程にきたなくは引くまじ、急ぎ尋ねて罪すべきとて諸國に下知し尋ねもとめ、悉く搦捕つて火炎にぞ行はれる。

源頼光平維仲卿の息女に逢ふ事

左兵衛尉源頼光は、東山清水寺に参詣して八重九重の地主の櫻を眺めつゝ、暫たゝずみ給ふ折節、道も去り敢ぬ程人の詣てける中に女車あまた遣り連けり。何となく其人も床敷一切駒も進み得ざりしに、風も吹散ぬに花の散りけるに愛て給ひてや、内より車の物見をあげ給ふ。頼光風見けるに、年のほど二八年華にも未一ツ二ツたらぬ程なる上蔭の色白く貌細やかにして青黛の眉のあたり丹花の唇愛々しく、桃李の粧ひ濃に氣高く、御髪は左右よりこぼれかゝり、青柳の糸より軽く、春雨に亂れてたよくとしたる如くなる御貌、心詞にもべ難し。頼光猛き武士たりと雖、心も早や消々となり、惘然と立ち給へ共、人の見る目の關にせかれつゝ、忍び兼させ玉ひて、浦部七郎安光を近附け、先程の女房は如何なる人の息女なるぞ尋ねてんやと宣へば、安光承て彼

拾遺に入る歌の事

肥後守にて清原元輔下り侍りけるに、源満仲せんじ侍りけるに、かはらけとりて、

元輔

いかばかり思ふらんとか思ふらん老いて別るる遠き別れを

かへし 満仲

君はよし行く末遠しとまる身の待つほといか、あらんとすらん  
満仲自身を賤して出て鰥寡を尋ね孤獨を養ふに萬民如何なる人と云ふ事を知らず。今年又私領の百姓を召て鰥寡を尋ねて白米を與へ給ふに、其數多からず。天延元年五月初より攝州兵庫浦に新宅を造る。同五月朔日、多田の山中より白銀の鉞を掘りて來る。是忠節人なりとて太刀をゆるし給ふ。奉行金瀬太郎金澤太夫是れなり。

の御伴の侍傍らに休み居けるに近付き、あの御車の内の上蔭は如何なる人の御息女にて侍るやと尋ねければ、是れは中納言平維仲卿の息女にて御座しと語る。安光心ききなる男にて、偕は和殿は中納言卿の御内にて候や。我は左兵衛尉源頼光の家臣なるが、時節は其御所へも参る事も侍れば、今よりは互に語り申さん。我主人の屋敷邊御通り候は、安光と御尋あれや、必ず侍侍るなりとしみくと語りければ、此男聞き、偕は浦部殿にて侍るにや、悦ばしき事になん候。某は大瀬小太郎とて僅なる仕合にて蔵比此御方になん罷り侍るなれば、重ては御心安くと云ひつゝ行き別れて歸り、しかくの事と申しければ、偕は内々過失なき美人なりと聞きし御方也と愈々思ひぞ勝りける。宿所にかへりては、武士たる者の女に心亂しては皆不覺をとりし例多し。由無き事なりと心にてきつと忘んとすれど忘れず、如何はせんと思はれる。秋の野の千草にまじる花薄

穂に頭はれて一向に亂れて物を思はれける。安光を招き此此の女房忘んとすれ共忘られず。如何はせんと宣ひける。安光承り、我彼館へ罷り小太郎を何とぞ頼申さんと云ふ。頼光悦び急ぎ文を給はりける。忍びて彼男を尋ねより、先金銀多く持参し四方山の物語しけり。此男俄に徳付ぬればけしからず實に接待しけり。安光云はく、和殿は若し武家など御望も侍らば我取次ぎ申さん。借某しも少し憑み申度御事侍るなり。憑まれ給ひてんや。和殿御同心に於ては御仕官の事我れ請取り侍らんと申しける。此上は身に叶ひ侍らん程の事はと云ふ。いや別儀に候はず、先日清水の歸るさに中納言公の姫君を我主人左兵衛尉車の物見より見初めしかば、人知らぬ襟ひととなり侍れば、何卒和殿を憑み一紙の消息をも奉んため也。偏に憑申と私語さければ、此男聞きて、何事にも承らんと云ひしかど、是は思ひ寄らざる事也。父母は女御后にもとかしづさ給ふなれば、方々より申させ

しかど取合ひ給はず。殊に我は下蔭の身なれば、姫君の近き邊へ寄る事も叶はず。此儀は餘人に御憑み候らへと云ひける。安光色をちがへ、縦ひ貴殿一命にてもあれ憑むとならば許し給ふ可きに、増てや是は善事なり。もし此事叶ひなば、頼光は天下の武將に今になり給ふなれば、貴殿苦心心勞の代りには、所領の二三所も行ひ申す可きに、たゞ頼み入ると申しける。元來慾深き男なれば打案じて、心得申すなり。思出し侍るに幸ひ彼御方のはした者某には親しき故も侍れば、申より見んと請合けり。さらば憑み申也。穴賢、人にもらし給ふなと頼光よりの文を渡し歸りける。其後彼女を語らひ文を奉りけれ共、御顔打赤め、由無き事なりとて御手にだにも取り給はずと云ひければ、愈々思の十寸鏡、其貌の立そひて忘れればこそすても置め、近頃も四位少將と申すは小町に心懸け初て九十九夜まで往通ひ、風の夜も雨の夜もいとはず、ぬるぬれ衣の袂を懸し通ひしも

身に思合されて哀れなり。様々に書附りぬる水莖の数も千束に成りしかば、女房もさすが岩木ならねば彼の文を見給へば、あさみどりの薄様に、なか／＼に云ひもはなたて信濃なる木曾路のはしの懸けたるやなど深く君を恨みし餘りに、柳の枝に雪折ればなきの喻思ひあたりて、御心強面きも上り下りし、いな舟の、いなにはあらぬ氣色になん見えさせ、今は中々悦ばしくてなんと書きたり。手跡も殿しく言ふ計り無し。女も是に心とけて返事あり。頼光あくるもめづらかに、嬉しくて急ぎ見給へば、匂ひもなべてならぬ美しき紅の薄様に歌あり、懸けそめし木曾路のはしも年ふれば中もや絶えて落ちぞしぬめり。斯様によみ玉ひし歌よりぞ、人知らず逢染川の媒ちとはなれり。多田御家人に獅子に牡丹をゆるし玉ふ。但し獅子の

勢又は家々の添紋にて其家々を知る也。右の外諸國御家人散所御家人と云ふ者數多あり。此多田院御家人と云ふは源家の枝葉又諸流多し。并滿仲公に隨ひ多田に來し者等代々天下の公事を勤め、又は滿仲公の御廟所を守護す。其後數代經て多田の入道頼仲と云者、後醍醐天皇に供奉し南方御味方に参り、八幡山に籠て搦手を防ぎて軍利あり、されとも、其功盛きを憤り、諸卒を率きて多田に歸る。磯詮公是を知て入道を招請あれども辭退し畏れず、されども御使度々に及ぶに依つて嫡子貞明と云者を進す。其先建武四年に尊氏公より多田御家人に先例にまかせ多田能勢の地頭職を免る。磯詮公の御代に又度々軍思ありしによつて重れて御判を給うてより此來、磯詮公信長公の御代に至るまで威を振ふる者、多田越中守、能勢因幡守、堀川伯耆守、山田左衛門尉、山間左京亮、此外名の知れたる家此時代では二十八九三十餘家に及べり。

多田五代記卷第四目錄

- 美女御前勘氣を宥さる 井小童寺の事
- 多田左近源滿正卒す 井虚空藏菩薩の事
- 久我繩手追剝の事
- 滿賢母公明目となり 井眼明彌陀の事
- 女御入内の事
- 上陽人の事
- 弘徽殿女御隠給ふ花山院御出家の事
- 滿仲多田の境を定むる事
- 龍馬の事
- 滿仲出家受戒の事
- 出家功德物語 井御草薙髮の事
- 源信僧都の事
- 滿慶法花三昧院に移り給ふ事
- 花山院多田臨幸の事
- 藤原保輔多田合戦の事
- 滿慶蛙聲を止むる事
- 多田滿信三陳を問ふ事

多田五代記卷第四

多田兵部輯

美女御前勘氣を宥さる  
並小童寺の事

さても兵庫允藤原仲光こそ、弓馬に達し公の爲めに忠あり民に仁あつて、勇功多き武士の郎等也。頃天延元年五月五日、滿仲朝臣の御前には門葉不殘御禮に伺候する處に、仲光に命じて、日外汝に預け置さし美女丸、さぞ學文よくしつらん相具し來るべしと仰せける。其座に列居したる人々、こは思ひよらざる仰せなりと色を失ひ居たる處に、仲光畏つて袖かき合せて、美女御前は安和の頃御勘氣を被らせ給ふに依りて、某に御首を打つべしとの仰せに依りて、御勞しくは候ひしかど御頸を給はり、既に上覽に備へ奉り候ひしを御失念候や。滿仲曰く、我れ汝が心底量るまじや、定めて扶けおきつらん。

其の首美女丸が面にはあらず。然れども其れはそれと察したれども、汝が忠信の志を感じ改めず過したり。夫語に曰く、君子可欺、不可罔と仰せければ、仲光承りては御説とも覺えず候。それ公は器なり臣はこれ水なり。方圓の器に従ふ誠あれば、仰せに任せ一度討ちたりし若君を又出せとは御情なしと、憚る所もなくぞ申ける。満仲重ねて臣公に事るに義を以て先とす。我れ汝に命ぜしは如何心得たるぞ。彼實檢したりし首は如何なる童にてありしぞ。仲光承つて、天晴公の上意かな。義は臣の職なれば、一子にて侍りし幸壽丸、御命に代り奉りしを若君なりと陳じ御披露仕り候。美女御前は御名を満賢坊と申し奉りぬ。延暦寺の惠心僧都の御弟子として學文形の如しと承り候。あはれ、今よりは御勘氣御宥し侍らば有りがたかるべしと、義心其氣色に顯はれければ、満仲忠臣の功を感嘆し給ひ、既に出家せし上は聊も勘氣子細あらし、偕は幸壽丸が義を重くし命を

輕んずる事累代の忠功反々も神妙なり。是満賢が爲には善知識なれば、能々弔ひえさすべし。然らば滿賢召返すべしとて御迎を仰せ給る。御母公より本射正俊、脇田春光を仲光が使者に差しそへらる。殿中悦びあへり。其座の人々、さては凡人に御座さず。未御存生にて御座さとは、我々だに知らずと舌をまき感じける。御家人下部等まで御迎に出でける。去る程に満賢坊は御輿にだにもめされず。御修行も半と見えて瘦衰へさせ給ふが、墨の衣に念珠をもち思ひ入れたる道心者のことから尋常の僧には替りたり。僧都よりも是れは悦ばしき御事なりとて、御弟子達を差そへ給ふ。仲光出て迎ひ先我宅に伴なひ休息させ奉る處に、御母公よりはやく具し來るべしと御使度々なりしかば、御伴して罷出る兩親御悦び淺からず。噺は窮子他國より歸り、父の長者に値たる時の喜びにも過たり。汝を二度見ること仲光が忠なら

此度の忠功先代にも有るまじなれば、先當座の恩補にて、丹波の中にて八千町其外金絹多く給はりける。僧都の御弟子達へも引出物給ひける。此御悦び無限と雖、美女討たれ給ひぬと聞えしより御母公は堪ぬ御悲みに伏沈ませ、朝暮忘させ給はぬ御歎の餘りに兩眼を泣つぶさせ給ふにより、手を取つて御膝のもとに引よせ嬉さにも涙なり。女房達も諸共に涙に咽んで更に言ふ人もなし。理りにすぎたり。満賢は昔目狎させ給ふ人々の中にも乳母の讃岐が年頃の物思にや黒かりし髪の上白々と千莖の雪を曇みたるは優くも哀れなり。母上かくならせ給ふも我ゆゑなれば、其過少なからず候へば御許し給り候へ。是は我師源信より給りし阿彌陀佛なり。吾朝暮崇め奉りし本尊なれば是を奉る。御念佛申させ給へ。彌陀の御願力の深き事は一念十念ともに導かんとの御誓ひ、此願億々萬劫にも聞がたし。世々生々にも値がたし。噺へばかく盲目とならせ給ふこと自一人が罪なり

と申せども、斯る不孝の子を持たまひけるも當時の災殃のみにあらず、是れ皆前世の業報に任せたり。今生こそかく御座とも念佛となへ給はば佛の御願力にこたへ、終焉の夕には必明眼のさとりをひらき、彌陀來迎の粧ひを拜し給はん。觀音は金蓮花を傾させ給へば勢至は手をとつて引攝し給ひ、廿五の菩薩と共に極樂に生れ長く不退の樂をうけさせ給へと説法あら、して母公に奉らる。其後幸壽丸が供養にて西畦野と云所に寺を造り小童寺と名づけ、石を以て塔を作し幸壽丸と銘を刻み、満賢僧來て經を讀み念佛し過去聖靈成等正覺と廻向して後世弔ひ給ひける。仲光夫婦も参りつゝ、佛事營み共に念佛申つゝ、悲の中にも嬉くぞ思ける。満賢は塚の前面に向ひ、汝命に代りし時我は少しも知らざりしに、後にもかくと聞しかば露の命の存ふべくも覺えず、今もや自害せんと思ひしかども、死れぬ命の強面て今日までも在しなり。今は亦よく死ざりけると思ふには、

其の時ともに相果なば、まこと等が志を破りかく弔ひもせまじきに、せめての命つれなくて、父君の勸氣をゆるされ、剩へ仰によつて自ら汝を弔ふこと、昔の下露の底にても、嘸嬉く思ふらめ。恨むらくは埋もれぬ名のみ残り留れど其聲をだに聞ざることをと、生きたる人に言ふごとく細々と口説かれける。夜更くる儘に尾の上の鼠吹落て軒端の松に響きつゝ、草葉にすだく虫の聲ならて亦答ふるものもなし。曉がたに夢をむすぶ幸壽丸、昔の貌を改めず、いと蕭闌たる有様にて心地よげに咲を合て、君御弔の功力にて今極樂蓮花の上に生るることを得たりと告にける。

斯る止事なき堂舎にて不斷の勤行新なりしに、何の頃より杜絶して法燈を挑る人もなく、行法も退轉し、築地崩れて庭には千草生茂り、人跡たえて狐兔の跡路に交り、僅に堂舎一二存。天文年中までも残りし由。是も何の頃にやらん倒れて礎の跡も

て我を浮ばしめ給へと云ふに、夢ともなく幻とも覺えずたへて云、其のこと易きにあり。さては何れの處ならんと云ふ。幸壽嬉しき事になん候と前に立つて、此處也と五輪分れて爰にあり彼にありと教へ、其處には亦父仲光の銘石もありと委細に語ると覺るに、早鳥なき鐘つく頃になりければ夜は已に明にける。急ぎ行て見るに少も違はざりければ、人をして掘せんと云ふに、其田主憤り留るに由て時の代官に訴へしかば、不思議の事なればとて則其家人に仰せて奉行せしめて掘せしかば、上人の云ふ如く土中五尺ばかり下にて石塔をえたり。上にかき擧げ水を灌ぎ洗ひ見るに幸壽丸と云ふ銘鮮かなり。皆不思議の思ひをなし、渴仰合掌しける。同く仲光の銘石もありける。近頃の事なれば誰々も聞きたりと語りける。弘慶和尚より二代順譽上人、八十歳の春語らるゝまゝ、愚毫を染めつゝり書き添へ侍るなり。

なく、末代とても悲しきは碑石へ泥土に陥り跡は鋤れて田となり、埋れぬ名計はのこり留れど、儘にそこと知人の無かりしに、慶長の頃ほひ、淨土宗の上人弘慶和尚とていみじき僧、同處最上寺と云淨刹に御座き。ある夜年のころ十五六歳ばかりなる美しき童子來つて、我は幸壽丸と云ひし者なり。然るに我が銘石土中に埋れたり、掘あげて給はれ。かくと申んため此まで來れりと云へり。和尚ゆめ心に問ひければ、過ぎし昔を委く語ると見て夢さめぬ。以爲、昔歳、此の所に滿仲公の御建立にて小童寺とて貴き寺ありし由云傳へけれど、さながら夢のことなれば儘にも思はれずとて其心止にける。亦次の夜香花を供へ佛前に向つて觀念に入て御座けるに、夜深人定て、香煙霞に立きえ燈幽なる折節、彼兒童の貌あらはれける。髣髴たる事玉を薄き絹につゝみたる如く、或は霞に隔たる花の如くなる貌にて柔和の詞を出し、和尚疑ひを止め

多田兵部左衛門尉 源元朝書之

多田左近滿正卒并 虚空藏菩薩事

天延元年八月二十四日滿仲朝臣の嫡子滿正卒す。文武の兩藝に心氣虚りしかば、素より病氣とて公事等、左兵衛尉頼光へ譲り、世事をのがれて出家の望みありと聞えき。まことに武將には則ち、滿仲、滿正、維衡、政頼、頼光とて天下の人傑、名望を末の代に残す程の武將なりしかども、無常の切なる事をさとり、賢くも名利を棄給ひきとは今こそ思ひ當りける。恩愛の慈悲捨るに捨方無く、父母の御歎きものごとくに堪ぬ御悲みのみ深く、只何となく御涙に萎れて御座ける。御子二人あり、長子源次丸とて三歳、弟源藏丸とて當歳子なり。此兩兒を御膝の上に抱へて、いと御涙がちなり。或時藤原仲光を召て、此源次丸汝に預くべし、汝また子なし、幸壽丸が代りともおもひ不便に守り立てえさせよとて、多田の内にて所領十

五箇處割分け、その外に虚空藏菩薩一尊を相へ御譲りあれば、御意はせの程骨髄に徹し感涙をうかへ、吾家の眉目何ごとか之れに如ん哉と悦ぶこと限りなし。御前伺候の諸侍、武士たる者は誰もかくこそ有へけれ。誠に幸壽丸主君の爲に忠有り親の爲に孝ある故、今其功を報い給ひけるにやと皆之を感じける。抑々此虚空藏菩薩と申は、満仲初て多田へ來り給ふ時、矢間山にて値ひ玉ふ。老僧床敷思はれ、或時自尋ね給ふに、何地へ行きしやらん早行き方無く、空しき柴の庵のみ残りけるに、内へ差入たる月影も棘らに檐に垣衣這かゝり、庭の椿は露に亂れて玉を散らせるに異ならず。時しも秋の末なれば、弱り果てぬる虫の聲、稻葉亂れて風すごく、何事に付けても御心を傷しめて茫然として御座せしが、檐近く植ゑあさし桃の葉の紅葉しけるを見て、昔劉禹錫は進士に擧せられて京師に至る、玄都觀を過ぎけるに、道士の植たる並木の桃の花さかりなるを見て、詩を賦して云く、

劉禹錫

紫陌紅塵拂面來 無三人不道看花回  
玄都觀裡桃千樹 盡是劉郎去後栽

と詩を作れり。又十四年を経て行て見るに、桃一株もなし。唯兔葵燕麥なんどの春風に動くを見て、又曰く

再遊玄都觀 同  
百畝庭中半是苔 桃花靜盡菜花開  
種桃道士歸何處 前度劉郎今又來

と作りし詞を思ひ玉ひけるにや、亦菅三品文時卿作り玉へる詩の心を其まゝ、

時秋なればかく口ずさみて歸りなんとし給ふが、偕も世をかるく住みにし跡さへ浦山敷、柴ひき結びし扉を披き内へ這入りて見給ふに、僅なる庵を一間は夜の臥どとなし、茨薊葦なんど折敷しも藁の床となりける。又正面の方に佛壇とちほへて、故き机に櫛の花をさし、賤からぬ香爐に燒すてたる匂も今に

久我繩手追剱の事

残るやと床しく、向の壁に何やらん物影の見へしを御目もはなたず御覽あれば、虚空藏菩薩の御影なりける。最貴く見えさせ給へば、掌を合せ尊護あり、御歸り有て自是を作られける也。此菩薩と申奉るは、三界化度の法主十地究竟の居士なり。常に香集世界にははしますと云へども、衆生利益の爲に世尊の會座につらなる内證ととふらへば、寶生の變身なり。畢竟空の中には、恣不可思議解脱自在之身と振三神通力最上之威斷諸妄執、心身安樂、導眞如實相と御誓ひ信じても猶信すべし。仰ぎても猶餘あり。一念稱名の人は生死無量の罪障を滅し、得無量之福徳がゆゑに、源次丸の守本符にとて是を譲り給ひける。今年八月、上津と云所に一寺を建立して千面堂と號す、虚空藏菩薩を移す。

寛和元年四月、藤原齊明其弟保輔と云ふ者共は惡黨の張本にてありしが、或夜藤原季孝朝臣、大江匡衡朝臣など夜に入て久我繩手を通り給ふに、物具したる武士大勢出來て、兩人を中に取挟み散々に打つてかゝる。思ひ寄りなき事なれば、季孝匡衡の侍皆ちりぐに落ち行けば、乗物は田の中に打捨ぬ。匡衡朝臣も是非無して太刀を抜き、雲の隙間に見給ふに、敵まぢかく打つて蒐る處を拂ひさりにし給へば、敵の肩さき切はつりて、向の太刀のあまりにて匡衡卿の左の手の指をさり落さる。其隙に裝束など剱とつて武士は行方知れず逃亡ぬ。季孝も匡衡も夢うつゝの心地して歸り給ふ。盗人等のなせる事なるべしとて、諸國へ下知して齊明を近江國高島郡にて源の頼親の爲に誅せらる。保輔は更に行き方なし。

同九月二十四日、波豆川郷に於いて満正を奥殿八幡と祭る。(左近滿正は満仲の長男にして頼光の舎兄也。政の姪也。早世なるが故頼光世を繼ぎ玉へり)

満賢の母公明目と成り給ふ

并眼明彌陀の事

満賢僧の母公は、教にまかせ満賢より捧られし阿彌陀佛に向ひ奉り、我今生こそ此の如く淺ましき盲人となるも、臨終の夕には必ず拜まれさせたまへと、一向に念佛し給ふ。天延二年八月彼岸の日、念佛三昧の定に入て一心不亂に稱名し玉へば、七日に丁る曉に、如來の白毫より光り出て御額を照し給ふと覺えて、不思議やなつふれて久しき兩眼忽ちに開き、夢のさめたる如く、夜の明たるよりなほ明なり。既に回向も過ぎて佛殿より出て、いかに女房達、佛の御力にて我が目開きたり。夢にてはなきかと宣へば、是は嬉し御事なりと上下悦びさめめて、まことに佛法繁昌せり。此の不思議を思へば、御往生までも嘸とかねて思ひやられて最恐しし。則ち眼明の彌陀と號し奉まつる。

天延二年九月五日頼信生る。母は大納言元方の御女なり。童名竹童子と云ふ。滿仲の五男なり。十月三日頼光朝臣の長男頼國生る、母は藤原の元平の女なり。

女御入内の事

花山院と申し奉るは冷泉第一の御子なり。御諱は師貞、御母公は藤原の懐子攝政伊尹の御娘なり。圓融院の春宮となつて、永観二年八月廿七日御譲りを受けて御位につき給ふ。時に關白頼忠の娘と、爲平親王の御娘と、藤原の朝光の娘と三人を召て女御となし給ふ。何も容色ならびなければ、君限りなく、春の花夏の風秋の月、何も捨へきとも思し召さず。たゞ天々たる桃花の色めづらしきに、露を載だき霞に匂へるごとくなり。然りと云へども、世の中の人の心は花ぞめの移ひ易きものかとよ。其のころ大納言藤原爲光の息女恒子と云しおはしける。美人の聞

え世にかくれなかりければ、君又これを召て弘徽殿におきて女御とす。紅顔翠黛はたゞ自ら天の生る麗質、心詞にも及れず。漢の李夫人、唐士の揚貴妃、それは異國の美婦人、近くは、我が朝には遠明日香天皇の后衣通姫、小野義真が娘小野小町、柏木衛門督の見染たる女三の宮、業平中將の御心をうつされし、我通路のせきもりはと打詫ける二條の后、光源氏大將の藤月夜に逢そめてそれゆゑ須磨に流れし尚侍と云ふとも、いかでか勝るべき。されば、君此の方さまに御心をうつさせ給ひ、無二の御ちぎりにて、初三人の女御は陽炎のあるかなさかの如くなれば、吳竹のよはには物の思はれて、錦の床に獨臥、曉の鳥と共に泣あかし給ふを理りなり。

上陽人の事

昔唐の玄宗皇帝色を好んで國中の美人をえらんで宮中に召し給ふ。上陽人も眉目よきを以て十六の年

始て宮に入たり。同時に選れて禁裡にまゐりける美女百餘人と云ふ。一族親類皆云へり、宮中に入つて恩寵を蒙らば門戸の繁昌をひらかんと悦ぶ。既に入つて宮中に居す。天寶五年なり。此時に揚貴妃又選ばれて宮内に參る。玄宗是を見玉ふに更に無双の美人なり。之に由て寵を專にして日夜君王の傍を退られず、六宮の粉黛顔色なし。さるに由て三千の宮女徒に明し空く暮て面を君王に見ることを得ず。上陽人も其員にして、上陽宮の内に閉られて一生空房に座臥す。芙蓉の險、柳の眉、雪の膚茲に悴け、春往秋來れども唯深宮に向て光陰を送り白髮の老女となり果たり。春の日あそし、日遅して獨座すれば天も暮れ難く、宮の鶯百囀れども愁て聞くことを厭ふ。うつばりの燕雙棲ども老て妬む事を休むと書たりしも、餘所の事とは思ひ給はずと見えたり。



### 弘徽殿女御隠れ玉ふ花山の院 御出家の事

三人の女御は何事に付ても御心を慰る方なく、玉だれの隙もあらば忍び出て、いかなる山陰にも立寄り髪をもそり尼にもならばやと思し召しけるをせめての事と痛しき。かゝる折節、弘徽殿の女御は御心地例ならずと聞えしが、陸しげにして臥玉ふ御在様、漢の李夫人の照陽殿の病の床に臥けんも斯くやと思ひやられたり。御貌影は曉月の山の端に青みわたり露に光りを添へさらめきたるに異ならず、芙蓉のまなじり重げにして、女郎花の露を帯るよりなほ勞しき御有様なり。剩へ折を得、物の化共とり入り奉つる。貴僧高僧に仰せて御祈りさまさまなり。或は施薬院師數十人御薬を進め奉る。されども御命限りあればにや、幾程もなく唯ねむるが如く隠れさせ給ふ。天皇御歎嗚ふ可きやうもなし。餘り悲みに臥沈ませ

給ふゆゑ、邪狂の病を御受世を捨るの御志ある比、ある人より梅の花を奉りけるを見玉ひて、

色香をば思ひも入れず梅の花常ならぬ世によそへてぞ見る

御父冷泉上皇も此の御病ありてなほ未だ癒玉はず御座す處に、天皇亦た然りとて近臣色々なくさめ奉れども、悲歎やみ玉はて、同く八月、圓融の太上皇落飾あつて圓融院に遷り居玉ふ。明る二年、天皇弘徽殿の女御の御事思し召し出ださせ玉ひてかくぞ思召しつとけ給ふ。

獨りぬる宿のとこなつあさなく、泪の露にぬれぬ日ぞなき

其の比又た御經讀誦なされしに、妻子珍寶及王位臨命終時不隨者唯戒及施不放逸今世後世爲伴佑とある文より、御出家の御心ざし頻りにいてさしかば、寛和二年六月廿二日の夜中、藏人藤原道兼、僧殿久計を御伴にて、ひそかに貞觀殿の小門より忍出させ給

ひて、花山寺に御幸なつて、飾を落させ玉ふ。御法名入覺と號し奉る。御年僅に十九歳にならせ給ふとぞ。人々これを知ることなし。其のころ天文博士安部晴明と云ふ者何心もなく庭に出て天をながめけるに、天子位をさるべき天變ありと大に驚き、急ぎ参内するに、天皇はや御座まさず。百官皆來つて尋奉るに見え給はず。如何はせんと泣悲む。夜明けて花山寺より告げ來る。すてにはや御僧となり給ふよし何もあごろき急ぎ参らる。中にも中納言藤原惟成、藤原兼道などは常に近侍しけるによつて同く剃髪をゆるさる。多田の滿仲朝臣は、村上、圓融、花山三代の奉仕なれば、仕官を逃れ、多田の里にかへつて源信僧都をむかへて、是も出家せらるべきとの聞えありける。

### 滿仲多田の界を定むる事

寛和二年七月廿五日、源の滿仲朝臣は多田の地を

定んとて、龍馬に乗て四方を廻り給ふ。先づ南の界は鼓淵と名づけ給ふ所に至り、大石の上に馬をかけあげ玉ひば、馬の足跡石に深く入るなり。それより北は丹波の國の境杓子峠に馬を駐め上に打あげ玉ひば、足あと又爰に残る。此より南は多田と定め玉ふなり。

### 龍馬の事

此の馬と申は康保四年の冬、滿仲朝臣所領なれば、攝津の國能勢の邊に入て狩し遊び給ふ事四五日、有る夜美しき女來つて御前に跪き居たり。滿仲見て、何なる者なれば女人の身として斯怖しき深谷に、而も夜中に來る事不思議なり。女の言く、さん候ふ。我は龍女なるが、憑み申し度御事侍るなり。其故は此河下に大蛇住んで吾と常に争ふ事年久し。然るに我れ精力つきて彼が爲に既に我が住所を奪はる。君の射藝智勇をうかひ計るに、龍宮天宮まして三國に並

ぶ者なし。此蛇を退治して我が命を助け給へと云ふ。満仲聞て、我奈何してか左様の物を安々と退治せんや。女聞て、君凡人にて御座ねば退治し給ふ事最安く侍らん。去りながら、其の時人多く傷らん、此儀は神力を仰き給へと云ふ。満仲許諾す。女悦び馬一疋をひきて、是に騎給はれ、此馬に乗つて水に入るに身につかず、目を閉ぢ空に登ると観念するに天宮に至るに安し。去ながら常には乗給ふなと語る。夢さめ見玉ふに馬あり、尋常の馬にあらず。頭に兩角あつて世に亦並びなし。其の後住吉に参籠して二の願あり、一に住所、二に彼の大蛇退治せん時外の仇なき事なり。此の時神鏡を得て大蛇を射とり給ふ。水引て後年の狩場に來て見るに一つの瀧あり。則ち龍瀧と名く。今に其の形ありけり。

### 満仲出家受戒の事

寛和二年八月十五日、法花三昧院にして満仲朝臣出

家し給ふ。御戒師には延曆寺の源信僧都を参られける。本尊の御前には香花をそなへ、僧都御後に立ちより髮剃落し給ふ。初に三歸戒、後十重禁戒と説授け給ふ。大哉解脱服無相福田衣被服如戒行廣度諸衆生と唱て、如法の御袈裟を授け奉り、御名を満慶入道と號し給ふ。御悦びかぎりなし。然其年來御恩を蒙りし人々女房達に至るまで、今さらに何と辨へたる事はなけれども涙を押かねたるは理りに過ぎたり。誠に御歳ごろとは云ながら、容儀禮佩心の剛雙びなく御座し御身を引かへ、墨の衣に香染の大衣を掛けしほくと見えさせ玉へば、悲き中にも貴くおぼえて、云ふ幻人のごとく鏡中の像のたとへ、御位とても恐なければにや、花山院はいまだ壯にもたらせ玉はて、御世を棄させ給ふ。況や其より下つかたをや。

### 出家功德物語并御臺剃髮の事

同日御臺所も剃髮あるべきとて、源信僧都もむかへて出家の功德は奈何御座候ふや。僧都の曰く噓ば出家の人は高く萬物に超て世の爲めの福田なり。主君もえて臣とせず、父母もえて子とせず。然るゆゑは昔俗にありては上に氏の高きあり、下に賤き兒童あり、今出家して後は俗氏を改め、忝も釋氏となり只た戒蘗を以て上下を分け、德行を以て敬ひをなし侍る。噓へば四方より流れ入る河には名異なりと申せども大海に入つては同水なり。此故に四河入海同一鹹味四姓出家同一釋氏と號し候ふ。然るに六道の中には人身得がたく人倫の中には出家する事かたき也。今幸に人道に生れさせ給ひ、佛の御教のごとく此の夕べ思し召し立つこそ目出度こそ御座せ。今よりは出家の志しを立て諸々の衆生を渡せんと誓ひて、金剛の誠をはげみ共に生死を解脱し玉へ。此の如く誓ふを眞の出家とも名づけ實の佛子とも申侍るなり。佛の曰く若人百歳の間飲食衣服藥等を以て大

### 源信僧都の事

千世界にみちみつる羅漢の正者に供養せん、其功德幾か計りかたし。若し人あつて一日一夜發心出家する功德には及びがたし、若し人あつて七寶の堂を立る其の善根莫大なり。若菩提心を發して出家せん功德はるかに勝ると説玉へり。都て出家の功德説き盡し難し、先つあらく此の如しと御物語りをはつて御背により御髮をそり落し玉ひ、是も戒を授け給ふ佛如尼公と名づけ給ふ。御傍近く常にめし使ひ給ふ女房達八人一同に髻切つて御弟子とこそなりにけれ

此源信僧都と申は、もとは大和國葛上郡當麻郷の人なり。童兒の時延曆寺にのぼりて慈慧僧正に事ふ。才智人に超え異國までも其の名を顯す。一向法橋より少僧都になる。是れ亦我が求めにあらずと云て深く往生をしたふ。敢て他業なし一事以上、ただ極樂に向向す。或る夜月に乘じ閣に登りひとへに念佛

を修す。飯坊の後大に悔て曰く、今夜のこと頗る清浄業の思ひあり、これ魔縁なり。才學の慢心つねに懐を動かす。是を恐れて深く道心門にもむき玉へり。かゝる尊き聖なれば御戒師とは憑み給ひける。

### 満慶法花三昧院に移り玉ふ事

一歳藤原仲光に、幸壽丸が代りとも思ひ不便に守立よとて給はりし満正の嫡子源次丸、今年十六歳になりしを多田左近満信と改名し、新田の家を譲り其内一萬三千町は法花三昧院分と定め給ふ。總じて満慶親子五人の所領九萬八千町なり。此の外一家の所領數をつくせり。八月十六日田井正時大宅光正を始め近臣の老臣十二人一時に髪をさる。明くる十七日満慶法花三昧院に移り玉ふ。

### 花山院多田臨幸の事

花山法皇は攝津の國、多田へ御幸ならせ給ける。昔

多田越の時に掛らせ玉ひけり。九月末の事なれば冬も近くなるまゝに、黒染の御袖通す深山嵐稻葉を傳ふ音すごく、鹿の音嘍々と曲かにて是れさへ凄く思召すに、巴峽の猿の叫ぶ聲、賤か爪木の斧の音、かたぐい聞きならはせ給はねばいと驚き玉ひける。嶮き山路を下りつゝ法花三昧院に入らせ給ひ、輿より下させ玉ひ遠計念誦なされける。本堂は西方無量壽如来なり。五劫思惟の御修行満足して阿彌陀佛と成玉ふ。去れば無爲の實體は遙十萬億土に御座とも隨緣化物の權迹は今此の堂に立ち玉ふ。誠に諸佛菩薩淨土十方にかまへ待ち玉へども、罪惡不善の凡夫入ことかたし、彌陀本願念佛の力らこそ殊に尊し。愚癡暗鈍の族も唱るに易く、一念十念も正業十惡五逆も廻心すれば往生と聞し召すにも微信を催させ玉ひけり。扱も此の地の景氣を御觀あるに、後は長山はるかに連り紅嵐寶林樹の枝を傳ふ。前は多田河みなぎり下たり六根の垢をすゝぎ、岩木何となく四方

は一天の君王として清涼紫雲の殿にやすみ、月卿雲客にいつかれて常に見狎させ給ふ人々より、また御覽する方もなきに今御飾あるさせ染衣の法皇とならせ給ひ忍ての御旅なり。大宮通りを南へ東寺西寺山崎や關戸の宿を過玉ふ。賤がかせぎの様々を初めて御覽座で、自ら出家せざりせばなどは係る哀なる事を見まじに克こそかくは成りたりと嬉しき事に思し召し供奉の人々を召れてあれを見よ倍々哀やな、過去の五戒の力にて適人間とは生れ出たれども、眞成の行ひもせざりし故にや、今淺猿さ士民と生れて苦を受ける無慙さよ。欲知過去因見其現在果欲知未來果見其現在因とあれば今かゝる貧しき身となれば、座禪念佛の少も修せず一分受をも改めざれば、戒善修福の功もつきて又生死の苦海に沈ん哀さよと、龍顏に御涕を浮めさせ御衣の袖をそゝがせ給ひしかば、權久を始め供奉の人々も御慈悲の御心ばせを感じ有り難く思ひ奉りて信心を催しき。

の山々紅葉して錦をさらすに異ならず。僧坊壘を並べたれば香煙窓を出で、雲霧のごとし。瑜伽振鈴の音すみ讀誦大乘の精舎もあり。念佛三昧の砌もあり。彼を見是を聞しめすにも、生死の闇晴る計りに思し召ける。兼て仰せの有りければ新殿かたの如くしつらひ是へ入れ奉る。満慶入道も御膝近く召されて生死無常の御物語りなど、貴く聞えさせ給ひ、汝は如何思ふぞと院宣なり。満慶承りかく有がたき君の御代に生れ出で、逢難き如来の説法を見聞仕る上は、縦ひ今までなせる處の惡業は須彌より高く、海底なほ下しと云へども、五逆十惡すら猶被許引攝と承り侍る。上はさりとともと懇もしく思ひ奉り候と勅答申上ければ、法皇微威を含ませ玉ひ、汝が云ごとく除も思ふなれば彌修行の功専一なりと宣へば、院宣の忝なき骨に徹し髓を通りてそとろに涙せきあへず袂を絞り兼き。其の後近邊の寺社山河を御覽ある中に數瀧と名づけし所にあり居給ふ。石巖二面におほひ

高く青苔巖にかゝり。峯には萬木枝を交へ綠蘿下を閉ぢ河面五丈上下一二町の間は岩の色瑠璃の如く水晶に似たり。或は五色相まじへて誠に裏にて御覽せし屏風の繪は物の數にもあらざりける。岩にせがれ砕けて流る山河の瀧より落る水のおと鼓の音に異ならず。法皇報感にたへさせ給ひて

津の國の鼓の瀧をうち見れば

たゞ山河のなる瀧なりける

と詠じさせ給ひて御伴の人々に此の瀧を題にて歌奉れとあれば我もくくとよんで奉りける中に法師なりける人

音高く名に流れたる津のくにの

鼓の瀧の岩をうつのみ

と仕る山奏し申上げれば御感淺からず見させ給ふ。

### 藤原保輔多田合戦の事

寛和の比、近江の國にて討れし藤原齊明が弟に保輔

る者、先づ山向次郎忠正、平居次郎元光、脇田五郎俊元、中河吉忠、關九郎三郎宗重、一矢九郎常元、浦邊小四郎兼吉、三矢三郎元俊、野間兵庫景吉、田井前司忠時、安井源太景持、中村源太氏則、金瀬太郎吉高、浦上記五郎、福田五郎光重、今吉次郎常元、安福矢五郎滿則、藤原太郎仲時、田原平太吉、此の外能勢、山本、谷の御家人まではや馳せあつまつて候へば、君はまづ御入まします。某團扇とつて若殿原に合戦仕ならはせ侍り、重て剛臆を委細に肥し御前にて申上べしとぞ申ける。是を聞ける人々、此の度分捕高名せずばいつの世にか家を起さんと氣を勵し拳を握り勇み進む。保輔は多田の里におし寄せあたりを在家に火をさし鯨波を上る。城内には兼て待うけし事なれども何者なれば夥しや、名乗れ聞んと云ふ其時に、魚陵の直垂に緋威鎧きて馬一陣に出し、大音聲をあげ藤原保輔と云ふ者なり、兼ての遺恨を散せん爲なりとぞ名乗ける。仲光さ、汝は西國にて山

と云し者、齊明討れてより、遁て西國へ下り居たりしが兄をうたせ無念に思ひ又悪徒をまねぎ集む。されば類にしたがひて爰かしてより山賊海賊小盗いにしへ主恩の郎等、或は承平のころをひ將門純友等にくみせし者、よりくにはせ集りほどなく千餘人と聞えし。此の勢ひを以て先づ多田に推よせ満慶を打とり、其の後京都によせんと下知をなす。保輔かく悪逆を企る事は、かれが父相ひ果しきさみ、訴延引につき其の所領所職を没收せられしかば、身を養ふたよりなきま、山賊海賊を事とし己が非義を省みず人を恨みしとなり。藤原仲光早くも傳き、満慶公に言上す。満慶曰く其の保輔と云奴原、たとへ何萬騎にて寄せ來ればとて何事のあるべきぞ、引寄せ置せよ、必ず天下を全ふせんと思ふ者は兵をついやさずして利をもとむ是れ勝利なり。敵は不案内なれば難所に追落し討とらん何の仔細かあらん。今爰に來る者誰々なるぞ。仲光申上る近邊の御家人馳せまい

賊海賊など仕るとは遠べきぞ、あれ討ちとれとぞ下知す。承り候と門を開き打出喚叫て戦ひける。帝釋修羅の合戦もかくやと思ひ知られたる。實に血氣さかんの保輔がまつさきに進み、たゞ一せめにと一寸も引ず、くりかけく揉にもむ、去れども寄手は長途に疲れ、城内には易に處すことに智謀勝れたる仲光が固めたる城なれば、品をかへて敵亦その攻る處を知らずしてせめあぐんで見えたり。其時に七尺有餘の大男黒皮威の鎧着て葦毛なる馬に打乗り真先に進み、保輔殿の郎等長尾悪源太重宗と云者なり。力打物とつて西國にて名を揚たる兵なり。我と思ふ人あらば御出あれ如何くと城をにらんで待請たり。爰に中村源太氏則と名乗て押雙て無手と組で引き付け、長尾が頸を搔とする處に中村鎧をふみはづし落とす處を長尾立なほつて中村が頸振ち切て棄たり。脇田の五郎保元と名乗て引組て落重り、えいや聲出して轉びしが、長尾が力や弱かりけん、脇田終

に上にのり長尾が頸をかき落し、鬼神と聞えし長尾  
 悪源太を脇田之五郎組とつたりと名乗ける。千騎萬  
 騎とたのんだる重宗討れぬれば軍勢氣を失ひ、一陣  
 破れて二陣の中へついで蒐る。二陣の備へ右次にな  
 つて見へたる處を賣太鼓を打て一度に採立蒐立けれ  
 ば、三陣より猶先に敗れ横山多田越の方へ我さきに  
 と落て行。もとより案内は知ず道は大勢にて押會、  
 たま／＼外を求め走る者は鼓が瀧の淵に沈み、矢間  
 の山の峰にたほれ、亡る者數を知らず。假武者ども  
 のくせなれば命を助からんとて、馬物具太刀刀道中  
 にすて皆ちり／＼に成にける。保輔は眷屬みな討せ  
 遣々逃て京都にのぼりけるが、世界廣と雖も身一つ  
 置べき所なく、討死せんには如かじとて夜に入て、  
 中納言藤原顯光卿の家に推入り下薦兼共を打殺し刺  
 殺しければ、家を棄逃出玉ひしを其跡に籠りける。  
 源頼光此由を聞き渡邊源五綱に仰せて、兵をつか  
 はし四方を圍んで攻ければ力なく自害す。同類多く

殺さる皆保輔がしたしき郎等共なり。

滿慶蛙の聲を止る事

入道殿折々入り給ひ、靜座閑居の離宮の園、南の屋  
 敷邊に蛙多く集り鳴聲に物音さだかに聞えず、讀經  
 觀念の妨となる此の蛙の聲をとどめんとて歌二首詠  
 じ玉へば蛙鳴聲を止たり。

難波江のよしあししらぬもろごゑは

これぞ蛙の歌くすとせん

なまぐさやさはだの蛙すだくこゑ

不動のまけるばさらだに來て

今に至て蛙の聲なし。

永延元年正月竹童子殿十三歳源頼信と改名す。

多田滿信三陳を問ふ事

多田左近滿信祖父滿慶公に三陳と云事は常にも用ひ  
 侍る御事に御座候やと問ふ。滿慶曰く天陳地陳人陳

の此三つはなほ常の事なり。先づ天陳とは上を敬ふ  
 の謂也。地陳とは下民をあはれむの儀也。人陳とは  
 中衆を仁愛するの儀なり。此三和する時は上天上よ  
 り下ならくに至るまで之に敵なし。  
 永延元年二月十一日より攝州西能勢山田に新宅を作  
 り源滿政に給ふ。  
 同年八月十一日東能勢野間に新宅を作る。  
 寛和元年二月十一日より攝州高代寺立つ。同秋より  
 榮根寺立つ。同年坂田大明神を祭る是は金時が母也。  
 寛和二年正月より攝州米谷に新宅を作て谷馬之丞を  
 居しむ。同年森本に新宅作る。藤原仲光にあずけ給  
 ふ。櫛川、田中、福武、澤渡、吉川氏、皆此流也。

多田五代記卷第四終

多田五代記卷第五目錄

渡部綱鬼神の手を討ち捕る事

渡部綱歌の事

鬚切膝丸の事

満慶閑居の事

満慶我木像を作り玉ふ事

兼家公宅饗宴付頼光馬を贈る事

海賊追討使付保昌策の事

平太郎能門多田に寄する満慶知謀の事

兵庫河合戦の事

化生退治の事

伊吹山酒童子の事

鬼切太刀の事

多田五代記卷第五

多田兵部輯

渡部綱鬼神の手を討ち捕る事

寛和年中の頃ほひ、洛中洛外のほとりに、貴となく  
賤となく、愛子寵女老若男女に限らず、公家武家に  
よらず、江村山中の人民、日々月々に數多失せけり  
其のさま死しても失せず、満座集まり居ながら其の  
中にて面り掻き消す様に失せぬ。其親慈母共の嘆き  
悲む聲嘍々たり。呼び叫ぶ聲洋々として岐に満ち、  
東西へはしり南北に尋ね。振すと雖も、行方さだか  
に知りたる者もなし。其の死骸とても有り處求むる  
に處なし。之に依て神子巫の天安奇言を吐きちらし、  
占かた祈念せしに依つて萬人を証し、此の費へに乗  
じて金銀を飽までにしける術、山伏の妄言して、  
婦人女子を欺き、其の子は某の山交、某の谷にあな

りなど云ひ、某の妻は何れの國の峰谷に行逢けるなど、綺言を交て語りければ、富家の男女兩親僞と思ひながら感はさると知りながら、彼が僞言に誑されて、家財を盡しあたへて尋ね行かじめなんどせしかば、洛中噪しく恐しとも、中々如何なる大丈夫も、黄昏より往來絶つ、日西山に淪めば門戸を鎖し窓を塞ぎ、諸人互ひに諸用を闕きけり。或は盡にもなれば近隣の友生寄り集り、兎やせん角やあらましと此の一事のみ沙汰しつゝ日を暮し、之が爲めに四民共の家々の家職を忘れ、民は耕作を怠り、旱魃して苗枯るといへども、夜水を受引かけ溜すことなく、五穀も實らざれば、上王侯より下士庶人にいたるまで、露の玉の緒を繰り便りもなきに至る。呼世大にみだれける。去れば帝には此の一事衆評詮議おはし、或は都近國の山村の老若に問はしめ糾し、或は卜者を召て筮し占せ給ひしかば、或は狸奴白狐の所爲ならんと云ふもあり。或は天狗の幻術なりと

云ふものあり。或は西山の鬼神の業也と説くもありけり。其の説一に歸せず。然るに安部清明卜つて曰く、此れより西山大江山の鬼神、其の眷囑を遣はし貴賤の人民を惱亂せしめ、都外洛洒一日として靜ならず。愁ひに沈む者の多かりき。是れを退治ましまさば、都は太山の安につくべしと申し上げり。帝敕聞ましつゝ源の頼光に命じて、鬼神退治の宣旨をかうむらしめ大江山に赴かんとす。先づ四臣を召して謀を帷幕の中に廻らして、勝ことを千里の外に決したまひける。倍臣には源渡部綱、藤原保昌、坂田金時、卜部六郎末竹、碓日貞光等、廟算し相議せしむ。頼光四臣に對して曰く、我れ斯く天下の武將として、治國平天下の任として、かゝる非常天變有つて、鬼畜の類ひに天下を亂らしめ、人倫を惱亂せしむること且つ王威の輕きに似たり。又は武威の衰へたと云れんも口惜し。されども鬼神は神變不測のものなれば、爰に有るかとするれば彼處に變化

す。前に有るかとするれば忽焉として後へにあり。目に見えぬ鬼なれば千騎萬騎を従へたればとて、互ひに討ち戦ひ雌雄を決しがたし。中に翔り空に飛んで自由自在を働けば手に立つべきやうなし。各は如何がしてか、彼の惡魔天藥を鞭撻し伐りたいらぐべきや。君命通れがたければ旁々其の謀を演られよかしと宣ひければ、藏原保昌、答へて申さく、普天の下率士の濱何國か王臣にあらざるや。何方か鬼の住處有べきぞ。唯々急ぎ大江山へ數萬の軍兵を引率し、柵人金地多く入れ葉山茂山燒き崩し、大山を充にし、諸山を踏にして、萬木青山伐り平げ、谷をうづめ峰を崩して、岩も岩石も堀り崩し、平地となさば、此の時彼の鬼神の住所保つべきか。若又出逢はば、土地平によき合戦場になし、よき圖に引き付け戦はば、精兵の大弓にて一々射殺し、其の上彼れは生腐、是れ大軍の兵ともは皆鐵の鎧なれば、彼れが持道具は、木の枝岩のかけを礎にするより外の事よあらじ。

爪むとも爪立じ一々首ねぢ切て京都への家づとせんと、手を取るやうに述べければ、綱聞て此の謀尤も理に中れり。去りながら彼れは變化自由自在のものなれば、他の國へも住所替へなば大分の功を空ふするならば、天下の諸大名の嘲りを如何せん。只面り洛陽の内外にて崇りをなす惡鬼を手近く搦め捕て、帝の御目につけて彼に捕はれたる人々の妻子親兄弟の吊ひ供養のためにし、其の親兄弟の恨を晴さんには、如かずと評すれば、頼光聞し召され此の謀と然るべし。先づ洛陽王位を恐れざる曲者の其の罪を刑罰し、其の惡を討つと即時當る處の政也。先汝今夜試みて出遇ひ討ちをほせば幸也。若し手に合はずんば其時大軍を率ひ押し詰め、惡鬼一々撫伐にせん。早や行けや。今宵洛外洛中を順行し試みよと御詔あつて鬢切と云ふ太刀を帯かせ賜ふ。綱敬んで御請を申し御前を退出して、御所の馬を賜つて我屋に歸り、垢離かき精進し、伊勢天照太神宮并に男山八幡宮、

愛宕権現摩利支尊天に丹精を抽てて祈誓を懸け、此の王士の悪鬼等を速に退治の功をなさしめ玉へと祈りつゝ、緋緘の鎧のわたがみ取つてさつくと着し、五枚兜の鍔かた打たるを猪頭に著、指繩腰に付け、只だ一人口付の男二人相具し、爰の辻彼處の小路にイみ四方のありさまを窺ひ見れども、さらに不思議の事もなし、定て狐狸の所爲ならん。さまての事もなかりしと思ひつ人の否通りがたき處に至りて、彼の天魔化生の物を待けるに、夜いたう更け心すごき折りふしに、歳のほど廿餘りの若女房の、雪の肌へ花の顔、雲の髪づら、月の笑顔のかゞやきて、此の世の人とも思はれず、誠に姿うるはしげなるが、紅梅の打箆に守りかけ、佩帯の袖に經をもち、人も具せず只ひとり南へ向てゆく、綱は北へすぎ行きけるを何處へおはする人ぞと問ふ。童は五條あたりに住む者なるが、有る方様へ参りしが餘り夜ふけ怖し。少々贈りて給はりてんやと馴々しげに申ける。綱聞

き、是こそ不思議のものなれ。町中とはいへども、斯る騒敷をりふし女人と云い、夜中と云ひ、一人と云ひ、ことに貌も美弱也。是れこそ彼辯者なれ、如何はせんと思ひしが、喰いかなる物なりとも何程のことのあるべきと、馬よりとんでをり、此の馬にめされ候らへと云ひければ、悦敷こそと云ければ、綱は察したりと、女房を掻懐き馬に打騎せんと云ひ取へず、取て押伏せ搦め採らんとしたりしに、此女房心得たりと云ふまゝ、忽ち一丈計りの鬼神と化し、綱が胃のしころを掴んで雲井に上らんとせし處を、綱は透さず鬚切抜き、鬼神の腕をふつと切れば、門前の石だたゝみの上にころび落る。鬼は手をさられながら、愛宕山の方へ天狗星のごとく光り渡りて行ける。兜の鍔に付きたる鬼の手をとつて見れば、雪のはたへは引きかへて黒きこと限りなし。白毛ひまなく生しげり、銀の針をさし並べたる如くなり。綱は是れをしるしに頼光の御前に持参す、頼光御ら

んあり。是こそ鬼の手ならん。打得ざるこそ残り多けれ。重て害をなすまじやと、安部晴明を招て、此の事如何あるべきと問給へば、綱は七日の間諸事を慎むべし。鬼の手は能々封置給ふべし。御祈禱には仁王經を讀誦さるべしと占により、貴僧を招請せられこれを行はれける。既に六日の誰彼ばかりの月もほのぐらさに源五が宿所の門を叩く。何方よりと尋ぬれば、渡部に在ける母なるが、登りたりと答へける。綱さゝ人を出して申さば、悪さまに心得給ふこともやといそぎ立ち出て、御登り有難く悦び入り候へ共、去る仔細侍りて七日の齊にて、今日すてに六日になりぬ。明日計りは我が一條なる宿所へ御入り給はり候らへ、明後日は必ず是へ入れ奉るべしと立てたる戸を細く開き、顔ばかりを差出だす。母は是をさき醒々と打泣きて、さてく力及ばぬ事ともなり、和殿を母が生み落し、より請取つて養ひ育てし志を、幾計とか思ふらん。夜とても安く寝もせずし

て濡れたる所に我は臥し、和殿は乾ける所に置き、荒き風にも當じとし、早晩か我子の成長して武勇も人に勝れ、智謀も世に越へん事を見ばや、聞ばやと思ひつゝ、夜日これを願し甲斐あつて、四天王の隨一箕田の源氏と云れれば、悦しき事に思ひ、久敷見も見へもせねば、都鄙遠道の路なれば、常には登る事もなし。戀しと思ふこそ、親子の中の歎きなれと、戀に口説たて門の戸を叩き泣にける。綱も心弱くなりしかども、又言を返して云ひけるは、齊とは別の仔細候はず。主君の仰せを蒙り、鬼神を退治せよとの命を承はり、終に鬼神に行遇ひ其鬼の手を切取つて、君の上覧に備へければ、一七日仁王經を轉讀して、齊すべしと仰せ付けられる。君命重ければ斯申ぞかし。殊に鬼神は神變不測の者の如何やうに變化して、我を誤らせんも計りがたし。母と化し來らんも知りがたしと、細々と語りける。母つくく打聞き、さほどの事とも知らずして恨けるこ



を悔しければ、既に立歸らんとす。源五もまさしき母の事なれば、何かは以て苦かるべきやと、やがて内に入り誰々は何しに御仲申さず候ふや。只一人御登りこそ、ろへ侍らね。母聞きを、其事我れ彼れ等にも知らせずわざと忍んで登りたりと、四方山の物語りの後ち、和殿が取りし鬼の手を一目見ばやと云ふ。安き御事に候らへども、堅く封置き侍れば明後日までは叶ひ候ふまじ。母聞き、由々さては見ずとて事の闕くべきならず我れは亦この曉より歸るべしと思ふなれば、かくは言ふなりと恨顔に見へければ、封置きたる鬼の手をとり出し母に渡す。穴怖や、鬼の手と云ふものは蒐る恐ろしきものなり。去りながら此の手は我が手に似りとて、立つよと見へしが、とびあがつて破風を蹴破つて空に光りて失せにけり。綱は鬚切抜て飛びかゝり、虚空を睨んで立つたれども眼に遮るものなし。七日の齊み破れぬれど、仁王經の功力によつて身に子細は無りける。

渡部綱歌の事

源五綱は御前に出て、右の次第しかくんと申し上る。頼光仰せけるは、是非なき事なり。若し人の如何と云はんに、ひがことなりと云ふべきと宣ふ。源五袖かき合せて、

なき名ぞと人にはそれと答ふべき、心とは何とこたへん

と、この歌によつて御前よろしく、愈世に名は知られる。

鬚切膝丸の事

會て滿仲、平素思案を廻らし慮かりけるに、武士たる者の嗜みは、能き太刀なくては叶がたしとて、兼て日本に名を得たるほどの鍛冶を召て、太刀を作らせて見るに心に叶ふ太刀なし。有る者申し侍りしは筑前國へ異國より鐵の細工人來りしよしを語る。滿

仲悦びいそぎ召て、多く作らせて見るに、是も心にさらに叶はずして、空く下るべきにてぞ有りける。鍛冶つくく思ひけるは、我れ西國より遙々と登りし甲斐もなく、空く罷り下りなば、細工の名を失はんこそ、薄情けれ。佛神の御力に寄らずんば、争か名劍を治い出さんと思ひすまじ。八幡へ詣うて、歸命頂禮八幡大菩薩、願ば天下の寶となるべき太刀を作り出させてあたへ給へと、肝膽を碎き、至誠心に心を虚にして祈りければ、満ずる夜の夢想に、汝が申す處も不便なり。六十日の間鐵を鍛錬して作れ、我神力をもつて最上の劍を二つ與んと、夢裏新に神託を蒙り、其の後金を鍛ふこと六十日にして、無上の太刀二つ作りて捧ぐ。之を見るに、沸渡に双温潤に潔し、抜ば氷を碎き玉ちる計りにて、太刀の姿も鮮なり。長さ二尺七寸、彼の于將莫邪、太阿の劍、漢の高祖の三尺の劍、除君が望みし季札か劍と申とも、争是れにはまさるべきと、御悦は限りなし。極

罪の者をさらせ給ふに、一ツの太刀には、膝を加へてきりければ、膝丸と名付く。今一つの太刀は鬚を掛けて切離せば、鬚切丸と名く。後三男頼朝傳へける事不思議なれ。其由來を尋ぬるに保元三年の亂に、父義朝は藤原の信賴に與して、平の清盛と合戦す。時に頼朝十三歳なり。源家累代傳ふる源太が産衣の鎧、并に鬼丸と云ふ太刀を頼朝に授けければ、源氏の正統を繼ぐべき兆し自然と此の人にあらはる。父義朝に従つて戰場に有りしが義朝の軍さ敗北して東國に落ちらる。頼朝同く打連しに大に勞れ、馬上に眠りつゝ、父に打ちをくれて引さがり、只た一騎うき、近江地に下り森山に至る。里人出て頼朝を捕へんとす。頼朝鬼丸を抜て鬚を掛けて二人切殺す。里人恐れて逃げちりぬ。それより太刀を鬚切丸と名付ける。源氏累代の重寶多田の滿仲よりの相傳、目出度かりける名劍なり。

滿慶閑居の事

滿慶此の頃は、法花三昧に御座給へども、人のとひ來ること震し。諸業みな道場とはいへども、五濁惡世の凡人、五欲の業に迷ひあれば、猶山深く入らんにたとへ、同じ多田の内、波豆と云ふ所に庵室を造つて、時々これに入り給ふ。高山四方に聳ぬれば、白雲山の腰をめぐりて四鄰となる。紅葉にそぐ昔清水、錦を潜にことならず。誠に幽閑閑疎にして、一念三千、中道、實相、圓頓、止觀の觀念の窓の内に、自ら佛前の燈を挑げ、昔族、遠提、希夫人、佛世尊の御教を受け、順次の往生いと床敷思して、極樂往生の志の外は、聊も他事なし。日西山に淪む時は、遠に十萬億土の樂みを思ひて日想觀をなし。則ち、去此不遠と觀す。風嶺松を傳ふ。折節は、微風、吹動、諸寶、行樹、及寶、羅網、出微、妙音と思ひ准らへ、朝暮の御修行劫つもあり、いと貴くぞ坐

ける。かゝる故にや兒童二人來りて、つねに御心のまゝに仕る。何方より來るとも人は是をしらず。

樂按淨三六根一則乙若ノ二預侍ニ左右ニ有ニ  
使令一先レ意能辨ト云フ是ナリ

滿慶御影を作り玉ふ并に

御誓の事

法花三昧院の滿慶の尊影とまうすは、有る時御舍弟左馬之助、源滿政朝臣、同滿實、同滿季、子息には左馬頭源賴光、同賴親、同滿賢、同賴信、多田左近源滿信等の人々、御前にあひ議し、願くは御尊影を自ら御作り候らへかし。院内に安置し末代までも、弓矢の守り本尊と仰ぎ奉らんと望しかは、滿慶許諾して、何もの願ひなればよりく作るべきなり。それ衆魔を降伏せんには、身に甲冑を被り手に弓矢を持せんにしかし。彌陀の利劍愛染の弓、多門の鉢を提しも、皆これ法べんのわざなれば、是も災難を干

里のほかは、退んには、昔血氣さかなりし時の貌には過しとて、安和元年戊辰より一刀三拜して刻みたまふ也。甲冑帶劔の體、龍馬に騎つて白羽の箭負、右に手綱を控へ、左に弓を持ち、二十四歳の姿實に如何なる天魔波旬も恐るべきとぞ見えたり。其の時自ら御影に向つて、一つの大願を發して曰く、

- 於我滅後、末世擁護朝一家
- 於我滅後、末世擁護武一家
- 於我滅後、末世擁護三寶
- 於我滅後、末世降伏諸魔

さて亦人々に向つて、我沒後に廟所に一つの不思議あるべし。さあらんにをいては、我願、満足したると思ひ給へ。我れ淨世にあると全くかはる事あるまじと宣ひければ、其の座の人々未曾有の思ひをなしかる。あんのごとく御往生の後、天下の善惡に付けて、御廟鳴動あげてかぞへがたし。常に仰られしは我が願ひ成就したらんに、淨土をもとめん行者あら

ば、災難をばらひ臨終の時擁護し、共に佛土に教導せんとなり。

兼家公宅の享宴付賴光馬を贈る事

永延二年八月攝政藤原兼家卿、二條京極に新宅を造營し、百官を招きて享宴を催し給ふ。然る所に源賴光朝臣馬三十疋率せて、左右の大臣以下に奉らる。永祚元年八月、三方に三つの日出て亦後に合せて一となる。同く十三日俄に大風起り、宮城諸門其外神社佛閣顛倒する事、かすも知れず破壊せり。昔もさる例あり。堯の時十日並出草木焦枯る。羿に命じ仰せて、十日の目を射る。其九鳥に中つて皆死して羽翼を墮す。九の鳥日輪と化しぬる例ありけり。此の三方に三の日もからすならんと評す。同二年正月一條院御元服あつて、正暦元年と改む。

海賊追討使 保昌策の事

此のころ都の内は静なれども、田舎邊には盗人多く、海には海賊、山には山賊あつて往來の男女をはぎとり、擲き殺し啼き喚ぶ。海賊の張本何の阿闍梨とかや云へる者、四國邊に發向し、其の徒黨を招て數百餘艘の船をあつめ、海上往來の官物を奪ひとる由、之を捕へ坐せんとて、頼光朝臣の下知によつて源忠良朝臣、藤原保昌兩人まかり向ふ。保昌が云くもとこれ盗人ともなれば、追討使ときかば、跡も見せず落失せては詮なかるべし。某存じ候ふは大勢を船のそこにかくし、商人の船に作り似せ、海邊を巡らば定てよせ來るべし。其の時一人も残さず生とり仕らん。此議如何あらん。忠良さ、實にもたぐまれたり。これに上こそ謀とあらじとて、五艘三艘づゝ四國の浦にこぎ寄る海賊ども、是を見て能き船こそ來れと數十艘こぎならへて、忠良、保昌の船にのり移

る。太刀長太刀をひらめかし、討つて取らんと誓る。其のとき甲冑きたる武士數百餘人ときをつくつて這出て、散々にさりちらす。盗人どもは案にたがひぬれば、己が船にのらんと一度にこみ乗ければ、推落され波に沈み死する者かぞを知らず。保昌忠良船やぐらに上つて、已等諸人を掠奪ひし天罰争でか遁ん討てや殿原と下知す。其時盗人の張本等、これは何人なれば斯はし給ふぞ。保昌さして是れは都よりの追討使なり。盗人さ、下にひさまづき我々もとより朝廷へそむかず、只商人物を請うて其日の食を儲けんため計りに候らへば、御免しあれと云ふ。然らば何とて大勢をあつめ人を殺し刺ぎ取るぞ。盗人答ふることなく、船を漕ぎもどし逃げんとす。一人ものがさじと彼が船にとび入りことく討とりける。

平能門多田に寄す付滿慶知謀の事

正暦元年二月のころより播磨の國に、平太郎能門と云ふ逆徒蜂起して、近邊の里々討したがへ、其の威一國に振つて、軍勢雲霞のごとくぞ聞へし。是れは承平に討れし平將門が妻の子なり。父討死せしのち常歳子なりしかば母懷にかへて、播磨の國によしみあれば、其の便に付て來たり、傍に身をひそめ、焼野の雉子應に逢たる心地して、一時も安緒の思ひなく、人の聲高き時は、あはや敵の手に入るかと肝を消し、蝮の夕を待ち、夏の蟬の春秋をしらぬ命なりと明かし暮しけるが、程なく長て身の長高く力人に勝れ、心剛なる大不敵者となりぬ。其のをりふし、彼の憑みし人も相果て世を繼げべき子なれば、多年の管領の守護職を改替せられけれど、指あけずして己が物とす。頼光さして彼れを其まゝ置きては國政の亂れ、武威の妨げとなるなりとて、討手を仰せ付らるべきの沙汰ある由、能門さして郎等に馬淵四郎爲次、高屋藤九郎成俊、小山平藏、日肩次郎

と云ふ惡徒黨等にむかつて、我か父を討しは秀郷なれども、藤太はもはや相果て、其の子千晴は安和のころ罪に沈む。今滿慶頼光は身にあてたる敵にてはなきときぬれど、我かくて有よしきながら所領の少も申し行はざる條、内々これを奇怪に思ふなれば、是を次而に滿慶頼光を討とり、父が恥を雪めんいざ旁よ都へ通る道なれば、門出に入道と討とり、其後都に上り頼光を討て本望を遂げんと、三月三日に國を立ち、多田の里に押よせ時の聲を上ぐ。思ひよりなき事なれば上を下へと返ける。脇田五郎ややらに登り見渡せば、其の勢ひ山野にみちたり。能門其日の裝束には、木蘭地の直垂に黒糸威の鎧を着、五尺餘りの太刀をはき、二十四差たる黒繩の矢負塗籠藤の弓脇に挟み、鹿毛なる馬に白覆輪の鞍置て打のり、一陣にかけ出し只今これへ寄たる大將を誰かと思ふ。平將門が子に太郎能門と云ふ者なり。滿慶に恨みあり、其の上天下をくつがへし一度父が

本望を達せんと思ひ立ちぬる軍の門出に、御首給はらん爲に是まで来れり。今の内に攻落し申さんと廣言吐て控へたり。五郎さへは誰なると思ひしに、將門が子とや何條去る者ありと、兼て聞し召されしかど、影をかくしある上は、さのみやとは仰あかれしを、恩も知らぬ逆徒のあふれ者、目に物見せてくれんとて、櫓の上より散々に射たり。其の隙に城中物具かためきつて出て、死生知らずに戦ひけり。寄手大勢なれば先陣打たるれども、後陣ひるます。一陣破れても殘黨全し。城内には小勢なりといへども、田井源太夫忠時、野間小太郎、平居元光、中河吉忠、今吉次郎、安福源五郎、今北太郎、一極新七郎、森次郎、池田兵庫五郎、浦邊兼吉、藤原常正、松山次郎、高木八郎太夫、山本馬太郎等の一騎當千の兵、爰を専とばたらさければ、敵八十七人討とる。其の外手負は數もしれず。御方にも浦邊兼吉を初め、一の矢彌九郎、三ッ矢三郎太夫、松山次郎等

の侍十餘人討死す。疵を被ひる者多く見へける。兩方は氣疲れて控へたり。満慶公は法花三昧院に御座けるが、いそぎ来て我れ出家入道となり、敵なればとて我亦人を殺すべきにあらず。猶以て御方を討せても益なし。我知謀を以て敵を拂んとて、先軍を止め爰をひらき向ひの城に籠らんと給へば、満信申さる。仲光以下の兵共まで此城をすてん事口惜しく存候へば、たゞ此所にてこそと申切つて出てん氣色なし。満慶重ねて仰せけるは、去ればこそ、將の軍を思ふること昔より三つあり、軍の進むべからざるを知らずして進めと云ひ、又退くべからざるを知らずして、これを退くと云ふ。然るに勝ことを知るの道あり。與に戦ふべく與に戦ふべからざるを知る者は勝つ。此故に彼を知り己を知らば百度戦へども、殆からず。彼れしらず己を知らば、一度勝ち一度負く彼を知らず己を知らざれば、戦ふことに必ずやぶる。其れ戦の法は兵を弊さずして利をもとむ。我今

彼我をしれり。其上世を背き、此の身となればたとへ爰をひらきたるとて、手ぬるき合戦したりと笑ふ者もあるまじ。有ればとて未來の大敵を見かけ、今生僅の小敵に逢ひ妨げられんや。かゝるを堪忍するをこそ、忍辱波羅密の修行とも、代を捨つるとも名づけたり。此度は先我が云ふに任せよと仰ければ軍兵疑の思を散じ、夜にまぎれ向ひの城にのぼり旗少々さし上げ、戦を止鳴を静めておはしける。能門よろこび敵を懐すして詰の城へ入たり。然れども、此城四方岸壁へて容易く攻登る事成がたし。見體に四方谷深ければ水あるまじ。俄の事なれば糧乏からん。五三日の内には是も手痛程の事なく追拂んと水の手を留め、徒に城中を偏の雲に見上げ夜日守り居たり。城中よりは少々遺矢ばかり射くだし、猶しづまりかへつて居たり。寄手は下にてもたゆれ共、差も嶮阻なる山の頂に岩を登て塙をぬり、矢さま計りを開けたれば屏風を立てたる如し。差もはやりし

能門もあきれ果たるばかりなり。斯て三日以て送りける。能門士卒に云けるは、最早城内に糧も水もつきぬらん哀さよと云ふ所に、満慶其心を覺り仰けるは、推量するに此所に水ありと見ば攻あぐんで陣を拂ん。我討略は爰なりと、舍人共に馬あまた柵の外馬の湯あらひを一度にこそは仕たりける。能門見て氣短き男にて、さても能き水澤山なり。我案相違したり。此城攻め抜き難し其上頼光後陣より取巻なば難儀ならん。先陣を引本國に歸るか、又は兵庫邊に支んか、重て本望をとげんとて烽燒さすて、百騎二百騎夜にまぎれ引きにける。未夜も明けざるに満慶の曰く、能門定めて今夜陣を引かん。夜明けなば見るべきと仰せによつて人々不思議に思へ共、明方の霧の絶門より見るに案のごとく、霄まで居たりし大勢一人もなし。燒弃てたる烽火計り絶々に白く残りしは、御詞の遠ざる事人の心を見知り給ふ事、十日

の視る所十手の指すが如しと、兵士ども皆舌を巻きける。是より此所を米山と名づく。

### 兵庫河合戦の事

源頼光朝臣は、近江國竹生島參詣とて出給ひたる跡なれば、多田に合戦ある由早馬を以て言上す。能門も兼て其無さを窺ひ透間を知る故なり。頼光朝臣取る物も取りあえず、綱、金時、貞光、末竹等を引具し、僅か千餘騎計にて三月九日の明方に、吳服里につき給ふ所に、今宵敵は落ちたる由、其れあますなと鞭に燈を揉そへ我先にと馳にけり。毘陽野を過兵庫河を渡るとて敵の後陣味方の先陣追付、敵と見るより時を發す。敵も亦踏とまつて河を隔て矢束をとさき、搔柄ついで矢戰計にて、其日はやがて暮れにける。兩陣互に遠烽りを燒き夜討ちや有らんと用心隙なくぞ見へたり。頼光仰せけるは、今夜の中に後の森陰にかくし入れよ。夜明けは正兵を以て随分に戦ひ、

相圖の旗を差し上ぐれば、森陰の伏兵三百五十餘騎小松陰より鑓を雙べ、旗五流れ白雲のごとく靡かせ敵の跡を押さつて、中に取り巻かんとす。能門見て、偕は敵に謀られぬる無念や。取りて返して跡なる敵にかゝらんか。又は先の敵を防んかと云ふ内に、源氏の勢を見れば、宵に見しとは莫大大勢になりける。是は一定跡より後馳に來ると覺へたり。先を破らん事叶ひ難しと云ふ所に、能門が後陣忽に破れて一戦も戦はず、斯様の時は物具太刀刀妨げなれ、只すはだにて逃げよと云ふまゝに、濱の方へ走るもあり、或は山に蒐りのぼる者もあり。深淵に落ちたり、命を棄るも多し。初は儀勢しつる小山も後髪に引され、小松の陰に寄りそひ居る所を金時見て、天晴敵よと云ふ儘に和殿は誰そ、これは小山平藏とて能門の郎等なり。御身は誰を、我は坂田金時なり、偕は四天王にて御座けるな、敵に嫌ひなし、いざと云ふまゝに馬上にて引組みしが小山を些とも働かせず、

我陣所にひいて來らん。其時勝にのり追蒐くべし。其くらいを見引き付て森かげより、伏兵起つてかけ出て奇兵に入り取巻さ討ち捕るべしと、秘々相謀つて貞光、末竹、金時に三百五十餘人をすぐつて、小柴生たる松陰に明くるを遅しと待ちにける。横雲東にたなびき夜はほのくくと明けれども、未だ人陰も慥ならざるに、眞黒に甲冑うたる武者黒き馬に打乗りて續く勢三百餘騎、河波を颯と蹴立ちて、小山平藏行俊と名乗りてをめささけんで蒐りける。源氏の兵鑓を支て散々に射る。小山こと共せず是ていの敵に支へられ、未代まで笑るなど群る中へ入らんとす。能門見て小山討たすな續けやと一度に河を渡しける源氏は、兼ねて相圖の事なれば一戦にも及ばず引き退く。元來思量なき能門なれば、敵は落つるぞ追詰め討てよ殿原と呼はり蒐る。源氏方にはさのみは敵にさとられじとて、十騎廿騎踏み留々々支んとする體にて、敵を殺所に引き付けて相圖の太鼓をうち、

日本一の大力こゝろみよと鞍の前輪に引付け、頸抜きて捨てたり。間淵高屋村井悪源太なんと云ふ。能門が頼みきつたる郎等三四人許残り留りぬ。目肩次郎も跡の敵を防んと又生田河邊まで引歸す所に立歸る味方に跡の勢は如何と問へば、敵は早先へ行渡たり。道々に立閉がつて其勢雲霞の如くにて一人も通さず。我主人も云ひ甲斐なく討れ候にと云ひ棄て山の方へ落て行く。目肩も今は能く顔もがなと待つ所に、谷の馬之尉と名乗りて四五騎にて馳せ來たる、南方太刀打の名人、馬も究竟の逸物、のりても心さゝなり。餘り手痛く戦へば、太刀の打合ふ音燵の如し。馬之尉が太刀物うちより打ければ、と次蒐つて無手と組で、兩馬が間に落ち重り上に成り下に成り轉合ひしが目肩が力や勝りけん。馬之尉をとつて押へ甲推のけ、首を搔んと腰の差添へ抜く所を馬之尉が郎等馳せ寄つて、目肩を上よりちやうと打引きのけて頭を取り馬之尉を引き起す。初め太力に強かに

押へられけるによつて息もはずむ計りなり。掻いた  
 き馬に打のせ敵の馬に我も打乗り、味方の陣へと加  
 はりける。能門今は是迄成りと、鎧の上ちび切て捨  
 て腹かさ切て伏しにける。間淵も高屋も一度に腹を  
 切りける。渡部蒐寄つて一々に頸をとらせ、大將  
 の御前に並べしかと見知りたる者なし。渡部又御前  
 を立ち遠かの濱べに歩ませゆく虜一人をえたり。是  
 れは誰頸なると問へば、彼者涙を流し是れ大將にて  
 候、能門殿の御頸なり。其次は誰々にて有げに見へ侍  
 べると申しける。さては残る敵はなきか。いや別に  
 名の知れたるほどの者は侍すと涙にくれて居り、渡  
 部聞きてさらば汝を助けんと繩をとさゆるしける。  
 さて頼光朝臣は多田に立ち歸りて、御敵討ちとつて  
 候ふと御目に懸けたまへはゆしくぞ見へける。

正暦元年三月、滿慶住吉參詣

同十五日、滿慶八幡參籠

同十六日、多田左近源滿信十九歳にて、頼光朝臣の

七八人出現し、丹波と丹後の堺大江山へとび入り申  
 すよし、兵を遣はし彼山を尋ぬ。人倫通ふなき大江  
 山の半まで忍び入り、物陰より遙かに伺ひ見せ侍べ  
 れば、岩岸たる岩を楯にとつて、難所の岩窟を住家  
 として、十七八なる大童子、其長八尺有餘と見へ、  
 いかさま天狗とも謂つべし。守護する處の眷屬も、  
 よのつねの人とも見へざる逆徒數十人には過ぎずと  
 申すに仍つて、近邊の兵を以て攻め候へども、神變  
 自在にしてしかも形ありと見れば其まゝ失せぬれば  
 幾千萬にて攻むとも人力にては討つこと叶ひがたく  
 御座候に依りて、引き返し又見せ申す處に、如何思  
 ひけん住所を替へ見え申さず、爾所に千丈嶽と申す  
 所に居侍べる由、いそぎ討手の兵を給はり候へと、  
 渡部の綱をもつて言上す。頼光聞き給ひて、さては  
 彼の鬼畜がなせるわざならん、是れ私に計りがたし  
 と、いそぎ參内あつて右の次第奏聞ある。之に依つ  
 て公卿參列あつて古例をもつて詮議ある。其の時拾

女を嫁す。

多田の館能門がために破らる。去るに依つて三十餘  
 町去りて、北の山を伐り開き城郭を築く。正暦元年  
 三月十一日より初まる。奉行は田井源大輔下山源七

化生退治の事

去々年の春、渡部鬼の手を打ちしより、世且靜かに  
 て貴賤安くいねしに、此ころ亦京田舎ともに人多く  
 失す。剩さへ牛馬六畜を掴み裂く。これ何の所爲と  
 も知れざる處に丹波國の守護多木源三景好が方より  
 早馬を以て申しけるは、去んぬる秋の半より、丹波  
 と丹後の境にて一つの不思議あり。住來の男女行  
 さがたなく失する事數をしらず。諸人歎き悲しむと  
 申せども、何れの所爲ともしらざる處に、或者の申  
 し侍りしは、越後國の山寺に外法成就の者あつて、  
 忽に鬼のかたちとなつて、神變自由を行ふところ  
 に、類にしたがつてこゝかしこより、同様なる眷屬

遣使大納言行成申させたまひけるは、昔も鈴鹿山の  
 夷賊は田村將軍まかり向つて誅討す。其後源の滿仲  
 は信濃國戸隠山の鬼神を打ち取る。其例にまかせ源  
 の頼光朝臣に仰すべきかとあれば、此の議もつとも  
 然るべきなれば、頼光直に進發して鬼神を退治し、  
 宸襟を安んし奉るべしと仰せ下さる。頼光畏つて勅  
 答し、宅に歸りて、今度丹波の化生退治仕れとの勅詔  
 を承る。然るにこれは盜賊等とはかはり神變自由  
 なる化生と云ふなれば、たやすく計り得かたし。神  
 力を仰ぐべし。春日、石清水、住吉、此三神は我常  
 に拜する所なれば、保昌、貞光、末竹代參すべし。  
 源五はよろしく用意せよと仰せける。密々もよふす  
 ことなれども、山田左衛門尉忠重、權太輔頼平、多  
 田左近滿信等來りて共に參らんと望むによつて、彼  
 れこれ一千餘騎計り、丹後の浦一見とて三月廿七日  
 京都を進發あつて、同晦日の夜は丹波の國氷上郡と  
 ある山寺に御陣をめさる。頼光、保昌に仰合されける

は、今度大勢にて寄せは身をへんじ失ふへし。智略をめぐらし討つべきなり。昔素盞高尊出雲國へ降り給ひけるに、啼哭する音あり。尋ね行き見玉ふに、老翁夫婦小女を中に置き髪かさなて哭し居たり。尊問うて云はく、汝等誰人ぞ、何故哭するや。老翁答へて云く、此河上の山に大蛇すんで常に人を呑む。我に八人の小女ありしが、年々大蛇がためにくらはる。恩愛の慈悲爲方なくて別れを悲み侍るなりと語る。尊之を憐みて、汝が娘の命を助け、我に得させてんや、老翁老婆は手を合せ給ふこと限りなし。老人は出雲の國の長者なれば、それより酒をとりよせ八の甕に酒を湛て、姫を大蛇の居る東の山の頂さに三重に棚を作り、其上に立ちて朝日の影を移し給ひたりければ、彼瓶の内に八人の美女あり、是を賞の人と思ひ、人をのまんが爲めに其酒を飲み干し酔臥したる所を、尊帯さ給へる劔を抜きて退治し給ふ、是も又さのごとし、毒酒を拵らへ策りごとを以て吞

しめたらば討つ事安かるべしと、様子具さに仰合められ、儲軍勢に向つて、我々若ししそんじなば螺を吹くべし、其時三方より攻め登り給へと約束して、主臣六人山伏の姿となり、旅の衣のすゝかけにときん額に責めつけ、金剛杖をつき、智岩の道具筈に入れ、軍兵に引きわかれ御入りあるぞ危けれ。分け入る山の奥深く、岩の陰路をふみならし、細谷河の下もる水に心をひやし、妻こふ鹿の通路の木の根に取りつき岩を越へ、千丈が嶽の半まで漸々として登りける。折しも卯月初めの事なれば、四方に残りし薄霞、都の春は過けれども、雪霜はげしき國なれば、深山がくれの遅櫻、今を盛りと見へければ、爰を究竟の所なり。いさゝ花を詠めんと、笈を木の根におろし、且詠めておはしける。斯る所に老人三人見へ來りて云はく、旁は此の山に住む酒天を討たんため來りけるか、我々は此邊近き所の者なるが、妻子を取られ悲しさに、同じ道にとも思ひ此の山に慕ひ來

れり。道しるべ申すと先きに立ちて道のぼりける。行くべき峰を見上ぐれば、崔嵬たる岩壁萬尋の峯岨々として高く峙つて、屏風を立てたる如し。松の傘苔の露、踏人なれば滑なり。空とふ鳥も一羽にては登り難し。さしも嶮しき難所を更に勞らひなく岩屋近く導びく。如何に方々、此の鬼常に酒をのむ。酒に顛倒せらるゝに依りて酒頭童子とも名付けたり。我々神變鬼毒酒と云ふ名譽の酒を持參せり。此酒は人間に不老不死の藥酒、鬼には毒となる。此の故に神變鬼毒酒と名付けたり。此酒をあたへて誅戮し給へと渡部にあたへ、立ち歸ると見しが、松の煙、谷の霞に立ちまぎれ、行かた知らずなりにける。これ全く三神化現疑ひなしと御跡を禮し、如何に方々佛神の加護座さは退治せん事疑ひなし。相構へて面々由断ばしすなど、衆を勇め、氣を勵まし、拳を握り片津を呑んで、鬼が岩屋に入り給ふ、凡そ岩をたゝんで築地となし、石の關ほとりに投てたる骸骨は恰

も山のごとし。怖ろしさも言ふ計りなし。中門より入りて内を見れば、俄に腥き風頻に吹きて、其たけ大なる大童子同じ様なる眷屬七八人相具し、色々の兵具を持たせ、今もやことに逢ひやせんと危さ諭ふべくもなし、童子人々に向つて眼をいからし汝等何者なれば、爰に來る。我住む山と云ふは峯たかくして谷深く、里遠くして道なければ、地を走る獸、空を飛ぶ鳥までも、輒く來るにかたし。汝等如何なれば人間の身として爰には來るや、不思議さよ、如何に〜と責めける、頼光進み出で、御答めことほりなり我等が修行の源と役小角と申すは、道なき山を踏み分け、有る時は大峯葛城を通り、法の道には身を棄つるをもかへりみず、我々も其のながれをくんで、大峯かつらさを通り、修行のため出雲の方へまかるなるに、寒國のいはれにや、青葉がくれの遅櫻今をさかりと見なし、をりりふし都よりよき酒持參候へば、同じくは花の下にて吞べしと深山木の櫻の花に

ひかれつゝ道ふみ迷ひ、此所に來り童子の御目にかゝること然るべきさきの世のちぎりならん。一樹の陰、一河の流れをくむだに他生の縁と申すなれば、一夜の宿をかし給はれ。今宵は酒宴し遊び申さん。歸命頂禮と念珠つまぐりおはしける。童子酒宴と言ふに悦んで、客僧達是々と請す。人々畏まつて座につき給へば、童子語つて言く、我はもと越後の國のものなりしが、去る子細あつて此の山に住んで、姿は夜叉の如くなれども、心はさらしいにしへを忘れねば、互ひに酒を呑むべきなり。先づ旅人の都のさけ、それ／＼といらちけり。其時保昌爰の内より出し、童子が前に向ふ、先山伏達誠み給へ。頼光一盃ほし童子に渡す、さしうけやがてさらりと呑む。その味天のなせる甘露も斯くやらん、心詞におよはれず、客僧達これは何たる酒に侍るや、我未吞まずと、さしうけ／＼呑むこと十盃ばかり乾しけり。其れより次第に呑み流す、春屬どもは頭をふり、舌をたれ、

魚鱗の類までも、食して佛身を資けつぎて地の大乗の法を成就すべしと、佛祖の説きたまふも權化なり。南無歸命頂禮とさらぬ體にて御座ありける。童子つく／＼打聞き、さては誤まり申したり、明日御目にかゝらんと童子は奥に入りてけり。春屬どもは長くなり其の座に酔伏したふれける。其時空中に聲あつて、時分はよしときこゆ。是れ神の御告げなりと童子が寢屋に忍び入り、太刀ぬき枕本に立寄ば、童子目を覺し立あがらんとしけれども、膝震ひ起き得ず、山も崩るる大聲にて、さても口惜や、已原を奪のほどに引きさき喰らはんものぞと喚く所を、頼光持つてひらいて打ち給へば。かうべはされて天井へとび上り／＼しけれども、さして祟りはなさいりける。春屬どもは驚ろきて立ちあがらんとしけれども、これも神變を失ひ、身をく／＼め失せなんとすれども叫はず、柱にとりつき登らんとすれども更に力なし。唯大聲して喚叫ぶばかりなり。えたりや／＼と云ふ

喜ぶこと限りなし。童子なにな着と云ひければ、内より鹿猿の手足を引き抜きまた血の流るを持ち來る、それ／＼と云ひければ、肉二三寸をさつて、頼光に進めける、頼光これを請けとつて舌うちして喰ひたまふ。童子つく／＼と見て、旁々は實の山伏にてはなきと云へば、面の色替ることあはたし。頼光少しも騒ず、さる事ばし侍れ、根本行者の禁には、人の心をやぶらねば、たとへ如何なるものなりとも施すならば食すべし。また我々が身にても飢たる衆生には施すなり。昔も鳩に替へて自の肉を鷹にあたへし人あり。薩埵王子と申すは、あれたる虎に身をほどこす。其上法花經と申すには、國城妻子、頭目體惱、身肉手足、不借身命と説き給へば、我々肉身をたゞいま御肴にめさるればとて怖れとさらし存せず、且つ淨肉と申すは、佛弟子修行の爲に五穀なき地に至りて餓死に及べば、この佛身を今生にて取りはづせば未來永劫浮ぶ世なきゆゑに、鹿、猿、

まゝに追かけ追つめさし殺す。其中に渡部と鬼と組んだりしが、鬼や力の勝りけん、綱をおさへすでに喰ひつかれんとせし所を、保昌かけず打ちて落す。其外殘らず打つとり勢ひかゝつて休み給ふ。貞光其時岩屋を巡つて、鬼にとられし人々罷り出てよと呼はりければ、爰かしてより十三人を出てたり。其中には都上藤もあり、田舎下藤もあり、或は都の何かしの子なり、或は又攝津國難波の者、或は丹波の者にて候ふ我をも助け給へと口々に泣き悲しむ。理りや、目の前にて引裂さねお殺すこと數も知らず、今もや喰れんと籠の内の鳥の叫び、水にせまりし魚の泡に息づく如く思ひしが、適々人々を見て、方に地獄の罪人の地藏菩薩にとりつくも斯くやと思ひ遣られたり。頼光御悦びあつて、心安かれ古里へおくり得さすべしと人々をつれ麓に下り給へば、諸卒御迎へに來る。影好が館より馬乗物にのせ、鬼の頸を歩騎にもたせ、參内あつて龍顏に謁し奉れば、玉顏



殊にうるはしく、天機正に悦ばせ玉ひて、此度の忠功尤感じ思し召す旨命ぜられて、則鎮守府將軍に任じ給ふ。京白河の貴賤上下、ことには鬼にとられし親子親類ちまたに満ちて、將軍はこれ衆生を助くる父なりと手を合せ悦びける。

今年將軍新宅を多田の内輪野と云ふ所に造る。

同年渡部源五綱畦野より西の方木子が岡と云ふ所に屋を造る、保昌又地の方平居と云ふ所に作る。

### 伊吹山酒天童子の事

正歴二年の春、亦近江國伊吹山に酒天童子と云ふ者あつて、人民を掠め奪ひ國家のなやみとなればとて、諸卿參列してこのこと如何と會議ある中に、左大臣頼忠卿申さる。定めて大江山の鬼神の眷屬にてあるべし、討ちもらしてはゆゝしき難儀なるべし。

此度も亦頼光朝臣に仰付けらるべきか、頼光ならてはと奉聞ありしかば、將軍又勅命を奉はり、鬼切と

云ふ大刀を帶き兵を率ゐて發向し、伊吹山四方の道々をとち塞ぎ、兵士を居る士卒を山の中に打入れ尋ねけるに、鬼神かなはずとや思ひけん、四方へ迹散る。大勢の中に取りしめ三四人も討ちとる。爰に身の丈六尺七八寸ばかりもやあらん、鬚左右に生ひ分つて髪かさまに生ひたる者岩の上に立ちあがり、遠近の敵をながめ、透間もあらば打ち破ぶつて蒐けぬけんと思ふ氣色なり。寄手の兵四方のつまりに立ち渡りて散々に射る。矢に射すくめられ、跋扈て立ち渥みになつて死にけり、押しふせ大將の御前にかき來る見れば、鬼にてはなくて人なり。されば、物は名によつて尊くも怖しくも戀しくもあるなれば、己酒天童子と名のり、諸人を驚せしなり。實の盜人と知るならば、將軍なにしに向ふべきに、世に鬼神なりとこどくしく言渡りければなり。

### 鬼切太刀の事

今年土佐國足摺山御建立、是れは一歳枯れたる梅に花さかせし聖のぞむによつてなり。

此鬼切と云ふ太刀は、昔頼光朝臣天下安全の御祀りとして勅命を奉り、伊勢大神宮へ參詣して、神前に再拜通夜したまひけるに、示現して曰く、汝に此劍を與ふべし、これを持ちて子孫代々の家嫡に傳へ天下の守りたるべきと、神勅新なり。目を開きみたるに妙なる大刀あり。悦び取つて拜しけるに、まことに天下を治るの神劍これに過ぎじと、下向後今に至り身を離たず、帯ける太刀の作者を尋ぬるに、嵯峨の天皇の御宇に、伯耆國の住人、大原五助太夫安綱と云ふ鍛冶、一心清淨の誠を盡し、きたへ出したる劍となり。時の武將なれば坂上田村麻呂にさ、ぐ。將軍伊勢大神宮へ參詣のとき、夢の告げをもつて御所望あつて神殿に納められたりしを、又頼光に玉ふ、神劍の新なるを感じて父滿仲へ捧げらる。此中此大刀をもつて信濃國戸藏山にて鬼神を誅してより、鬼切り丸と名付け、亦頼光へかへし玉ふなり。

### 多田五代記卷第五終

多田五代記卷第六目錄

頼光朝臣瘧病付山蜘蛛を討ち捕る事

土蜘蛛の事

巡見の事

將軍柳花女より弓を傳ふ事

花山法皇四の君に通ひ玉ふ付伊周隆家流罪の事

將軍鞍馬參詣付鬼同丸の事

藤原隆家訴狀の事

中宮御懷妊付伊周隆家召歸さる事

滿慶薨逝の事并天下の殺生を禁ずる事

滿慶公古今神力の事

將軍狐を射玉ふ事

勅命輕からざる事

多田五代記卷第六

頼光朝臣瘧病付山蜘蛛を捕る

付杜子美詩の事

正暦三年の春過ぎ、夏來たりて、四方の花飛んで春を滅却し、園林漸やく新緑の梢器々たり。午漏沈沈として玉壺に滴り、春雨風まぜにして糸の如く降りくらし物すさまじき夕暮の頃より、將軍瘧疾を患ひ給ふ。治療飽までにし給ふども、千萬驗あらず諸醫手を束ねて退く。猶しきりにして、或ひは毎日發り、或は二三日を隔てて發り、卯月初めより五月初めまで、日數三拾餘日を歴たまひけり。醫師さまく御藥餌をつくせども、更に癒ゆる事なし。諸臣出頭人其外近習の人々相議し、御藥術を換へて進め奉りけるに、しるしなれば、貴僧を請じ、德行備はりたる僧都を招びて、祈り加持したまひども驗し

なし。されば、諸寺諸山に仰せて色々の祈りあり。中にも多田の普門寺に宵快阿闍梨と申て眞言秘密の行者あり。もとより將軍の祈願所なれば、此の僧來て壇を構ひ七佛藥師の法より、金剛童子、五大虚空藏菩薩の法にいたるまで、肝膽を碎き修せられける。護摩の煙り、御所中に満々、鈴の音は天にひびきて心耳を澄し、御經の聲深省を發して殊勝をなし、阿闍梨は額にあせを流して祈り玉へば、略少しはそのしるしあり。然るに儒師舟橋大納言來つて、杜子美が詩を授けて癒えたり。其の句に云く、子章獨體血模糊手提擲還崔太夫の詩句を誦し玉へば、瘧疾頓に癒えて、心よくをはしまして寒熱醒方に成りければ、近習の諸臣皆休息すべしとの仰によつて近習一兩人の外、皆御前を退出しけり。漸やく夜ふけ、五月雨をばふり、人静り山廓公の聲だに心すごく打しめりゆく。燭の影幽かなる折節、其の長大きなる法師御杖もとにするく、と立より細を捌き引纏はんと

しけるを、頼光御覽あつて驚き、何者なれば狼狽なりとて、膝丸をとつてはたと切る。其太刀音に目をさまし、宿直守りぬる諸侍、我も我もと走りより何事かはと申しけるに、しかく、の事と宣ふ。燈臺のもとを見るに血のこぼれたる跡あり。火を掲げ見るに妻戸の本へ流れければ、皆々あまさしと追つかけ行く程に、北野の後に大なる塚穴の内に入りたり。其の邊の在家より鋤鉄などを取りませ、塚を掘り崩し見るに、何かは知らず牛のごとくなるもの、細き手をのべて人々に打ちたてける。其痛むこと限りなれば、敢て寄る者なし。坂田の金時つゝとよつて、無手と組んで、上になり、下になり、喚叫んで組合けり。五月闇さすとも知らぬ雨の夜なりければ、つや／＼火もとぼらねば、あれよこれよと誤またれけるに、貞光亦驅けよつて、取りて押へさし通し、懸て繩をかけ、扱て火をふきたて、これを見るに大きき牛の如くなる山蜘蛛にてぞありける。戸板に載せ

て昇き來る。頼光見玉ひて、是れほどの虫類に侵されぬること奇怪なれ。如何さま大江山の童子が化生とよぼへたり。大路を渡し曝すべしとて、鐵の串にさし河原に立てける。是れより膝丸を蜘蛛切丸と改銘し給ふ。

### 土蜘蛛の事

都鄙の貴賤集まりこれは前代にもさかず、まして末世にも有るべきともおぼえず、さても大きな蜘蛛かたと、上下驚きあへり。或人の申されしは昔もさるためしあり、日本盤余彦の御宇四年巳未の春紀州名草郡高野山林に土蜘蛛と云ふものあつて、皇化に隨はざりければ官軍を差遣しけれども、人力に誅する事あたはず、官軍をくばく損し攻め厭んで控へたりしに、住吉大明神葛のあみを結んで、ついに覆ひ殺し給ふ。其かたち身短かく手足長くして、人の姿にあらず。其物語りに似たるなれば、是ためし

なきにあらずとなん。記録等にこれあり。

### 巡狩の事

正暦五年の春、又國々に群盜發るのよし、言上さらに止ことなし。去によつて、天子勅詔まし／＼て三月初より源滿政、平惟時、源頼親、同頼信等の人々に仰せて處々へ分遣はし、方々にて搦捕る。なほ賊黨を退治の爲め皆國々を巡見す。中にも源頼信朝臣は、若浦ゆかしめて紀伊國を望み、自身發足し船にのり移り給ふ。時しも三月中の五日の頃なれば、四方の浦山霞こめ、こぎ行く船の波間より、鹽焼煙りほの見えし。あれは何所と御尋ねありければ、あれこそ須磨の浦にて御座候と申上ければ、されば昔行平中納言この浦に移されて、關吹さこゆるすまの浦波と詠じ給ひけんも、此の所なるらんと、打詠させ給ふ。阿波の鳴戸を右に見なし紀路をさして楫をとる。沖吹く風に任せきて、磯うつ波の砂を巻き、あ

まの呼聲ひまどなき。日も暮れ方の事なるに、船は汀におしよせけり。浦人あまた御迎ひに出にける。爰はいかなる所ぞと御尋ねあれば、かだの浦と申しける。其れより若の浦に出で給ふ。磯によりくるかたほなみ、聞きしに勝る好景に奪はれて、言にも句にも出がたしと興に入り給ふ。玉津島に参りては、昔歳衣通姫、遠明日香天皇の后にて御座せし時帝を戀ひ奉り行幸の御志のましますを知らずして怨みかこちて讀み玉ふ。我がせこが來べき宵なりと詠じ玉ひたりけるを帝立聞き給ひて、寂感の御情いと深く御座せしとなり。彼姫君の居をトひ、あとの宮づくり其磯山を見給ふに、伽羅に似たりし岩間より、幾世へぬらん松楓、磯うつ波に履をひたし、且たぐみ見給ふ。波間に浮ぶ釣船の見えみ、見えずみ鳥がくれ、いはん方なき眺めなり。和歌松原、吹上の濱、古木の森、由良淡、石間浦、岩代、松浦、初島、形見浦、玉河、鳴瀬、磐手里に至るまで、名所

々々里々まで巡り給ひ訴へを聞き給へけれども、さしてことなる事もなく、静謐なりしかば、其れより還り給ふ。吁昔堯舜の御世には、天子の諸侯に適くを巡狩と曰ふ。諸侯の天子に朝するを述職と曰ふ。春は耕すを省みて足らざるを補ふ。秋は兪ひるを省みて給ざるを助く。其疆に入る時は土地辟け、田野治まり老を養ひ、賢を尊び、措克位に在る時は則ち讓ひる事あり。一度朝せざる時は即ち其爵を貶し、再び朝せざる時は、即ち其地を削り、三度朝せざる時は即ち六師を以て之を移す。是故に天子は討めて而して伐たず。諸侯は伐つて而して討せず。五霸の者は諸侯を樓て以て諸侯を伐つ者なり。故に曰く五霸の者は三王の罪人なりと。舜帝の巡狩は三年に一度つゝ國々を巡りましめて、足らざる民を助け恵み悪賊を伐世を平にして民を安し玉ひけるが終に巡狩に出御在て九疑山の麓に崩御なつて蒼梧の野に葬り玉ふ。其二姫娥皇女娥帝の別れを慕ひて

湘浦の邊に至り、帝の崩御を啼泣して涙竹を染めて今に至て斑の竹ありとなん。仁人の民を恵み玉ふ事異朝本朝其の撥一なり。

將軍柳花女より弓を傳ふ事

頼光朝臣はさしも武き武將なりといへども、御心も優に御座しませば、吉野の春を移つされし南庭の櫻、今日を盛なるに、誘引風もやらんと、いと心苦しく、端近く出て、少しいねひり給ふに、天より影の如くにして、端嚴美麗なる女降つて言ふ。我は唐士の養由基が息女柳花女と云ふ女なり。我れ養由より所傳の弓箭の秘決を得たり。御邊に授けん。然るに我が父養由は楚國秦王の大夫なり。或る時大聖文珠の養由に示現して曰く、汝は我化身なり。吾汝に一徳を授へんと、文珠雙眼の精を取りて二つの鏡に作れり。五蓋山の麓に、兩頭の蛇あり。信樂慚愧の衣の絲を八尺五寸の絁により、係て一張の桑弧をな

し、蓬の矢を矯ぎ多羅葉を集めて直垂とし、柳の葉を的として射る術を授へ給ふ。故に天下無雙の弓の上手となりける。或る時養由は、楚國の大將となつて善射將なり。柳葉を去る事百歩にして、之れを射る百たび、發つて百たび中る。楚の恭王獵す。白猿樹を透つて箭を避くるを見るに、矢至れば則ち白猿矢を搏つて熙しむ。王養由基に命じて、之れを射さしむ。由基始め弓を調へ、矢を矯め、未だ發たざるに、乃ち樹を抱て而して號ぶ。養由弓を取れば鷹行を亂る。飛ぶ鳥忽ち地に落つ。翔鳥を百發つて百射落しける。而かも、養由七百歳をへて天下を見分するに、三國に我が弓を傳ふべき仁なし。娘なれば汝に傳ふるとて、我に傳へて其の身空しく退りさ我れ又命終らん事近し。弓の弟子を尋ぬるに、御邊器畚の仁なれば、自ら術を授くべしと語つて去りぬ。又夢さめて傍らを見るに、弓矢直垂あり。將軍これ傳へて徳を施すに、さらに養由が藝にあとらず。

一水波 黒鷲の羽を以てはきたる箭なり

一兵破 山鳥の羽を以てはきたる箭なり

一雷上動 弓也又鏑なり

一葉早黄色直垂 是れは多羅葉にてしたる直垂なり

右の所傳將軍逝去の後は、長男頼國これを傳へ玉ふ。

長徳元年正月二日弓初めありける

佛如尼公安養の尼公相俱に多田の内、水井山薬師に參詣ある。此の如來と申すは、昔時行基菩薩此所に來り見玉ふに、湖水の中には小山あり、是佛地なりとて、行基の如來を刻ざんて一寺を造り玉ふ。是地の景、前は河、三方は屏風岩とて名石あり。誠に天井の中に出現したる山なれば水井山と名付く。

### 花山法皇四の君に通ひ玉ふ

#### 付伊周隆家流罪の事

長徳二年春正月の比なり。花山法皇は、應司の四の君と云ふ女房に忍んで通ひ給ひけり。比女房と申すは容顏美麗にして玉の珈、三五の月の姿、天の生せる麗質は、あたりも耀く計りなり。ことに情深く御坐せば包む心の色に出で、一向通はせ給ひしが。其の比又四の君の姉三の君に關白伊周卿密通し。折節法皇御馬にめされ、四の君の方へ御幸なる。伊周心に我方さまに忍び給ふと心えて、弟の中納言隆家を語ひて、月のあかりし夜、法皇をねらひ、矢を射かくれば、其矢あやまたず法皇の御腕にあたる。周章騒ぎ給へども、世の譏りを耻思し食し御詞には出でされども、其かくれなきによつて、伊周を筑紫へ流罪せらるべし。隆家は出雲國へ流すべきとて其こと、なく大内に召しけれども、折節相勞る事侍るとて籠居ある。去るによつて、源の頼親を便はす將軍は朝廷を守護すべきの勅命によつて大内に參らる。其日の裝束には錦の直垂に金銀の金物色々打ち

た、みたる鍔著て、鬚切をよこたへ、帶弓は柳花女より傳る雷上動、矢は水破兵破の鏑矢二つを持ち、紫震殿の大床に伺候す。郎等には渡部源五綱を相具す。綱は黒皮威の腹巻に五尺許の太刀をはき、大庭に伺候しける。公卿殿上人に至るまで、千萬人の軍兵よりなを頼母敷思はれける。扱て又源頼親は士卒二た手に分けて、伊周隆家の館を打ち圍む。伊周思へらく、終に此の事露はるべし。然らば流罪か死罪はのがれまじ、同じ道ならば、此の家にて兎にも角にもならばやと内々たくし給へども、此夜は名残りの酒もりして酔ひふし給ふ處を、大勢押し入りて捕り奉る。伊周は頼みさつたる郎等ども酔ひ伏たり。中にも、山内藤左衛門尉ばかり太刀はき、弓とりなほしけれども、大勢にへだてられ、云ひ甲斐なく捕はれにけり。さて又隆家の宅へは保昌を大將として、八百余人を差遣す。保昌言らく、これは大事の大敵なり、もらしては叶はじと四方をとり巻、保

昌一陣に馬かけ出し君の朝敵たるに仍つて藤原保昌御むかひに參れり。逆道れ給ふまじきもの故、由しなき事をし給ふな、御返事承つて唯今攻め申さんと云ふ。隆家今はのがれがたしとて、命を助くべきかと使者をもつて聞ければ、保昌が言はく、御命計はさりと申し請奉らんと云へて返しぬ。隆家やがて出て給ひけるを相具す。將軍兩臣に逢ひ、これ私の事に侍らす。帝の御憤り深く御座ありて流罪の勅詔なり。然りと雖も、誰々も御前の宜しき様に申し給はじ、歸京年月をば經申す間敷とあれば、兩臣は涙を押さへて、然るべくは頼み申すなり。御心安かれと。やがて、其位をけづり、配所の旅におもひさ給ふ。愛河に溺れ、欲海に漂ひ、涯無生死の波長く流れて、絶ゆる事莫し。一切の怨害皆欲より生ずと説き給ふ。丹火の唇、媚を生じたる眸り皆かりのものとは知りながら、貴賤之れが爲めに惑ひ、智あるも、愚かなるも、此の惑ひの一つに絆されて、

今生夢計りの樂しみに、末來永劫の苦を招ぐ。されば褒似一度笑つて幽王國を傾け王妃傍らに媚びて、玄宗世を失ふのことは、今こそ思ひ知り給ふらんといと哀れに見えけれ。

將軍鞍馬參詣付鬼同丸の事

長徳二年九月二日頼光朝臣は、舍弟の頼信朝臣の館に行き給ふ。厩に一人の男を縛りたり。彼は何者ぞと問ひ給へば、頼信の曰く、彼は鬼同丸なり。頼光曰く、かれほどの剛の者を捕ひいましめば、さびしく縛り給へ細ゆるくては詮なかるべしと曰へるによつて、尤もなりとて、鐵のくさりをもつて強くかめらる。鬼同丸つくつくと思ふは、これ頼光の所爲なりと深く恨み、其夜更けてくさりを引さりとび失せぬ。頼光朝臣は明日鞍馬山へ參るべしと、左右の者に仰せて伏し給ふ。夜彼の鬼同丸屋の上に、とび登り天井へあがり、けやぶつて近付かんとす。頼

隆家訴狀の事

光人を呼びてこの屋の上に者の音しけるぞ、見るべしと仰す。鬼同丸又これを聞き、爰にても本意とげがたしと思ひ、走り失ぬ。この鬼同丸と云ふは、大剛の兵なるにいかなる科あつて、如何なれば概にはかく縛り給ふぞと人云ひける。頼光朝臣は、早朝に鞍馬に參らる。市原野に至るに、牛の多くある中にふせる牛あり。源五何とて見とがめけん、伏したる牛に矢をはなつ。彼のふせる牛忽ちおさあがると見しが、鬼同丸この牛の腹よりとび出て太刀をかざしきつてかゝる。伴の侍中をへだてんとす。更にこともせず將軍に打つてかゝる。將軍馬上にて太刀をぬき、鬼同丸が頭を打ち落し給ふ。勇敢早業打物の馬乘弓箭太刀打、鎗、長刀に至るまで萬人に勝れ玉ふ武將なり。

此狀頼光朝臣請とつて時の傳奏を歴て御前に達し

給ふ。

踏下被殊蒙哀憐、聽歸京、且加一身病治療、且訪中老母晨昏之定省上狀、藤原隆家敬白す、不肖男子隆家、坐率以降、離家之後、日月多移、霧露頻侵、山重、江履、南嶺之藥難採、歎深愁切、東岱之魂應迷、仍爲免遠流無期之科、雖仰近代有例之恩、玄換末下、抱愁而止、隆家生子累葉重相之家、仕於一朝聖主之代、年已弱冠、未及二九之齡、位忽高貴、初備十六大臣、爲朝爲世、雖懸毀謗於萬人之唇吻、爲家、爲門、多施榮耀於一身面目、爰渥沐恩澤、只欲仕於君、忽忘惠露、何不忠於公、而無誤坐配流、是猶少而先老之過也、不犯處重科、豈非愚而超賢之志哉、天譴俄臻、人望早背、病還更發、命已欲終、須只除髮髮、偏望往生之妙果、何必焦肝膽、強待歸參之恩詔、然而被罪之身、猶恐王程之不緩、無怨之心深、憑朝議之有許、嗟呼、昔侍鳳闕、已爲

羽翼之臣、今在馬州、長作三藝之士、天性雖愚、忝德龍顏、逆鱗之誠、地望雖失、泣仰鳥頭、變白毛之恩而已、望請、天恩殊垂、矜恤、早賜官符、被聽歸京、將訪晨昏於六旬之老母、令治疾痼於三世之名醫、矣、隆家誠惶誠恐謹言

長徳二年十月七日 從三位出雲權守藤原朝臣隆家誠恐謹言

中宮御懷妊付伊周隆家

召皈さるる事

伊周卿花山法皇を射ける其ゆゑは、始め父道隆存生にておはせる時道長と不和なり。道長よく姉の女院へ宮仕あるによつて、甚だむつまじし。伊周は嫡流なれども道長に超へらるゝを愠つて、女院を調伏し給ふよし其の聞えあるにより、法皇を射ける罪科色々申したて道長沙汰したまへり。道長かく振舞ひ給ふ事、長徳元年に道隆病によつて落飾あり、子なれ

ば伊周をかりの關白とす。然る所にいくほどもなく道隆薨じ給ふ。その四月に右大臣道兼を關白とし給ふ。伊周怒つて叔姪の間むつましからず、道兼を調伏す。同じ歲五月左大臣源重信薨す。又道兼も薨じ給ふ。粟田の關白と云ふはこれなり。同じく十一月に道兼の弟左大將道長を關白とし給ふ。その時又道兼も薨じ給へり。伊周道兼の早世を喜ぶ。我關白とならんことを思ひてなり。然れども女院の御心によつて道長を關白に任せられければ、いよく不平なり。又道長をも調伏す。然れども其しるしなし。此時疫癘都鄙に染む。公卿以下多く病死し給へり。同七月道長右大臣となり、これより道長朝政を恣にし給ふ。斯りしかば伊周法皇の御ゆゑなりと深く思ひ籠めて射奉りけるとなり。然る所に中宮定子皇子を御懷妊あり。是は伊周卿の妹なり。皇子御誕生の御祈りさましくなるにつき、源賴光參内して申されしは、流人伊周隆家召かへされんは何の御祈より

勝り侍らんかと奏聞あれば、則ち御免狀下し給はる。

依中宮定子皇子御懷妊。流人伊周可歸浴。由御氣色所候也。仍執達如件。

長徳三歲四月十日

とありける。隆家方へも同文なり。勅使これを玉はつて筑紫に下り伊周卿に御勅書を渡しければ、喜びいそぎ上洛ありけり。然れども定子は伊周流罪をうらみて常にひき籠り居給ふとなり。

滿慶薨逝の事并天下の殺生を禁ずる事

長徳三年の秋、多田の滿慶公心例ならずとさこへければ、醫師數十人參り集まるなかにも、丹波重稚、和氣正世等はこのころ天下の國手良醫、えらみ出されたる醫方の名人なりければ日夜御前に相つめ御藥の義を色々進め奉るに、さして驗なし。滿

慶仰せけるは、佛雙林の入滅に耆婆が靈藥も其の驗なし。たとへば三仙の石中にかくれ海中に潜み空に登つても、定業をまぬがれず、わが歳すてに懸車に迫れり。今より何ほどの樂を待たんと曰てより後御藥をも用ひ給はざるによつて、御病苦日に隨つて重く、時を添へて憑少く見へける。一門近習の從者涙を押へて日夜寢食をだに忘る。方々よりの使者、多田の里に馳せ來ること櫛の齒を引くがごとし。元來清和源氏の門葉たる人多く、日夜病を問ひ起居を窺ひ車馬門に滿つるも宜なり。王家を出て遠からず初めて武家の良將と世擧つて重んず。誠に仁義の賢君なれば、朝威を重くし民を憐むこと一子の如く、堯舜の代をまなべり。世初めて此の時に治まり、家齊り天下平にして兵亂もなく、適々惡逆人あれども其の惡遂ぐることを叫はず、ことに安和の比より殺生長く止め給へばなほ人民の愁ひなく、日本廣しといへども生さとし生けるもの其の恩を荷はずと言ふこ

となし。然れども無常の敵きほひ來るには、關を固め兵を集めても防ぎがたきは生死のならひなり。斯りしほどに、身體次第に衰へ給へども、唯朝暮淨土を念ふ御心深く、誓て曰く、我先づ淨土に至り歸りて人を守らんと。臨終の時節を知りて豫め別殿に遷り、御願文に曰く、

吾没後神留此廟窟可守三言矢、加之當院之以鳴動一兼可、知見四海安危一者也

斯く遺誠ましめて、別殿に御入りありし日より異香院内に薫じ、絶えず此地に來る者みな衣を染じ、梅檀の林に入る者は自ら香しと云ふが如し。兼ねて往生のせつを知りて人々に命ず。日時違はず西に向つて合掌し、八月廿七日御歳八十六にして終に薨じ給ひける。笙歌妓樂雲にとどき、異香芬々たり。御遷化の別れの悲しさに、上下聲を上げて歎き悲しみけり。昔佛の入滅に迦葉尊者の歎きの聲三千世界にさこえしも、これには過ぎじとさこえし。さて有る

べきにあらざれば、法花三昧院に葬し、石の櫃に入  
れ奉り、塚をつき、御遺言なりしかば廟所寺と改た  
めて不斷の勤行新にして、香の煙は。白雲壇上にた  
なびき、鈴の聲は耳にみち心耳を澄す。

### 満慶公古今神力の事

満慶公の神力不思議を(愚意)見聞するに、御廟鳴  
動のことは一々筆にもしるしがたし。日本の善悪さ  
き立ちて多田院に知られずと云ふことなし。去るに  
よつて代々の武將武運を此廟に祈り給へり。昔しは  
鳴動の度毎に奏聞仕りしよし記録等に見えたり。  
昔しより今に御影を直に拜せし輩、大名も下部も  
一人として生きたる者なし。多田の地を去りていろ  
いろ口ばしり狂死にたる輩今に至るまで数おほし。  
其の名を秘すなり。昔より地震度々あれども、多田の  
内は外よりは少きとなり。これ満仲公の神力のなす  
處か。いつの比にや有りけん。大地震數日しけるに、

頼光朝臣春宮に伺候し給ふ。此の御所に鶏多くあり  
しが、いづれのころよりか狐來りて鶏を殘すとり喰  
ふ。不思議やな、戸を閉ちて内にをけども、夜の間  
には見えす成りにける。あるとき御舍人いねずして  
見居たるに、狐戸の外に來たつて、内にゐたる鶏を  
戸の間より且く見るに、其眼光りけるにや恐けん、  
啗々と鳴て地に落ちしが其のまゝ見えすと聞こ  
しめしける。折ふし庭上に大きな狐とび出て、一  
聲二聲鳴きて走り、火を放ちて行きけり。さてはか  
れがなす事なり、あれを射よ御覽あらんと勅下り  
ければ、頼光承り、藝目をもつて、ひやうど射る。  
思ふ矢つばあやまたずふつと立つ。何かは以て  
こらふべき、忽すくみて死しける。上を初め奉り其  
坐に有合ふ人々、あゝ射たりや仕りたり。頼光は今  
に初めぬことなれど、射藝術兼備へたる武將なる  
はと、一度にとつとほめ給ふ。頼光袖かき合せ、此  
業我所爲にあらず、勅命の輕からざる故なりと申さ

其の折ふし多田院の御家人森本兵衛、中河次郎と云  
ふ者の多田より十町ばかり北の山中を通りけるに、  
空に四五十人ばかりもあゆむ足おとしけり。此の者  
ども、不思議の思ひをなし、太刀のつかに手をかけ身  
をひそめ見居たりしに、雲中に聲あつて曰く、多田  
の内は別義なきぞ恐べからずと、さこえて御馬の轡  
の音頻りにして、多田院の方へと思ふに雲さへて見  
へずと。其者ならず誰々もさゝたりと申し傳ふな  
り。後土御門の御宇御廟鳴動頻なるによつて奏聞  
申せし處に、從二位を贈り玉ひて天下の安全を御祈  
りありける。長徳三年九月、仰によつて浦部三郎  
末竹を末武と改め、碓日の荒童子貞光を貞道と改め  
らる。

長徳三年十一月三日藤原の仲光病死す。小童寺に  
納む。明る年十一月仲光を田尻宮と祭る。

### 將軍狐を射る事

其功に誇らざる事は孟子反が伐らずと一般なり  
と、公家武家稱譽せり。

### 勅命輕からざる事

將軍かく申されしも、昔さるためしあり。延喜の  
帝の御宇に、帝王神泉苑に行幸あり。池の汀に鷺の  
居りけるを御覽あつて、藏人を召してあの鷺をとつ  
て參らせよと仰せければ、取らんとて近か付さ寄る。  
羽づくろひして既にたゝんとしけるを、宣旨ぞ、鷺  
まかり立つなと申しければ、飛び去る事なくして手  
にとまり御前にまわりける。御覽あつて、勅に隨ひ  
とび去らずして參る條神妙なりと、御宸筆にて鷺の  
羽の上に、汝鳥類の王たるべしと遊ばし、五位の位  
に勅許なりて札付け放させ給ひければ、宣旨蒙りた  
る鳥なりとて人恐をなす。其鳥備中の國へとび行き  
死しけり。鷺の森と祭る。其れより此の鷺を五位鷺と  
名付けたり。此狐に勅ありし故に帝德に稱され去る



こと能ずして頼光に射られたりと、功に誇ずとなん。

多田五代記卷第六 終

多田五代記卷第七 目錄

- 將軍逝去の事
- 頼家の母公剃髮の事
- 渡部綱病死の事
- 成章、時遠、爲行等流罪の事
- 平忠常謀叛附吳王手籠らざる藥と大なる瓢を金に買ひ、軍に勝ちて越の大國を取り、大に得付きたる事
- 兩大将召歸さるゝ事
- 源頼信武勇軍術に法あり、忠常降参の事
- 謀叛人本意を遂げざる事
- 頼信河内國を賜つて入部の事
- 源頼義八幡參詣の事
- 八幡太郎誕生の事
- 源太丸元服の事

多田五代記卷第七

多田兵部輯

將軍逝去の事

治安元年七月初より左馬頭源頼光朝臣心地例ならず在しりければ、長男頼國、次男頼家、三男頼基、四男出家にて永壽と云ふ。其の次は女子にて從三位濟政卿の室、資通卿の母なり。此外は舍弟門葉殘らず相集り、醫師に仰せて様々御藥をすゝめ申さる。されば桃源自長生の路をもとむるに、金堂仙人曉露ひなしとかや、業病を救ふ典藥も醫術、驗しなれば、綱、金時等を近く召され、相かまへて自殺殉死する事なかれ、今よりは頼國頼家等に仕へて民を愛し家を治むべきこと莫大の忠功なりと仰せける。源五は畏て承はり候ふ、併ながらこの渡部は幼少にて父母にあくれ、東西も知らず罷りありし比より君

邊を一時もはなし奉らず、名を天下に顯し、榮花又身にあまの望みも侍らず、今より五年十年生たりとも何ほどの樂み待ち申さん。一生の御恩徳の世に報じたてまつらん。御免しを蒙り申さんと云ふ。重ねて仰せけるは、いやとよ源五、生者必滅也。會者定離はこれ穢土のならひ、黄泉の旅には伴なひ行くに叶はず。自業自得同じからざる故なり。我だに佛果を得たらんに、汝等を渡すべし。縦ひ遅速ありとも後世には必ず會ふべし。未來の昇沈は最後の一念に寄るといへば、我が心をやぶる事勿れと宣へば、畏まつて涕を押さへかねけるを理りなり。常に地藏菩薩を信じ給ふにより、御枕許に向ひ奉り香花を備へ睡るが如くにして七月廿四日に逝去し給ひけり。天曆八歳二月廿四日に御誕生あり、今年六十八歳なり。人間の八苦様々多けれども、殊に此の別れこそ歎きの中の悲みなれ。哀なるかな、満慶公の御譲を請け、天下の武將に備はり、萬機の理

亂掌の内に納め、威名世に施し、數度の朝敵を追討し、事に望んでは、目に見えぬ鬼神も謀の内に從へたまふといへども、悲哉無常の殺鬼競ひ來たるには、渡部が智勇、金時が大力、末武、貞道が早業、保昌が謀も防ぐに其のたよりなし。今まで御命に代らんと影の如く付隨ひし人も、冥途の旅の悲さは伴なひ行く人もなし。闇夜に忽燈の消えたる如く、今日よりはいかなる世にか成る可しと諸人ともに覺束無く思ひ悲みける。則ち廟所寺へ葬し奉つれり。満慶公の尊廟とならば奉る。さて多田の屋敷を永壽阿闍梨にゆづり給へば、則ち寺とし頼光寺と號し、僧坊棟をならべたり。

頼家の母公剃髮の事

歳比御恩蒙りし人々は、水を失する魚の如く木に離れたる猿に似たり。我が身の向後思ひつゞけていと歎きは深かりける。中にも次男頼家の母儀は

比丘尼とならせ給ふ。常に奉公申しし女房達、志し深き計を御免あつて七八人同じ様に頭を下し、大菩提心を發し、初は御所の傍に御座けるが、是れにては心の濁りも澄みかねつ、片山陰の柴の庵を結び、魚鳥を友とし、自も花を摘み、水を汲むほどならば、いかに心の濁りも晴れて涼しからんと、多田の内なる山里に庵をしつらひ、韋提希夫人の跡を尋ね觀念の窓に御心を澄し、近くは法如比丘の古を慕ひ、念佛三昧の聲新にして後世を弔ひ給ひける。

渡部綱病死の事

萬壽二年二月三日、渡部の綱病死す。今歳七十五なり。男子二人あり。嫡子源太久は頼國朝臣につかへて兵庫にあり。次男源次郎竹は頼信朝臣に仕へて上野にありける。

成章時遠爲行等流罪の事

長元々年四月十日の夜、藤原時遠宅に肥後守高階成章、平爲行を招きて酒宴し遊びしが、盃の巡りや悪かりけん、成章腹をたて座敷をけたて、歸つて郎等共を集め、しかくの事なりと云ふ。郎等どもさ、君の御腹立理なり。いそぎ時遠を討ち給へと云ひつゝ、酔狂のまされ時遠が宅を圍んで時の聲をあげる。時遠驚きあわて物具をしけり。其の際にはし近く伏したりし大島太郎と云ふ者、これは時遠が頼みさつたる兵なるが、門能かためよと云ふま、物具取つて肩に打ち掛け、三人張の大弓門の柱によせ、押張高き所に飛登り四方をきつと見渡せば、何かは知らず旗一と流れ、其の勢町小路にみちくたり。只今是へ寄せたるはそも誰人ぞ名乗給へ。其時成章大音にて、汝知らずや名乗らずとても覺えあらん。只今是れへ罷り出でよ、さし違へんと呼はつたり。大島聞きて、主の過まりはいざ知らず。つがふたる矢なれば請けて見給へと、弦音高くきつてはなつ。

成章が後に控へたる平瀬源八と云ふ者の甲の真か  
ふより鉢付の板へぬけ、矢じり白く見えければ、何  
かはもつてたまるべき、馬より下に動と落つる。是  
を軍の初めとして、門を開き討つて出で、爰を先途  
と戦ふ太刀の鐔音天にこたへ地にひく。或は引組  
んで頸を取るもあり、討たるもあり。馬蹄に蹴か  
けられ、疝葉に洒ぐ雨の如く、屍は町中に横はつて  
堆し。其上をのり越のり越、門の中へ七八度まで追  
ひ入りける。此の事既に上聞に達せしかば、源頼親  
平惟茂等に兩方鎮むべきの勅命によつて、陣中に馳  
せ行く。さて、是は何ゆゑの遺恨にて、かく天子  
をも憚らず狼藉に及び給ふや。存する旨あらば奏  
聞を遂げ、其上にこそ安危を定め給ふべきに、先づ  
陣を引き候へとの勅定なりと高聲に云ひければ、勅  
命なれば力なしとて兩方戦ひを止めてけり。其後三  
人ともに召出され、私の遺恨を以て狼りに合戦を企  
て、上をも恐れざる條、罪科少なからず。三人とも

に遠流との仰せによつて、三方へこそ流されけ  
る。

平忠常謀報并吳王手龜ざる  
薬と大なる瓢とを千金に買  
つて軍に勝つて越の大國を  
取り大に得付きたる事

しさて、武威相摸の士卒と覺えて、旗二十流れ、  
其の紋あやは知らず。いかさま射手と見えて、甲は  
下人に持たせ、弓取なほしすびきして居たり。中軍  
は大將忠常が陣と見えて、河より五六町引きのさて、  
三段にこそ備へける。是は敵に河をやすくと渡さ  
せ、奇兵正兵を以て敵を河へ追はめんとかまへ、河  
岸には態と雑兵一二百計りにて支へ、爰を渡せと言  
はぬ計なり。官軍の大勢、敵の備へに氣を奪はれ、  
誰れ先陣し渡して蒐らんと云ふ者もなし。只遠矢は  
かりにて居たり。斯くてもあるべきならねば、明日  
こそ河を渡して勝負を決せんと、諸大將内だん定ま  
りぬ。陣中に内通の間者やありけん。此の事忠常知  
つて、夜中にすぬれんの者を入れ、水より些下に細  
き繩を數多流しかけよにも又引きたり。官軍此の  
謀を知らず、大勢一度に打渡せば、河中の繩に足を  
まとつて、馬も人も屏風をかへすが如く、人は甲に  
水入れて眞さかさまに沈むもあり。水に馴れたる者

長元元年の夏の比より、下總國にて前上總介平忠常  
逆心を起し兵威を振ふ由聞えしかば、右大臣實資卿  
奉つて、檢非違使平直方、中原成道等の勇士に、  
東海東山の兵二萬餘騎を差添へ、同年八月下旬武  
藏の國まで下る。忠常、又官軍の下るを知りて、武  
藏と下總の堺角田河まで出張す。官軍の大勢河岸に  
立ちて、見渡せば、河より一町ばかり引退き、妻手  
の方には、安房上總の勢と見え、色々の旗二三十流  
衆樹を背にあて備へたり。弓手の方、是も一町計り

は、甲を捨てて命計りはのがるもあり。後よりは大  
勢押し懸け打ち入れれば、先へは行かれず。適々向ひ  
の岸に寄らんとすれば、上も立てず射て落す。後へ  
引けや向へは行かれぬと云ふ間こそ有りけれ。直方、  
成道も漸々と本のなきさに打ち上り、流るゝ味方を  
助けんとせず、あきれ果て立つたりけり。兵書に  
云はく、將の謀は密ならん事を欲すと、賊なるかな  
謀泄るゝときは、軍さ利なし。敵の爲に奪はれて勢  
ひなし。初めより敵の間者、味方に有るを知らざる  
こそ淺猿けれ。諸大將又會合して、先度は味方の内  
に内通の者あるを知らずして、敵の謀ごとくに陥れ  
らる。此の度は筏を作つて河を安々と打ちこえ戦ふ  
べし。敵案内を知ると云へども、大勢に小勢なり。  
など勝利を得ざらんやと、筏を拵へ河を渡つて時の  
聲を上げる。妻手の方に備へたる安房上總の者共を  
目蒐けて打つてかゝる。互によせつ返しつ戦ふ。直  
方下知して、一足も後へ引く者は、縦へ長たりとも

師たりとも、討つて捨てよ。見のがしたる者は同罪たるべしと匂る。是によつて命を投げて戦ふ。安房の勢官軍の大勢にもみたてられ、磯邊を左に見なし引きのく所を、弓手の方なる武藏勢、精兵をすぐつて散々に射たり。直方成道また馬のかしらをなほし防がんとする時、中軍の勢しづくと驅出る。官軍兩方支へんとする間に、初め磯邊へ引きたりし安房勢、官軍の後へを断たんとをめて蒐かる。官軍少しく引色に見えければ、兩勢一つに成つて太鼓を打つてもみ合せ、一つになれと責めしかば、官軍忽ちやぶれて我先にと引く程に、兼ねて用意の筏なれ共、大勢一度にこみ乗りければ、乗り損じ踏みかへし、旗小符の流るるは吉野河の春の暮、立田川の紅葉のうさてながれもかくやあらん。乗り損じたる者は、船こぞりて、せばくとも助けさせ給へ。去りとはと手を合せさげぶもあり。哀れなりし有様なり。官軍本陣にかへつて見るに、此の度も亦た四五百余人討たれしかば、又々蒐るべしとせせず。只徒ら

に日を送る。秋も暮れ冬にもなりぬ。猶手寒へ身つかれて、進退此に窮まりけり。昔越王と吳王と冬水戦する時に、冬時、游統を併す薬方と、手龜らざる薬と、并に破れたる大なる瓢を千金に買ひ求めて吳人越人の軍を大に敗つて、吳王越の國を取りたる事あり。是を中流に船を失すれば、一壺も千金と云ふ。千金を以て大國を取るは大なる得付きたりと、心地よからざる人はなし。彼の薬方を此時求め用ゐんと欲すれども俄かに求め得難し。大なる破瓢を求めて或は腰に付けて河を泳ぎ、或は其大なる瓢に乗りて河を渡らんも、急に求め得がたし。浮沓とても、常に用意せざれば俄の用に叶はず。自ら只大に負を取つて武名を千歳に穢し、耻を萬人に曝すことは、平生武道の心掛けなく、其家職を忘れて兵書を讀まず、軍法を學ばず。遊覽茶湯女色男色榮耀榮華無用の費に金銀財寶を入れ、金銀足らざれば、能き武功の士をも抱へず。武道具兵器も常々落へ置かざれ

ば、斯く俄の軍用に足らざれば、都鄙の人に笑ひを千歳に残す。されば良將は常に水練の士、用間の兵士までも多く抱置きて、夜に紛れて水練の斥候を河に入れ、水底の大綱小綱逆茂木などを切り流し、亂杭を抜き捨てさせて後、安々と河を打渡しける。斯く敵の謀に落ちずして、却つて敵の計ごとに依つて敵を其謀に落し給ふ頼信卿を武將の手本とせん。と、時の諸將評しける。是の如くなる謀を失したるゆゑ、今年は爰にて空しく暮しける拙なさよと笑はぬものはなし。

兩大将召飯さるゝ事

歳も明けて二年の春に成りしかど、攻め蒐かるべしとせ守り居たり。惣じて守の法は、味方足らざる時は守る。又城を圍んで兵糧の道を断ちて守るとこそさく。是は味方も彼に倍せり。たとへば數千年守つても詮なかるべきを、徒らに守りて數月重るに

従つて、官軍食乏しく成つて、皆ちりり落ち失せぬと聞えしかば、二月に至りて成道は召歸さる。安房守藤原光業も軍勢に催されて陣中にありしが、忠常が武威にや恐れけん。此陣はかくしかるまじと云つて忍んで逃げのぼる。斯りしかば、忠常力を得て、猶敵の氣を屈せんと、いよゝ手痛き程の戦ひもせざりける。官軍に申しけるは、此の度は忠常よせ来ると云ひしかば、直方も後ろかみに引かれて、少なる時は能くこれを逃がる。しからざる時は能く之を避くと云へり。ひとまづ爰をさつて、足柄峠にて支へんと引く程こそあれ、我れ先きと逃げのぼる。

源頼信武勇軍術法有り忠常降参の事

長元二年三月二日、公卿會議あつて、多田滿慶が五男甲斐守源頼信、知勇の者なればとて、頼信此の頃上野國にありしかば、忠常退治すべきの旨仰せ下

さる。偏にこれ身の面目と悦び、坂東の武士に觸れ廻らしければ、軍兵雲の如く馳集まる。忠常頼信の知勇なるを聞き、爰にては始終支へ難しとて我が城に頼信を頼る。頼信は四月十日に下總國に發向し、忠常が城を見るに、海邊なれば容易く攻入る可き様なし。殊に官軍の大勢来るを知つて浦々の船ども悉く取隠しければ、渡るに便りなく海邊に猶預す。頼信知勇兼備へたる良將なれば、渡る可き所のあるらんと馬を蒐廻らし見給ふに、爰に波の少し激する筋あり。是淺瀬故、岩にせかれ碎けて騒ぐなり。是一定淺みなるべきと推量りて、夜に入り斥候の士水練の上手を數多入れ瀬踏させ、亂抗逆茂木大綱なんご切り流させて、然も如何にも淺瀬の通りなれば、頼信頼義父子共に馬を海へ打入れ給へば、郎等には渡邊源次郎竹、浦邊八郎末春、碓日五郎貞元、三浦平太郎爲次、浦邊平次吉氏、大宅三郎光忠、池田五郎常元等、我れ後れじと馬の頭を駢へ水鞠はつと就上げ

一度にさつと蒐入れば、諸陣一度に渡しける。頼信朝臣、今日の裝束には赤地の錦の直垂を着給ひしが海を渡さんとてにや生絹の直垂にぬぎ替へ、品革威の鎧に同毛の甲を着、二代芦毛とて太く逞しきが尾鬚飽まで垂り。抑此馬と申すは、父滿仲に星芦毛とて骨太に逞しき名馬あり。極めて早き逸物なりしかば別に厩を立て秘藏し給ふ事限り無し。其馬の子なれば二代芦毛と號て其親に替らぬ逸物なりしを頼信上野守になつて下りし時所望して下られけるが、此度こそとて乗り給へり。嫡子頼義は、是も萌黃の生絹の直垂に卯の花威の鎧の未だ己の時とぞ見えし、廿四差たる矢頭高に負ひ滋藤の弓を持ち、連錢芦毛の馬に金覆輪の鞍置て、遠淺に成りしかば鎧踏ばり弓杖つき、物具の水はしらかして鎧突し父と俱に向ひの岸に打あがり給ふ。武者振りの氣高き、あたりを拂て勇みあり。忠常此勢に恐れて、此の海の淺瀬を知ること是れ人間の及ぶ處にあらず。是れ神明

の所爲なるべしと、叶ふ間敷ことをさつて一戦にも及ばず。弓弦を弛し甲を脱ぎ降参して一屬の命をつがん事を歎く。頼信は忠常に命じて、汝國賊なれば私に計り難し。去ながら士卒等は命計は赦すなりと仰せられ、忠常手を摺て悦びける。其後城を改め請取つて、渡部源次郎を跡にす忍守らせ、忠常を召具し上洛ある。美濃國にて忠常は病死す。其頭を斬つて京都に上り、獄門に曝す。帝御威有つて、頼信をして鎮守府將軍に任じ給ふ。頼光朝臣死去の後は、十一年の間源氏に將軍絶えたりしに、又頼信より相ついで武將に備はり、威勢頼光と等し。武士相順ふ事風に草木の偃すに似たり。

謀叛人本意を遂げざる事

昔し、素盞鳥尊出雲の大社にて御座しが、此の尊草木を枯らし禽獸の命を失ひ、さまざま荒く御座ししかば、天照太神宮を亡し、我れ國を取らんとて軍を

起し、小蠅なす一千の悪神を率して、大和の國宇多野に一千の劔を堀り立て、城郭として楯籠り給ふ。天照太神是れを聞き召し、由無き事に思し召して、八百萬の神を率ゐて天の岩戸へ閉籠らせ給ひければ、六合の内皆な常闇となり、日月の光も見えざりける。此時に鳥根見尊是れを救き、天香久山の鹿を捕へて肩の骨を抜、葉若の木を焼て、此事如何あるべしと占はせ給ふに、鏡を鏝て岩戸の前にかへ歌をうたはせ給ふ御出で有るべしと占に出たり。香久山の葉若の下に占とけてと云ふ歌は此時の事なり。鳥根見尊一千の神達をして調子を調べ歌をうたひ給ひければ、太神宮是に愛て、岩戸を少し開かせ御顔を差出させ給へば、世界忽ちに明かに成りにけり。太神宮岩戸を出てさせ給ひて、八百萬の神達を遣はし堀立てける劔を蹴破り捨て給へば、一千の悪神は散々になつて失せぬ。尊は出雲の方へ落行かせ給ひしより、初めて神武天皇の御宇には、日向の國より船

軍を發しけるを討平け、安藝國へ出て、其れより吉備國へ至り、兵船を調へ兵糧を聚め、其れより難波河内を経て、大和國孔舎衛坂と云ふ所にて、長髓彦と云ふ大敵と合戦し、又紀伊國名草熊野にて度々合戦す。海上にて風にあてられ、官軍利を失ひ神武の御兄三人所々にて討たれ給ふ。されども神武の兵威次第に強く盛んにして、長髓彦を始として菟田兄猪八十梟帥兄磯城など云へる數多の大敵悉く滅びしかば、甲寅の年日向國を出て給ひしより十年を歴て、辛酉の年、大和の國畝傍山をさり開き、始めて内裏を作り帝位につき給ふ。さて崇神天皇御宇には武植安彦と云へるは天皇の一族にて謀叛を發す。同じ御宇に出雲の振根と云ふ者勅勅を蒙る。垂仁天皇の御代には狹穗彦と云へる人謀叛し、要害の城に楯籠る。上毛野八綱田勅を請け是れを討つ。日本武尊の御宇には、河上梟帥と云ふ者謀叛す。武烈天皇の御太子にて御座ける折節、大臣平群真鳥ひ

そかに世を奪はんの志しありしが、何ほどなく大伴の金村に滅されぬ。繼體天皇の御代には、筑紫にて磐井と云ふ者謀叛を發し、肥前肥後豊後等を押領し三韓の貢物を押へ取るによつて、鹿火に大將を給はり討取る。用明天皇の御代には守屋大臣佛法を破り穴穗部皇子を位に立てんと謀叛す。孝德天皇の御宇には蘇我入鹿、聖武天皇の御代には左大臣長屋王、同御宇天平十二歳に太宰少貳藤原廣嗣謀叛を發し、筑紫九箇國を掠め奪つて、肥前國遠珂と云ふ所に城を構へ、逆威を振ふ。天皇大野東人を以て討たしむ。孝謙天皇の御宇には奈良麿と云ふ者天皇を推下し、道祖王を位に立てんと謀る。廢帝の御宇には惠美大臣押勝、光仁天皇の御代には、伊治咨呂、桓武天皇の御代には高丸と云ふ惡黨、奥州達谷窟より起つて駿河國清見が關まで攻上る。藤原利仁節刀を給はり進發す。高丸又本國へ引退く。利仁續いて攻入る。神樂岡と云ふ所にて高丸を射殺す。

伊與親王は平城帝に討たれ、平城天皇は嵯峨帝に負けて、御子眞如親王は春宮の位を下り、天皇へ渡るとして道にて失せ給ひぬ。仁明天皇崩御の後、春宮帶刀、伴健峰、但馬守橘逸勢等太子恒貞をとり立てんと云ふ企てあつて露はる。陽成天皇の元慶一年出羽國に夷賊おこる。小野道風を鎮守府將軍に任じ、奥州へ遣はす。朱雀院の御代には、相馬次郎將門關東へ下り、逆心を起して關八州を奪ひとつて、自平親王と名乗りて百官を備へ置き、下總國相馬郡に都を立て新皇と云ふ。是れに依つて、平貞盛を遣はし、急ぎ關東へ下り、藤原秀郷と相計つて數千の兵を聚めて將門と合戦す。貞盛自ら弓をとつて矢を放つ、其矢將門にあつて馬より落つる。同天皇天慶年中に藤原純友と云へる海賊、伊豫の國にて謀叛を發し、近國を攻掠め狼藉甚だし。官軍多く彼れに討ち亡ぼさる。此純友は大織冠の末流なり。前かた在京の時平將門と相逢て同道し、比叡山に上り、洛中

を見下し互に逆心さざして、若し本意を遂げば、將門は桓武の末孫なれば、帝王となるべし。純友は藤原氏なれば、關白となるべし、と約束して將門は東へ下り、純友は西國へ赴きける。都より小野好古を追捕使の長として諸軍を率いて純友を退治す。冷泉院の安和元年には中務少輔源繁延近頃は相馬能門是れ等の類あら、先廿四五三十人に及べり。去れども一人として本意を遂たる者無し。よし無き忠常が謀叛だてして、京田舎耻を囁す事よと口々に云ひける。

賴信河内國を賜つて入部の事

長元五年八月、將軍賴信河内守となつて、河内國壺井郷に城を築きて居住し給ふ。今年五十九歳なり。同年九月二日賴信朝臣、強に申請被るに依りて、平忠常が嫡子小次郎常將、忠常弟中村太郎將恒、同賴尊入道等が命を助けて其知行三分の一を給ふ。同年十月二日先歳平忠常追討の時、武功の勝れたる

勇士等を招きて、持てなし給ふ。中に源五郎光忠には、攝津國納川と云ふ所を給つて、細田八郎源頼資と改め給はる。

### 源頼義八幡參詣の事

長曆二年三月十五日、源頼義朝臣は御宿願の事あつて、男山八幡へ社參あり、其の夜は社頭に通夜し給ふ。廊下は御伴の侍共の居所となる。舍人下部は皆門外になみゐたり。緋の玉垣いろめきて、入目の陰に輝きけり。祝子調子を調べ榊の枝に木綿手かけ、色々の奉幣を奉り、御神樂を奏し、蕪繁蕪藻の菜を勸む。宮つこの打鼓の聲、さねが袖振る鈴の音、照る月陰に神さびて信心を傾け給ふ。されば當社八幡大菩薩と申すは、應神天皇也。此帝御歳百十歳にして崩御ありしが、欽明天皇の御宇に神と現じ、豊後國宇佐の宮に崇め奉つる。白幡八流れ下り立ついはれにより八幡と申とかや。其後我等が先祖忝くも、清

### 八幡太郎誕生の事並源太産

#### 着鎧付帯の事

長曆三年二月十八日、御臺所御産の氣御座して、取類らせ給ひければ、産屋へ御移りある所に、御産平安若君なりと呼りければ、上下あつとぞ悦びける。鎌倉清正が室いださ上ぐる雲上後藤内が女房御乳つけに參れり。一門は云ふに及ばず、日本に名を知られたる程の武士は色々の物を賀し上る。童名源太丸と云ふ。父頼義御悦び有て、産着をまゐらせんと尋常のうぶきとは事かはり、源氏重代の楯無の鎧をうぶきにまゐらせらる。それよりして、源太が産着の鎧とも申すなり。是瀧川信一が家の肥録等にも之を載す。日東の慣ひにて、妊婦あるときは則ち五月より以來九尺五寸或五尺五寸の肩を以て、任脈通り上腕に當て帶せしむ。預め血氣血逆を防ぐの備也。兒降誕して後、猶血氣未だ全く充ざれば、則須臾も

和天皇、貞觀二年に和氣葦箆を勅使として宇佐八幡へ即位の旨を申さる。同十一月僧行教宇佐へ參詣したりしに、八幡太神王城へ來り、寶祚を守るべしとの御託宣ある由奏聞し、始めて山城の此の男山石清水と崇め奉りしより、代々我等が家の宗席となり給ふ。ほどは遠に障たれど利益はことに新なりと、信心を催して少し眠り給ふ。折節御殿の内より、妙な御聲を出して、汝が所望を叶へんと三寸の靈劍を給ふよし感夢新なり。且辰枕牀に於て一柄十劔を得る。頼義悦び下向ある同夜御臺所も自其靈夢を蒙り玉ふよし、不思議なる夢なり。如何さまにも、此劔は仔細あらん、一家の珍寶たりと安置して悦び給ふ所に、感夢あやまたずして、室懐胎し給ふ。五月にて御帶賜御座て同十六日吉日とて著帶あり、御懐妊のこといよく定らせ給ひければ、御産平安若君御誕生の御祈り淺からずとぞ聞えける。

之を解かず。若之を怠るときは、則ち惡血上り衝いて血氣昏迷して、殆んど危きに至る。故に産家一人ももちひずと云ふことなし。又帶の長さ或は七尺五寸は人の長七尺五寸は人天の生質の定尺七尺五寸の骨度なり。(樂按るに七尺五寸の骨度は人々其を用ゆるは其器量長大なるを願ひ祝す。又九尺五寸は兒九月半にして、生質全き故なり。又神功后宮、御身の長九尺五寸なり。應神天皇(八幡宮也)胎内に御座時御腹大にして、三韓退治の時筑紫にては九尺五寸の帶をし玉ふ。歸朝の時豊前國宇佐宮にて應神を安産し玉ふ。其吉例を思し召て、頼義公の室に之を用ひ玉ふ。但し長さ故に二重に折廻して、之を爲る。是故實なり。日本耳に限らず、中華にも之を用ゆと見えたり。奚遜便方と云ふ書に出たり。

### 源太丸元服の事

寛德二年二月十八日、源太丸七歳にして、石清水八

幡の御寶前にて元服し、八幡太郎義家と名乗り、明  
大將の譽を世にほどこし玉へり。

多田五代記卷第七終

多田五代記卷第八目錄

- 安部頼良登任重成等合戦の事
- 源頼義鎮守府將軍追討使に任ずる事
- 安部頼時矢に中る事
- 國解を進つる事
- 河崎合戦源氏敗軍義家弓勢の事
- 將軍御詠歌の事
- 源頼信朝臣往生の事
- 真人光頼武則等官軍に與力せしむる事
- 將軍謀を爲して稻禾を刈らしめて、敵貞任、宗  
任を挑さ出す。貞任、宗任寄來る付武則、軍評  
定、井八幡の神助有て、白鳩、軍上に翔り竟に  
小松柵を攻め抜く事

多田五代記卷第八

多田兵部輯

安部頼良登任、重成等

合戦の事

永承年中の頃、陸奥國の住人安部の頼良と云ふ武士あり。これは人王八代孝元天皇の後胤、安部忠頼が孫忠良が子也。祖父忠頼は東夷の酋長たり。六郡に威を振つて、人民をなやまし、郡吏縣士を劫略す、子孫尤も滋くはびこれり。漸く衣河の外に出ても、賦税貢物を天王に獻ぜず、衛役を勤むることなし。然れども、大臣は祿を重じて奏せず、小臣は其つみを恐れて訴へず、故に下の悲み上に通ぜずして代々驕奢なり。子三人あり。嫡子は貞任、次男宗任、三男家任と云ふ。兄貞任は、身の長六尺有餘腰の圍七尺餘りの大男、力も人に勝る。斯りしかば、衣河の



邊に出て我儘を行ひ、公事を勤めず、公用を闕き  
剩へ他人の守護代官を追拂ひ、里々を押し取り邪威  
を振ひ其勢ひ國に雙ぶ者なし。いよ／＼強惡さか  
にささし、神社佛閣寺領までも、掠め奪ひ取るのあ  
まり、大守藤原朝臣登任、出羽秋田城介平重成等  
が所領も過半押領せり。去によつて兩人立腹し、近  
里遠郷に羽檄を飛し、牒合せ觸廻しければ、程な  
く馳せ集る手勢かれこれ九百五十餘騎を二手に分け  
重成、前鋒に進て大に鬼切部に戦ふ。頼良之を聞き  
て早く衣河の關を守る。此關素より隘路峻嶮にして  
虎狼の強秦峭函の固に過ぎたり。一人嶮を拒げば萬  
卒進むこと能はず、殊に樹を伐つて蹊を塞ぎ、崖を  
崩して路を斷ち切て樊噲も勇を止め、張良も謀を  
失する計りの節所なれば、頼良此關を憑てこそ軍は  
發したりける。寄手柵下に攻つた時を三箇度作る、  
城内にも同く時を合せたり。重成其日の出立には柵  
の直垂に小櫻を黄に反したる鎧著て、鹿毛なる馬に

金覆輪の鞍置て打のり、馬を柵下にのりする大言上  
これへ寄せたる大將を誰とか思ふ、大守藤原朝臣登  
任、秋田城介平重成等なり。いかに頼良、皇位をか  
すめ人民をなやます。天罰いづくにか遁ん、いそぎ  
城を渡し降参せよ、命ばかりは上天子へ申し上げ御  
宥助を凝し給ふべし、さもなくば踏落さん、いかに  
く／＼と城を喚んで叩へける。頼良、聞き、何登任重  
成とや、汝等拙謀弱戰短兵を振つていらざる我慢の  
雄鋒を擧て頼良に向て弓引は蟻螂が臂を擧げて龍車  
にひかひ、飛蛾の火を望んで焚死するに似たるべし。  
汝等が目には某僻事すると思ふらん、我に少も非義  
なし、只天の與ふる所をとるなり、汝等降参せよ、  
我有し置ん、さなくば一人も漏さじと云へば、重成  
さ、さのみ過分の惡口な吐ちらせよ、あれ踏類と  
云ひつゝ、重成が五百餘騎柵を破らんと喚て蒐る。  
頼良が陣より藤原業近と名乗て、二百餘騎重成が五  
百餘騎を駈散さんと、城戸を開き逆茂木引のけ大勢

の中に分け入りて面もふらず散々に戦ふ。重成大勢  
にて小勢をとりこめ、漏さず討とめんと蒐めぐる。  
業近が二百餘騎二十騎ばかり討死す。疵をかうむる  
者數を知らず。重成が兵三十餘騎うたれ、疵を痛む  
者五十餘騎ばかりとぞ。兩陣たがひに引しらむ。其

今又これ兵革の兆也。世今より如何有るべきと諸人  
これを悲む。

源頼義鎮守府將軍追討使に  
任ずる事

次に登任が四百餘騎に、家任、重任等、五百餘騎、百  
騎二百騎入かへて透間もあらず戦ひけり。蒐ては引  
き引きては返し、入組入かへ、午の竟りより申の半  
まで戦ひしが、終に大守の軍やぶれ、我さきにと落  
て行。餘さじと追かけ打ては落し、引組ては首をと  
り、衣河の柵下に首百五十級斬り梟けたり。頼良よ  
ろこび愈々恣に振舞けれども、誰人も敢て制し防  
ぐ者なし。斯りしかば國々より早馬を馳て京都にこ  
れを訴ふ。

東國に兵亂發りぬると誰云ふともなく私語しかど、  
さまでの事もあるまじと皆思ふ所に、頼良謀叛のよ  
し、登任重成等が方より早馬を以て言上す。公卿  
殿上人驚きさわざ玉ふ。此度の追討使誰をか仰せ付  
らるべきと、奏聞あれば、誰彼より伊豆守源頼義宜  
からんとの勅詔なり。此頼義は多田滿仲の子河内守  
頼信が嫡子なり。頼義は性沈毅にして武略多し。最  
將帥の器たり。勅命を奉り諸國に羽檄を觸れ廻は  
し、兵を率て大内に参内ある。朝敵追討の爲め發向  
するに先例あることなり。大將軍源頼義朝臣青地の  
錦の直垂に、楯無の鎧を著源氏重代の太刀、左衛門  
大尉源守國が父、守光より傳へ所持しけるを勅詔に

永承五年の秋の始より、奥州、出羽、二箇國のあひ  
だ黄蝶とぶ、其さま群る雲の如し。昔承平年中に、  
常陸下野にこの怪異あり。果して平將門闖關に及ぶ、

依つて賜り、是を帯き紫震殿に伺候し玉ひ、其時節  
 刀次に鈴を賜り、宸儀は南殿に出御し玉ひ、近衛の  
 司は階下に陣を設け、内辨外辨の公卿参列して中儀  
 の節會を行はる。頼義朝臣をして陸奥守兼鎮守府將  
 軍に任じ給ふ。其後弓場殿の南の小門より罷り出て  
 東國におもむき給ふ。由々しくぞ見へし。相従ひ下  
 る人々には、長男左衛門尉義家、次郎義綱、修理少進  
 藤原影道、同影季、散位和氣為清、藤原茂頼、大瀬  
 三郎近宗、散位佐伯經範、源滿信、清原貞廣、雲上  
 後藤内範明、大宅光任、三浦為宗、鎌倉清正、藤原  
 重道、散位平國妙、笑和次郎忠俊、卜部一平次氏正、  
 關五郎光成、平居次郎吉則、木津次郎景吉、西村市  
 郎吉忠、脇田左京俊綱等也。都合一萬餘騎なり。頼  
 義勅命を奉ることは、父頼信朝臣先年追討使とし  
 て、平忠常を攻しとき、頼義軍旅の間に存つて勇決  
 群を抜け才氣世を被ふ。去るによつて、坂東の武士  
 多く下知を重んずる故なり。案のごとく、逢坂より

東の大名まかり向ひ、歸服すること雀の風風に歸  
 するが如く、奴僕のごとくに相隨ひける。後冷泉院  
 の御宇永承六年八月に、陸奥國に下著ありしかば、  
 其威風東州を靡す。頼良恐て頼時と改名し、畏て  
 御迎に出、あまつさへ兵糧、馬、鞍、金貨の類官軍  
 に給仕す。頼時斯致しける上は國中仔細なし。其後  
 任終るの年、府務を行はんが爲め鎮守府に入る。頼  
 時いよ／＼首を引給仕す。將軍以爲頼時は仔細な  
 けれ共、嫡子貞任が心いか計がたし。然れども頼  
 時かく王勅を敬み、勅命を弔る上はさのみ又改るに  
 及ばずと思ひて、國府にかへる。阿久重河と云ふ所  
 にて日暮れけるに、向の岸に人かげの見えければ、  
 誰ならんと云ふ所に、權守藤原説貞が子光貞、元貞  
 と云ふ者、鷹狩に出て野宿して居たり。將軍光貞を  
 召て頼時謀叛の起りを問ふ。光貞畏て言す。さん  
 候ふ、頼時が長男貞任己が武勇を恃み、人を塵芥糟  
 粕とも思はざるより、悪心も發り侍る。去りながら

君の武威に恐れ只今は歸服仕り候ふ。然れども貞任  
 が心底つたひ承るに、君歸京の後は又逆心を起んと  
 相はかるの由、其さこえ候へば必ず御心をゆるさせ  
 給ふなど、私語て言上す。將軍さして我が思ふにた  
 がはず、偕ては貞任等を召して罰せんと思し召して  
 道より貞任等を召す。頼時はやくも光貞が訴をき、  
 貞任に語つて言く、人倫の世に従ふこと子孫の爲め  
 なり、必ず妻子の爲めにはことなる恥をも忘る。我  
 愚にして父子の愛を忘ることなし、汝罪に沈んに、  
 我なんぞ跡に存へんや、縦ひ戦ひ利あらずとも、我  
 が身等しく死んこと親子の中の本意なりと云へば、  
 列居たる郎等ども一度に言やう、君の仰せ御理り何  
 も心を一にして、衣河のせきを固めば、恐くは日本  
 の内に誰人かたやすく破り侍らんや、思ひ立給へと  
 急ぎ關を固め軍兵を招ぐ。先づ頼時が舍弟、僧良昭、  
 伊具十郎永衡、金爲行、比浦六郎重任、安部爲元  
 散位平孝忠、藤原經光、同正綱、同正元、藤原重久

安部則任、同爲元、金則行、同經永、藤原業近、同  
 頼久、同遠久等、方々よりはせ集る。將軍方にも亦  
 軍兵を集む。坂東の武士雲の如く馳せ來る。陣屋を  
 かまへ、幕をうち家々の旗野を蔽ふ。然る所に、散  
 位藤原經清、平永衡等も手勢を引率し將軍方に來る。  
 これ等は頼時が一家なれども、何なる心あればにや。  
 將軍人を召て彼等が御味方に馳せ來る義を尋ね聞せ  
 玉ふに、永衡は先司登任朝臣の郎等なり、一歳登任  
 當國の任にあたりし時一郡を領す。其威を以て登任  
 が女を嫁し申し、後は大守に従はず、合戦の時も頼  
 時にくみし、不忠不孝の者にて候へば、今外に歸服  
 をあらはすとも内にはいかなる奸謀をか挟まん、こ  
 れを思ふに早く御思案候へと云ふ。將軍さしては  
 彼を罰すべきとて、藤原茂頼に仰せて其罪を責るに  
 心底大形露る。去るによつて其郎等四人ともに藤原  
 重道に預け給ふ。これより經清等の武士怖れ安堵  
 せず、經清郎等の源太貞俊と云ふ者を招き、前車

の覆るは後軍の鑑なり、永衡已に討るべし、我また何れの日か死なんことを知らずと云ふ。貞俊承り、君已に將軍に御仕へ有て、假使忠孝ありとも、はかしくしき事も候ふまじ、もし亦君真任が一家なんど、言れて罰せられ玉は、其時、千度臍を噬ともなんの甲斐か侍らんと諫む。經清さく、此上は將軍に偽をかまへ、流言の根なきそらごとを云ひひろめ、將軍を切し國府へ歸らしめんと謀り、罷り出て申は頼時歩騎共を多く國府へつかはし將軍の妻子を取らんと相謀るの由、申す者の御座候ふと、實しやかに申す。將軍嘸あらんとばかり仰せられて、其後金爲時を大將に仰せ頼時を討しむ。頼時舍弟僧良昭等を出し、防がしむ。將軍爲時に命じて、數百騎の兵をさしつかはして、頼時が舍弟僧良昭等を攻しめ、將軍はあとの敵を防せがんと、數千騎を又引分けいそぎ國府にかへり給ふ。良昭これをさして、城をはなれ、出張す。官軍攻め寄せ、さんくんに戦ふ。

爲時弊をあけきたなし方々返せ、殿原と云ひけれど、引きたる勢のくせなれば、我先にと落失しかば、爲時も力なく散兵を圓集連て國府にかへりける。

藤原重道に仰て平永衝并郎等四人を斬る

今年より世間飢饉して、兵糧もち來らざれば、士卒飢にのぞむ。斯りしかば、皆方々へ落ちりぬれば、重て攻ることも力なし、時節をまちて討べしとて年序を送り給ふ。

安部頼時矢に中る事

今度公卿參内して、將軍の軍勢を奏し、新司を仰せ付らるれ共、頼時が武威に恐れ、辭退し勅に應ぜず。去によつて、又重て頼義朝臣をして征伐をとぐべきの勅命あり。將軍又兵を招くに雲霞のごとく馳

良昭まけ色に見えて引き退く。官軍勝にのつて、追かけ行く。良昭が伏兵四五百人、起つて、官軍を取りこめんとす。官軍は後より味方のつづくにこそと思ふ所に、間近くなつて時をつくり喚てかゝる。官軍は道を取りさられ、周章騒ぎけり。前には敵數千人、楯を叩き、鐵を揃へ、待ちかけたり。後は四五百人にて、細き道をすまなく閉ければ、賊に籠の内の鳥のごとし。爲時下知して、敵に巻れぬこそ安からねと、皆一處に馬の頭を立なほし、跡なる敵を目がけ喚てかゝる。敵も矢尻をさへさんくんに射る。官軍これを事ともせず、父討るれども子いたはず、主討るれども郎等救ひ得ず、まづ前なる敵を破り其後とつて返つて味方をこそ助けめと、兜を傾け、抽連て一所にかゝる。此勢を見て叶はじとや思ひけん群々和中を開て通しける。此時經清八百人を引分け、良昭が陣に加り、あまつさへ戈を倒にし後を攻め、後矢を射にけり。官軍等忽ち引しりぞく

集る。さて金爲時、下毛與重等に仰て奥方の士卒を催す。之に因つて、仁士、鉦屋、呂志、宇曾利の武士等三都の夷人を合せて、安部富忠をさきとし官軍爲時に従ふ。此外五十騎百騎五騎十騎打ちつれて、官軍にはせ加はる旗小織のひらめくは白雲の風に巻かごとし。頼時、これをさき、敵に勢つきなば、後の難儀ならんと、自ら二千騎を率し、撃て出る。將軍方にも、貞任あし來るときこそしかば義家を大將として、藤原影道、清原貞廣、源滿信等をさし添へらる。兩陣道にて行會ときを作る。頼時方にても、同く時を合せ散々に射合ける。後には打ものになり命を棄て防ぎ戦ひぬ。何れ利ありとも見えざりける。日も暮れければ、其日の戦は止みにけり。軍勢みな、楯のかげに寄そひ、兵糧つかひなんどしけり。若も、夜打や有らんと、十騎二十騎づゝ夜めぐりは兩方さびしく、山野に焚くかどり火は天地輝やさをびたゞし。漸く夜明けしかども、

昨日の軍に草臥てさらに進む者なし。富忠伏兵を設け、此を嶮岨に引付て整て大に戦ふ。其時頼時が陣より、其長六尺有餘の大法師褐の直垂に黒糸の鎧をきて、氷の如くなる長太刀を以て同宿と覺しき者の七八人引連れ大音上に名乗ける。只今斯云ふ法師は、その者にあらざれば名乗も由なく候へ共討死の後、道中にうち捨てられんも口をしく侍れば斯細々と申なり。是は立山にはかくれなき出羽の覺名坊と申て、心も無下に劣らず、身も輕し、打も取ては鬼神なりと人も云ふ、強弓の矢繼ばや、透間かぞひに侍れば、一山に雙ぶ大衆もなし、去るによつて、良昭殿に憑まれ侍る、いらざる法師の腕だてに候へども一矢受けて見たまへとて、引詰く射ける矢に官軍大勢射倒されけり。矢種つきのれば、長太刀とりもて閃めかして、群る中へ打て入り、縦ざま横ざまに切りちらす。官軍の大勢この法師にさり立ちられ、引色に見えたり。爰に卜部七郎末晴と名乗

つて、ことくし僧の働さや、一太刀受て見玉へとさき結び受け流しつ、打合ける。末晴、さこゆる名人にて、法師何とかしたりけん、長刀打おとされ太刀を抽んとする所を、首中にて打おとす。同宿どもは腹を立てにくき男や、のがすまじと一同にとびかゝる、追返しまくりつけ、聲あげて戦ひぬ。官軍には、末晴、討たせそ、つゞけやと馬をならべ蒐合せ、兩陣今は入亂れ、震動して引組首を採もあり主親を討たせ、手負を抱て戰場を出るもあり、人馬河邊にたほれ、流るる水の色紅に變りけり。富忠は敵をよき圖に引受けて、伏兵を蛇陣に備へ一舉に伐崩さんと、相待ちけるを、頼時此伏兵を知らずして飽まで進て下知しける處に、伏兵起つて押包んで一騎も漏すと戦へば、流矢來て頼時が小脇に中る、心猛き頼時なれば、ぬいて棄んとしけれ共、痛手なれば、目くれ馬より落にけり。郎等共いそぎ馬より飛び下り是をかゝひて陣を引く。官軍つゝいて追

て行く。頼時が身親き郎等ども五騎十騎踏留りく返し合せて命をすて戦ふ間、にはかに落のび、鳥海の柵に歸つて竟に死すとぞ聞えける。

國解を奉る事

軍に財なきときは士來らず。軍に貧無きときは士往かず。實なるかな。官軍今度の一戦に利を得ぬれども、此ごろ世界飢饉ゆゑ、餓死ぬる者數を知らず。民貧しければ軍旅に糧を運ぶ者なく、兵士糧食なきゆゑ斯る所に永居し、飢つかれ犬死せんよりはと皆落散りしかば、重ねて兵士を催し又は兵糧を納れ軍旅にあてがはんと國解を進つて云はく。

請欲誅戮安部貞任宗任等一狀

源頼義

備臣使下金爲時下毛野與重等廿計説與地伴因上令興官軍一於是飽屋仁士呂志宇會利合三都夷人一安

部富忠爲首發兵從之。時而頼時聞其計。自往陳利害。衆不過二千人。富忠設伏兵。擊之。嶮岨。大戰。二日。頼時爲流矢所中。還鳥海柵。死。但餘黨未服。請賜官符。徵發諸國兵士。兼納兵糧。悉可誅戮。餘類。矣。仍如件。  
天喜五年九月五日從五位下陸奥守兼鎮守府將軍源朝臣頼義誠惶誠恐謹言

河崎合戰源氏敗軍義家弓

勢の事

安部貞任等金爲行が河崎の柵に楯籠るよし聞えしかば、同年十一月將軍一萬餘騎を率ゐ、是をとりまきて戦ひ止むとさなし。十八日暮れがたより、俄に風まじりに雪ふつて連日に及び、なほ烈しく路塞り家を埋み、往來の人なれば、官軍食つき人馬共に疲れ凍えて、すべき様なし。又國府に歸らんも道見えず。いかいせんと云ふ所に、貞任が兵、東西南北の

つまりに立ちわたつて、雨の降る如くに散々に中に取まら射る矢なれば、人に外る、矢は馬に中り、馬にはづる、矢は人にあたる。進んで蒐ちらさんと思へども、手こじえ膝蹴んで進むべき力もなし。只我も人も命を逃れんとするにより、大に破る。死するもの數を知らず。將軍の長男義家、赤地の錦の直垂に、金の金物打ちくみたる甲冑を著、月毛の馬に打ち乗り、大鎗を以て、小手の廻れ、腰當のあまり手反の直中、内冑中る所幸とはらりと射射り給へば、必ず斃れずと云ふ事なし。夷人靡走りて敢て矢さきに向ふ者なし。これ人間のなす所にあらず。八幡太郎と名乗られけるも理と云ひて感じける。然れども官軍或は落失せ、或は討死して残る兵わづか六騎になる。長男義家、脩理少進藤原影道、大宅光任、清原貞廣、藤原範季、同則明等也。貞任勝にのり數千騎左右の翼を張つて喚き叫んで攻む。飛矢雨のごとし。將軍の馬ながれ矢に中り斃る。影道馬を

得て奉る。義家又馬を射さす。則明我馬にのせ、我も又馬をとつてのる。され共義家頻りに射給ひければ、弓勢に恐れ引退く。官軍圍をのがれ出給ふ。然共降りつむ雪に道知れず、便著も知らぬ山中に忙然として御座しが、將軍の仰によつて、老いたる馬を撰んで前に立てよとて放ちければ、麓の里に出たり。昔齊桓公は孤竹の國を伐けるに、春往て冬還る。深雪道を埋めてかへる事を得ざりけるに、管仲と云ふ者の計らひ申しけるは、老馬の知を用ゆべしとて、老たる馬を雪の中に放ちつ、馬に隨ひ行さければ、齊國にかへる事を得たり。將軍も此ためし思ひ出でられけるにや。爰に相摸國の住人、散位佐伯經範は、將軍股肱の臣にて、三十年君邊を去らず。常に憑しき者なりと厚く思し召し、が、軍敗れし時、將軍を見失ひ、何地へ行かせ給ふらん。賊の爲めに討たれもやし給ふかと、涙を流し落ゆく味方に問へば、將軍は敵の爲に聞まれさせ給ひしが、もはや撃たれ給

ひぬと言すて、過にける。經範等どもを招きて、我將軍に仕へて年久し。高恩山の如し。今かゝる時節命を惜まんや。將軍と相ともに討死せんと思ふなり。汝等は故郷にかへつて妻や子どもに此事を語るべし。早とくくと云へば、郎等ども聞て、仰とも覺えず候ふ。すてに國を出て日より、二度故郷に歸らんとは存じ侍らず。君と一處とこそ思ひ定め侍りしに、今見すて奉り何方へ參るべき。君將軍の恩を思ひ給ふがごとく、我々も爾なり。君將軍の恩を思ひ給はば、我々も君の御恩の爲め、君と一處に討死仕らん。我々をもゆるし給へと、落涙して落ちん氣色はなし。經範さし、さては憑もし方々、我常々の目利ちがはざるこそ神妙なれ。然らば冥途までも一處に行かん。去りながら、下々はみなく故郷へかへるべしと云ひつ、主従三騎雲のごとく群る中へ面もふらず打て入り、戦ふ事電の光るが如し。爰にあるかと思へば彼にあり。前に在るかと思れば

後にあり。引けば一處に引き、蒐れば又一同にして半時ばかり戦ふ。兵十二三人討ちとり、三人枕をならべて討死す。藤原景季は、味方落行きしかば、將軍を落し延さんため、七八度まで取つて返し、散々に戦ふ。死を輕んずるゆゑ、敵陣に蒐入ること本陣に還るがごとし。茲に安部貞行と名乗り、駒を蒐げよせ、景季と組む。景季力まさりけん、搦搦んで引よせ、鞍の前輪におしつけ首かき切て放ちければ、馬は分れ身ぶるひして立にけり。賊師これを見て、彼一人に多くの味方を打せし無念なり。大勢して中にとり籠打べしと喚いて蒐る。景季運つきて、馬蹶きて、爰にして敵の爲に捕はる。敵陣にも死する者の數を知らず。敵なれども、景季が武勇を感じ惜みけるなり。源満信は將軍の一家なる故、軍勢に催されて下りしが、將軍も他にことなる寵ありて、恩顧山の如くなりしかば、其恩を忘れず、萬死に入りて一生をかへりみず、火花を散し戦ふ。將軍の腹心の

臣に藤原茂頼も、將軍の行かたを知らず。ひとへに水鳥の陸にまどへる心地して涙にくれ居りしが、我將軍の骸骨なりとも拾ひ孝養にせん。去りながら此まゝ行かば、敵陣の中へ入れまじ。出家せんと髪を剃ちとし僧となり、涙と共に行く路にて將軍に行會ひ、よろこびの涙せさあへず。出家甚しきに似たりと云へども、忠節感ずるに足れりと、御悦びかぎりなし。散位平國妙も常に能職ひしが、是も生捕られけり。官軍斯小勢になり、貞任には日々に勢つきければ、京都に此旨を言上す。さるに由て、源朝臣兼長、源齊頼等に勅して兵糧并に軍勢等頼義朝臣へ加勢し、俱に貞任を追討すべきの旨仰せ下さる。去れ共、貞任が武威に恐れはかくしからず。加勢の勅を固辭する將多しと聞えける。

將軍御詠歌の事

さて將軍は御足に流矢あたつて痛ませたまひ、い

京都よりの使者、東國に下つて、頼信公御他界と言上す。將軍御歎きあつて、陣を引き、相摸國鎌倉の御所に歸陣あつて、合戦もいよく延引とぞ聞えける。

真人光頼武則等官軍に與力せしむる事

康平五年の春、頼義朝臣任終るに依つて、高階朝臣を陸奥の國司に任せられ、下著すと雖も、貞任が勞ひに恐れ、其うへ國中の兵ども、みな經重には従はざりしかば、經重はいく程もなく歸洛す。貞任等これをさし、彌逆威さかんにして、官物を押領すと聞えしかば、此度はたれをか任じて下すべきと、様々の異見なりしかど、只今、日本の内に、貞任に勝るべき者なし。何時までも頼義朝臣宜しかるべきとて、重ねて又將軍に勅命ありしかば、將軍策をめぐらす。爰に出羽國仙北の住人、清原直人光頼舎弟

まだ平癒せず。冬も半に成りぬ。木々の梢も白妙に雪ふりつもあり、都打出てより以來、手を折てかぞへ見るに、年月の移り行くに付けても心細く覺えて、都には花の名残をとめをきて  
今日下芝にいとふ白雪  
此御歌をさしける武士みな袖をしぼりける。

源頼信朝臣往生の事

康平三年の秋にもなりぬ。都に御座頼信公は、一門公達みな貞任退治の爲め東國に在陣あれば、命全うして人々の上洛を明け暮れ相待ちたまひけり。さなきだに、秋の夕は悲しきに、尾上の風吹さちちて、檐のしのぶに露みだれ、見る人もなき雲井の月、ひとりや西にふけ行けば、苦むす庭も静まりて、取集めたる哀さに、いと徒然と勝りける。蒐る折節頼信公風の心地と見えて臥したまふ。治術醫師にもほせて療養をつくせども、其験なし。終に九月朔日御歳七十三にして、佛名高く唱へて往生したまひける。

に武則と云ふ勇士等を召す。武則等一家を振つて、一万余騎の兵を引率し、官軍に相従ふ。將軍大に喜び手勢すぐつて三千余騎、七月二十六日出陣して、八月九日栗原郡營岡にいたる。真人光頼武則等と此所にきたり、禮儀をのべ心懐を陳べ、各以て涙を拭ひ悲み喜び交至る。同く十六日、諸陣の身分を定む。一陣は清原武則が子武貞、二陣橋太郎貞頼、三陣荒河太郎秀武、四陣新方次郎頼貞、五陣は將軍五陣の内を三陣に分ち、一陣は將軍、一陣は國內の官軍等也。さて六陣吉美候武忠、七陣員澤三郎武道、八陣源滿信と定め、小松の柵に押よする。清原武則は馬より下り、遙に皇城を拜し、誓つて言く、臣すでに子弟を發し、將軍の命に應ず。志は節を立つるにあり。身を殺すことを省みず。若しいやくも死せずんば必ず空しく生さじ。八幡三所臣が中丹を照し給へ。若し身命を惜み、死力をいたさずば、必ず神鏡に中つて、先づ死なんと、深く矢ふ。武士みな

志の節なるを感じて、落涙しけり。あなじく十九日、磐井郡中山大風の澤と云ふ所につく。明日、同じ郡萩の馬場に至る。小松の柵を去ること五六町あり。この柵と申すは、宗任が叔父僧良昭が柵なり。今日大敗日なれば、日次宜しからず。戦は明日こそせめと、先づ此所に陣をとりぬ。こゝに武貞、頼貞、清正等、先づ敵のそなへ、味方の蒐引の足場を見んため、柵邊近く忍びよる所に、味方の兵の柵邊の宿應に放火す。兵火さかんに發り、城内あわてさわぐ。將軍武則に命じて、明日の義俄かにそむいて當時の戦ひすてに發る。但し兵は機を待つて發す、必ずしも日時をえらはす。故に宋の武帝は往亡を避けずして、しかも功あり。よく兵機を見るに早晩に隨ふべし。武則、畏つて官軍の憤り水火の如し。其鋒さきに當るべからず。兵を用ゐるの機此時に過ぎずと諫め進む。騎兵を以て要害を圍み、歩卒を以て城柵を攻む。此柵、東南は深流の瀧澤を帶

び、西北は壁立の青巖を負ふ。騎馬歩卒共に戦ひ泥んで、すべき様なし。然る所に、大伴の貞季、深江是則等、敢死兵の二三十人を引率し、岸を整ち鋒を杖いて巖にのぼる。鋤鋒を以て、柵下を切りやぶつて城内に亂れ入る。敵も刃をならべ防ぐ。是に依て、城内あわてさわぎ、亂れ潰え敗る。宗任八百人の兵を進めて、城外に防ぎ戦ふ。前陣疲れて之を敗ると能はず。茲に因つて引退けば後陣の軍士は、五陣の軍士平真平、源真清、菅原行基、刑部千富、大原信助、藤原朝臣時經、橘孝忠、九子宿彌弘政、源滿信、清原貞廣、藤原兼成、源親季、藤原光貞、大瀨三郎近宗、佐伯元方、卜部末時、雲上後藤内範明平經貞、紀季武、安部師方、原田中五郎末氏、大江義冬、原次郎俊元、西富源八、下山次郎、福原三郎等を合せ加へて是を攻む。皆是れ將軍の麾下坂東の精兵也。萬死に入つて一生を忘れ、遂に宗任が軍を敗る。或は百騎二百騎、或は千騎二千騎入れ替へ

八幡の神助有りて白鳩軍上に翔り竟に小松の柵を攻め抜く事

或既に云ふ

もみ合せ攻め戦ふ。旗小幟亂れ合へば、盛り過ぎぬる山櫻風の散らすに異ならず。宗任遂に走る。爰に七陣の大將武道は、紫糸威の鎧に金の金物さらめきたるに黒く太き馬にのり、先陣に進んで門をやぶり城内へ入らんとす。宗任が兵三千余騎、遊軍となつて、一度に襲ひ來る。武道迎ひ戦ふ。宗任とがり矢の備へになり、敵をつき破らんとすれば、官軍また鶴翼に開き、中にとり巻かんと、馬の頭を立てなほし喚いてかゝる。斯すること七八度。殺傷ほとんどつき、賊衆城をすて逃はしる。火を放ちて柵をやく。射たふす賊徒六七十人、疵を被るもの其かずを知らず。官軍死する者十三人、手負百五十人也。士卒を休めんとて又引かへし、數日を送りたまふ。

將軍謀を爲して稻禾を荊らしめて敵貞任、宗任を挑き出す、貞任、宗任寄せ來る、附武則軍評定并

康平五年秋七月、清原光頼、武則兄弟は、頼義朝臣の味方に與し、子弟一萬餘の軍兵を率ゐて、陸奥國を越え來る。將軍大に喜び、三千余人を率て、七月二十六日に、國を發陣して、八月九日、栗原郡營崗に至り給ふ。昔田村丸蝦夷を征するの日に於て軍士を支へ整ふ其より以來號して營と云ふ其跡猶存す。武則、真人、先づ此處に軍たちす。邂逅に相遇うて互に心懷を陳べ、悲み喜び交至る。同十六日、諸陣の押領使を定む。清原武貞を一陣と爲す。武則が橘貞頼を二陣と爲す。武則が甥也。字逆。吉彦秀武を三陣と爲す。武則が甥又甥也。字新。橘頼定を四陣と爲す。貞頼が方次郎中軍五陣は頼義朝臣也。五陣の中又三陣を分つ一陣は將軍也。二陣は武則也。是遊軍として弱き。味方へ加ふる爲め也。一陣は國中の官人等也。吉美候武忠を六陣と爲す。目四郎清原武道を七陣と爲す。澤三郎是に於て

武則遙に皇城を拜し京洛なり天地に矢つて言さく臣既に將軍の命に應ず。志節を立つるに在り。身を殺すことを顧みず。幸にして苟も死せずんば必ず空く生さし。八幡三所の神慮我が丹心を照し助け給へ。若身命を惜み君の爲に死すべき時に當つて死せずんば、必ず神鏡に中つて死なんと誓ふ。有がたや軍營に今日白鳩有りて軍上に翔る。將軍以下士卒悉く之を拜す。則ち松山に赴く道岩井郡中山大風の澤に次る。翌日同郡秋馬場に至る。小松の柵を去ること五町有餘也。件くだんの柵は、宗任が叔父僧良昭が柵也。此柵は東南は深流の碧潭を帯び、西北は壁立の青巖を負うて、鳥だも翔りがたし。此故に、歩卒騎兵共に泥んで攻めがたし。然るに宗任が精兵三千、遊軍騎兵として襲ひ來る。清原武道、武則、迎へ戦うて宗任が軍を大に敗り、大軍を伐り崩して後、將軍士卒を休め、干戈を調へ増、治兵して北を逐はず、攻撃せず。亦霖雨に逢、徒に數日を送りける中に、粗密て軍中飢乏

し。磐井より南郡宗任が誨に依つて、官軍の軍車武具兵糧車小荷駄を遮り奪ひ取り、往反の人物を剝取る。之に依て將軍源滿信に兵士千餘人を分遣し、件の奸類惡徒を追討しむ。其聞あるに由つて、賊徒みな逃入りにけり。其跡に敵なきを窺ひて、又栗原郡磐井郡仲村の地に入て、耕作の田畠の稻禾を刈しめて、軍糧に給し充しめんとす。此の如きの間十八九日を経たり。營中に留る者六千五百余人なり。貞任等此由を風聞して云はく、官軍食乏く、四方に糧を求めて兵士四方に散じて、營内には小人數にて數千人には過ぎず。我大衆を以て襲ひ討たば、必ず之を敗らんと、九月五日、精兵八千餘人を率ゐて、天地を動かして襲ひ來る。玄甲は雲の如く、白刃は日に耀く。武則真人進んで將軍を賀し、祝して曰く、貞任謀を失せり。將に賊の首どもを頓て獄門に梟んとすと云ひて喜ぶ。將軍の曰く、今官軍分散し、孤營軍兵少し。敵大勢にて襲ひ來らば、是必ず勝つこと

を謀らば、我軍必ず負けん。而を汝は謀を失すと云ふ。其意如何ぞや。武則が曰く、官軍は客兵たり、糧食つねに乏し。敵は主兵たり、食糧つねに足れり。客兵一旦鋒を争ひ、雌雄を決せんと欲すと云ふとも、賊衆若し險を守つて進み戦はずんば、客兵常に食乏しく、疲れて久しく攻むること能はずして、或は逃げ散ずる者有て、却て彼が爲に討たれん。我常に之を以て恐れとす。而に今貞任等進み來て戦はんと欲す。是れ天將軍に福するなり。されば賊の軍の氣を見るに黒くして樓の如し。是れ軍やぶるの兆なり。官軍必ず勝を得んと云へり。將軍の曰く、子が言是なり。吾また之を知る。時に將軍武則に命じて曰く、昔勾踐范蠡が謀を用ゐて、會稽の耻を雪ることを得たり。今老臣武則が忠に因つて、朝威の嚴を露はさんと欲す。今日の戦に於て身命を惜むことなかれ。武則が曰く、今將軍の爲めに命を棄つると鴻毛よりも輕し。寧ろ賊に向つて死と云ふとも、

敵に背いて生ることを得ず。此に於て軍陣を置ること常山の蛇勢の如し。士卒奮呼び聲天地を動さん。兩陣相戦ひ鋒を交へて大に戦ふ。午より酉に至る。義家、義綱等、虎視鷹揚し親ら手ら戦はん爲、甲の緒をしめ弓とり直し、鎧を合せ將を斬り旗を抜く。貞任等叶はじとや思ひけん、遂に以て敗北す。官軍勝にのつて雲霞の如く群る敵陣の真中に響を双て駈入りかけ敗り、馳せちがへ驅つ返しつ、鋒より火烟を出し、大に勇を振うて戦ひけり。眞先手に進む敵七八騎切て落し、十騎計りに痛手負はせ、是にても慊らず、貞任が旗本ちかく撃つてかゝり、貞任を討つて取らんと、面もふらず切て蒐れば、貞任が郎等かけ隔てんと防げは、義家、蜘蛛十文字、縦さまに切り横さまに拂へば、鎧武者の胸中をさき離せば、良あつて二つに分れて倒れける。敵味方これを見て借も切たり切ものかな。希代の劔やと眩さけり。此太刀と申すは、近代の名人月山と云ひける鍛冶治ひ出し



たる太刀なり。此勇力に撃たやまされ、當るを幸ひにはらめかいて北を追ふ。賊徒磐井河に迷うて或は津を失ひ或は深淵に溺る。暴虎憑河のたぐひ襲ひ撃て之を殺す。戰場より河邊に至るまで射殺しける。奥方の賊徒ども百餘人、うばひとる所の馬三百餘疋なり。將軍武則に語つて曰く深夜暗しと云へ共敵賊の氣緩せし、必追つめ攻べし。今夜賊を縦せば、明日必ず振ひ働かんと仰せければ、武則精兵八百人を率ゐて暗夜にたづね逐つて勞れを攻むる戦ひを事とし、敵に息をつかせず逐つかけ行きけり。將軍は本陣の軍營に還り、且つ士卒に酒食を饗應たまふ。且つ兵器武具馬具弓矢を調へ増給ひ、みづから軍中をめぐり、手負たる士卒共を治療し保養せしめ賜へば、戰士共感激餘り有て曰く、是士卒と共に死を同うし士卒と共に樂みを同ふし賜ふ所也。君一日の慈仁の御心、我百年の身を惜まらずと皆言ふ。意は恩の爲めに使はれ、命は義に依つて輕し。今將軍の爲に死すと云ふと

も恨みず。彼鬚を焼き膿を啖ひ疵を吮ふ大將よりも勝れり。去るほどに武則等を運し、敢死の侍五十人を分ち、偷に西山より貞任が軍中に入り、俄に烽火を擧げ松明をとぼさしめ、其火の光を見て三方より聲をあげて攻戦ふ。貞任等不意に出でられ、思ひよらざる術なれば營中擾亂し、賊黨あどろき騒ぎ周章めき同志戦し、自ら互にうち戦ふ。賊徒死し傷つく者甚だ多し。遂に高梨の宿並に石坂の柵をもすて逃て衣河の關に入る。歩騎迷うて或は巖に放たれ、谷に墜つ。三十餘町の程斃れ亡ふる人馬宛も亂麻の如し。肝膽地に塗れ荷賦野を潤す。流るゝ血桶を流し賊徒の死骸一堆の山となる。武則が軍功人事のなす所にあらず。思へば八幡の神助也。實に帝釋と修羅と、比しも五月五日の戦ひに、帝釋うちまけ賜ひて須彌に登り、團扇を取つて四方を拂ひたまふ形勢、數多の勢と見えければ、修羅恐れて須彌より引退き逃逃ひ藕絲の穴の中に匿しも、斯やと思ひ合されけり。

多田五代記卷第八 終

多田五代記卷第九 目錄

- 衣河の關合戦並武則智謀附久清市助輕捷貞任が妻の事
- 將軍鳥海の柵に入りて敵の陣屋に酒有り士卒争つて之を飲まんと欲す。毒あることを慮つて之を制止する事
- 多田の御廟鳴動、貞任が一族滅亡の事
- 貞任最後合戦の事
- 千世童子が事
- 則任女房沈水の事
- 降参人の事
- 義家弓勢の事
- 貞任等が首京都に上る。人々恩賞に預る事
- 貞任が首を献る使者貞任が脛を梳り涙を垂る事
- 義家歌の事
- 頼義出家の事
- 大瀬三郎近宗發心の事
- 箕和道心往生並忠俊地獄に落つる事
- 永覺箕和五郎忠俊に値ふ事

多田五代記卷第九

多田兵部輯

衣河關合戦並武則智謀附久清市助輕捷貞任が妻の事

康平五年九月六日、將軍高梨宿も事故なく攻め敗り、此勢ひを以て、衣河の關を攻敗らんと謀り給ひけり。抑件の關は、素より隘路險阻、強秦峭函の固に過ぎたり。一人此險を拒げば、萬夫も進むことを得ず。彌樹を伐り、蹊を塞ぎ、岸を崩して路を斷ち鳥だにも翔りがたし。又添へ加ふるに霖雨晴るゝことなし。河洪溢して容易に攻めかゝりがたし。然して而も三人の押領使此を攻め敗らんと謀つて、武貞は上津衣河の道を攻めける。武則は關の下道を攻め行く。未のときより戌のときいたるまで攻め戦ふの間に、官軍討死する者九人手負ふ者八十餘人

なり。武則馬より下りて向の岸邊を見巡り、兵士久清を招いて命じて曰く、如何々々の兩岸に曲り木あり。彼條婆娑として河の面を掩ふ。汝輕捷にして常に飛超を好む。向の岸に傳ひ渡り忍んで偷に城に入り、火を放つて賊徒の陣屋を燒きたれば賊敵其營壘の燒起るを見ば、賊軍を擧つて驚き走らん。吾必ず柵の外より關を攻め破らん。清久が云く死生は公の命に隨はん。則ち猿猴の跳梁するが如くにして、彼の岸の曲木に繩を牽き葛を纏うて、三十余人の兵士を牽り同く越え渡ることを得て、即ち竊に藤原業近が柵に至り。俄かに火を放つて賊營を燒かんと云うて、岸柳に索を挽て、三十余人の兵を安々と引渡し、柵下にのぞみ、空を詠めて如何せんと思はれて居たりけるが、爰に亦遙のむきより大木屋の上に蔽けり。兵士の中に高木助市と云ふ士あり。汝こそと云ふに、一人此木に縁り屋根にとび下り、索をさげたり。思ひよりなき難所なれば、防ぐ兵もな

し。日は暮れつかた人影は見えず。爰にて三手にわかれ、三所より火を放つて燒立て、鯨波を作る。其聲山彦にこたへ天地を轟かし、山川も崩るゝ計り夥し。諸陣雷同して度に迷ひ、爰かして防ぎ戦ひ討ち合ひ刺しちがふ。貞任は業近が柵燒亡さるゝに驚き、敵は早城内へ入りたりと周章き、關を拒がず落支度しけり。貞任が妻これを見て、我をば棄てたまふかと、袂にとりつゝ聲を揚げて泣きけり。貞任立ち歸り、實にさにはあらず。千世重見を侍らねば、若や敵の中へ紛れ入りたるやと取まされ候ふにと云ふ所に、千世童子見を來る。宜なるかな天下双びなき美少年、花を欺く紅顔、一人の花は千萬人の花とせんと、將軍も宥め免し賜はんとするほどの好男色なれども、武則が爲めに後に斬れける。彼の貞任が妻女兒童の形容は、昔楚項羽、漢高祖と天下を争ふこと年久し。其間を張り相戦ふこと七十餘度項羽みな勝ちけり、されども張良が謀にて、漢の韓信、彭越と

云ふ二人の大將、垓下と云ふ所に數萬騎にて項羽を圍みけり。夜更けて漢の軍兵の中に、楚の歌を四面に謠ふ聲しければ、項羽驚いて、漢みな己に楚を得る故に、楚の兵、漢の方に多きなるべしと思ひて、夜起きて帳中に酒を飲む。美人有り、名は虞と云ふ。幸ひに従ふ。已に落行かんと思ふに、彼の虞氏と云ふ寵愛の美人に名残を惜みけり。駿馬あり、名は騅といふ。常に之に乗る。是に項王乃ち悲歌慨して自詩を爲つて曰く、

力拔山兮氣蓋世 時不利兮騅不逝  
騅不逝兮可奈何 虞兮虞兮奈若何  
と歌ふ。數關ぬ。美人之に和して曰く、  
漢兵已略地 四方楚歌聲  
大王意氣盡 賤妾何聊生

泣數行に下る。左右皆泣て能く仰き視ること莫し。

是に於て項王乃ち馬に上つて騎す。項王涙を流して落ちられけるとなん。今の形勢も思ひ合されて、かゝる中にも鎧の袖をしぼりけり。遂に此柵も棄て、鳥海の柵に落行く。滿信久清等の爲に討たるゝ者七十餘人也。爰に散位平孝忠も云ひ甲斐なきことと思へども、人々我先にと落行くに誘引て同くつれ落しが、滿信を見かけて天晴よき敵なり、幸ひかな是に會て死んとて憤り、和殿は能敵なり、いざ組まんと推ならべて引組しが、滿信はとある木の根に蹶いて孝忠やがて上に乗首を搔んとする所に、滿信が郎等落合ひて終に孝忠討れにけり。同く七日關を破り瞻澤那白鳥村に至り大麻生野並瀬原の二柵を攻けり。然るに生虜一人得たり。彼申して曰く、度々の合戦の場賊の帥死する者數十人。是も衣河關敗れたると聞えしより城を捨て、落しかば、官軍入り替る。同く八日に首百七十級陣の前に並ぶ。中にも散位平孝忠、金師道、安部時任、同貞行、金依方等也。皆

是れ貞任が一族驍勇驍悍の精兵也。故に首に札を付けて竿に並ぶ。是れみな傑出たる勇將也。

將軍鳥海柵に入りて敵の陣屋に酒有り士卒諍て之を呑んと欲す 毒有んことを慮て制止する事

同年九月十一日、鷄鳴に鳥海柵を襲ふ。行路十餘里程也。官軍未だ到らざるの前、宗任、經濟等柵を棄て走り、落ち行きて厨川の柵を保ちけり。將軍已に鳥海山に入り、暫く士卒を休め、人馬息をつがしむ所に、柵中の一屋に醇酒數十餅あり。士卒争つて之を飲まんと欲す。將軍之を禁制したまふ。其心敵賊毒酒を設置て、士卒を焔殺して疲れたる軍士を欺き軍に勝たん事の謀もやとの用心兵書等に見えたれば、將軍に法ある軍術と諸將是を稱す。然るに雜人共の中一兩人此を試みに飲みけれども害なし。而して後諸軍士之を飲んで萬歳と呼ぶ。

多田の御廟鳴動、貞任一族滅亡の事

同く十二日、貞任等鳥海柵に入しかど、官軍大勢にてなほ寄すると聞えしかば、此所にもたまりえずして兵を率ひ、厨川の柵に柵籠りければ、官軍はまた鳥海の柵へ入りかはる。爰にて士卒を休め給ふ。此時將軍武則に語つて曰く、頃年鳥海柵の名を聞いていまだ其體を見ず。今日御邊が忠節に由て初めて此柵に入ることを得たり。汝、我顏色を如何とか見るや。武則曰く、足下王室へ忠節有りて、天下を治めて天子の四海を平にして萬民を安せんと謀つて節を立て疾風に櫛甚雨に沐ひ甲冑に蟻虱を蓄へ、十餘年の間軍旅に苦み給ひて、天地の神明其志を助け、軍士其志を感ず。之に依つて賊徒潰走ること積水を決流すが如し。我只鞭を擁して相従ふ別れの軍功なし。但將軍の形容を見るに、白髮反

つて半ば黒して若し厨川柵を破り貞任が首を得ば、髮髮悉く黒く形容肥満し賜はんと云ふ。將軍喜びましくて曰く、いやとよ、汝子姪兄弟一萬余騎を率ひて大軍を發し、堅きを破り鋭を執り、自矢石に當り、陣を破り城を抜き、宛かも圓石を千尋の谷に轉すが如し。之に因つて予節を遂ることを得たり。汝功を讓ることなかれ。但白髮反て黒き事は、予が意之を然りとす。武則拜謝す。其より正任が居る所、和我郡黒澤尻の柵を襲うて之を抜き。射殺す所の賊徒三十二人、疵を被つて逃る者其員を知らず。又其より義家義綱を大將として、藤原友久、鎌倉の清正などに仰せ付られ、鶴脛比與鳥の二柵に向はす。是も又手痛さほどの合戦もせず、即時攻破り、又同く十四日厨川の城に寄る。十五日酉の尅に厨川壩戸の二柵をかこむ。陣を去ること七八町ばかり、夜もすがら是を守る。件の柵西北は大澤、二面は河岸三丈有餘、壁立道なし。大木をさり、路によこたへ、柵の上

に樓櫓を構へ、兵これに登り、河と柵との間に隙をほり隙底に劔を植ゑ、遠き者は弩を發して之を射る。近き者は石を落し微塵になす。適柵下につく者は沸湯をこぼし、是にそぐ。具足の引合せ小手のはづれより入る湯は彼の大焦熱地獄の賣も斯やらんと、官軍此れにもあぐんで時をうつす。雜女童男數十人、やぐらに登り、東にはやる雜歌をうたふ。其聲はなはださしくし。將軍立腹して、十六日卯の時に、軍始めて終日通夜相戦ふ。矢石雨のごとし。城も名城士卒も爰を専と、固く守つて防ぎければ、官軍死する者數千人、十七日にいたり、將軍士卒に命じて、汝等村々に入り、屋宅をこぼち來り、柵の下につむべし。又人ごとに萱草をかり、材木の中に投入るべしと仰せければ、下知にまかせこぼち運び蒔つむ事あたかも山の如し。將軍馬より下り、遙かに皇城を拜し、矢て云はく、昔漢の徳、未だ衰へず、飛泉たちまち校尉が節に應じて萬人渴を免れたり。今天威こ

れ新なり。大風老臣が忠を助けたまへ。伏して乞ふ八幡三所、殊には源氏我等が守り神多田満慶公、神風を出し、火をふいて此柵を焼くことをせしめ給へと深く誓つて、自ら火を放ち神火と稱す。此時多田の御廟や、震動し、こまの響の音しきりにして、東の方へ行せ給ふと覺えたりと神主等が日記に記しける。其音陸奥國にひびきけり。將軍これは正しく多田の廟所の鳴動なりと奇異の思ひをなす所に、たちまち神風おこる。煙の中に鳩あり。將軍これを再拜す。官軍射ける矢柵下の壁に衰毛の如し。とぶ火風に從うて矢の羽につきければ、樓櫓屋宅一時に災起る。城中男女數千人、聲をあげ歎き喚き煙にむせ目くらむ。官軍勝にのり、聲を上げせめかゝる。甲をさき刃をふるひ圍を衝て出て必死の合戦し、生んと思ふ心なし。此時官軍多く討る。將軍下知して曰く、圍みを開き賊徒の士卒を出すべしと一方を開きければ、賊徒大に悦び、名を惜む人は知らず我

は名より命こそ惜けれと戦はずして落行く。散位藤原經清も雜兵にまぎれ落ちんとす。近宗此口を奉行す。經清と見て引き留め生虜にしたなり。將軍の前に來る。將軍近宗を以て曰く、汝が先祖傳へて予家僕たり。而を年來朝威を忽諸し舊主を蔑如す。大逆無道也。今日白符を用ゐる事をうるや。白符は經清が私の敵と云ふ、赤符は國符也、國印有故に赤い。故に白符符と云ふ赤き朱印ありて金に替へけり否や。經清伏首して言ふことなし。將軍惡んでさびたる鈍刀を以て切るべしと仰せける。彼が痛苦の久しからんことを以てなり。漸く脛を打落しけり。

貞任最後合戦の事

爰に貞任は自殺せんと思ひ、かなたこなた驅廻り見る處に、未だ殘兵五十有餘あり、或は早く落ちたまへと云ふもあり。或は大半は君と一處に討死せんと云ひ、思ひ切つたる氣色なり。貞任聞て扱は神妙なり。人々いざ潔く合戦して最後の思ひ出にせんと云ふまゝに、生絹の直垂に緋威の鎧著てわざと兜は著る

りける。矢束を飽まで引かん爲なりけり。寄手まづかく攻よせ驅塞つて戦ひけり。城内にも安部家任同く爲家、藤原頼久、同く經光等矢ささを揃へて散々に射るにこそ、寄手遠計ためらうたり。爰に清原貞廣は品草威の鎧を著、木戸の口まで攻よせ是は清原貞廣とて官軍の内には名を知られたる兵なり我と思はん人あらば組や殿原とぞ名乗ける。貞任見て引儲箭所のしづまるを待ちて、ひやうと放つ。无ざんやな、貞廣が右の小脇を射とほし、矢尻五寸ばかり後へとほれば、かしてにだうと伏にける。二番についたる木津五郎が内背を二の矢にからりと射ぬさければ、是もたまらず倒れけり。貞任今はこれまでと五十餘人一處になつて、大瀬三郎近宗が二百餘騎にてひかへたるに、蒐つて組て落るもあり、或は互に射落さるもあり、何隙ありとも見えず。此時にこそ官軍多く討れける。貞任さつと引て見てあれば、十五人討たれて三十五人になる。一息ついて、いかに

云ふまゝに、清原の武則が五百餘騎にて群り立たるを目がけ、鷲鳥鳥を見ておとすが如く、つき碎んと、まつくだりに喚てかゝる。武則が五百餘騎蛇勢につくつて、一人も泄さず、打とらんとしたり。元來死ぐるひの事なれば、何かは以て臆すべきなれば、中の手さきに打てかゝる所を首尾共に相よつて中につゝんで散々に戦ひ、寄手大勢とは申せども、思きつたる三十五人、命を棄狂ひければ、備へくづれて群立たり。貞任身方をかへりみれば、十四五人にはすぎざりける。今は是までと貞任、自ら太刀をぬいて蛛手にかけて狂ひける。大力の大男、太刀の寸はのびたり、命をかきりの切死になれば、花に風の吹くがごとし。通りし筋はなびさけり。寄手貞任と見るよりも、鉾を以て打倒し、大楯にのせ、六七人して將軍の御前に昇く。其の長六尺あまり、腰の圍み七尺五寸、容貌魁偉、皮膚肥白なり。將軍罪を責む。貞任一面して後頭を刎げり。歳三十四とぞ聞え

ける。其の弟比浦六郎重任も首を切る。宗任は、搦手の堀へ入り、深泥に投じ逃脱れて、何地へともなく落行けり。

### 千世童子が事

貞任が嫡子千世童子、生年十三歳とぞ聞えし。容貌美麗なりしが、赤地の錦の直垂に小櫻威の鎧を著、常に父と共に戰場に出てありしが、今度も柵の外に出て戦ふ。驍勇祖の風あり。將軍これを哀み武則に仰せて、あれ生捕て進せよ、宥て命助けんと言へり。武則諫て云く、昔し唐土に勾踐夫妻とて二人の國王、常に國をあらそひ會稽山の麓にて戦ひ、終に勾踐打負け生捕られ命をつながん事を歎きしに、夫妻あはれみ本國に還しければ、其の恩を忘れ、二た度び兵を起し、夫妻を打とり、會稽の耻を雪めしとなり。將軍小義を思し食して、彼の巨害のため忘れ給ふなど、ながしく云ひければ、將軍額

て終に切せけり。城中の美女數十餘人、皆綾羅錦繡を着、烟にまじへ歎き悲む。是をとつて軍士に給ふ。淺猿くも恥しかりける。

### 則任の女房沈水の事

同月十七日柵破るゝ時、安部の則任が妻は三歳の男子をいだき、人々の女房の耻にあふを見て則任に語りて云はく、君今日討死し給ふべし。自らあとに残り救かんと罪深かるべし。縦ひ一旦のがれ出たりとも、敵の手に渡り思はざる耻にも逢ならば悔めども益は候まじ。君の前にて自ら命を捨てん。君もし命のがれ給はば、我々が後世弔ひ給へと云へば、則任さゝ我こそ討死するとも、御身はあとに残り、あさなき者をも見をだて、我が後世をこそ頼むべきに、思はざる御事なりと俱に云ければ、女房さゝあれ見給はずや、人々の妻女達の目の前にして、耻を見給ふさへ憂てしさに、相かまへて制し給ふなど、かく詠

じける

今ぞしる涙にぬるゝ衣河

身はながるとも名をば流さじ

ときこへしが、忽ち子を抱き、深淵にとび入りけり。生年十八とぞ聞へし。聞く人烈女なりと、譽めざるはなし。是を見ける則任が心の内、幾許かは悲しからん、せめて死骸なりとも今一度見んと、且し待けれど石を袖に入れければ深く沈しやらん、又もうさあがらず、其の跡の驗としては、青み渡りし水の面に沫一つ二つうかみけり。楮は死にけると、其のまゝに顛泣さけり。則任つゞいて入んとて石を拾ひ袖に入れ、すでに飛んとする所に、向の方より僧一人來りける。則任見て好むふしなり、最後の一大事をもさゝ心安く沈んと立より袖にとり付き、しかじかの事にて餘波をしき妻、最惜き子、只今水に沈み侍る、我つゞいて入らんと存じ侍る。斯様の愛河の水に溺れ侍る悪人の悪道をまぬがるゝ事ばし、

一句御示し給はり候らへと涙と共に申ければ、僧うちさゝ、痛しの御ことや左様の有難き法門さまゝ侍れども、去ながら、先立たまふ人々を不便と思しめし一つ蓮とも思ひ給ふならば、身命を全して經をよみ念佛し給へ、諸共に身をなげ玉ひなば長く生死の海に沈み苦海の波に漂ひ玉はんれば、中々無用に候ふ、分段輪廻の境に生をうけ、何者か死滅の愁を離るべき、佛だに遁れ玉はず、況てや愚人をや、始て驚き思し召すべきにあらず、夢幼泡影のかりの世とだに思へば、強ちに慕ふも、かへつて罪深く侍る、幸ひ愚僧まいり逢ふこそ、目出度けれ、髪を剃りまいらせんとて、剃刀など取出し急ぎ、とくくゝと勸め玉へば、則任も心弱くなり、さらば仰に従ひ候はんと、流るゝ水にかみ洗ふ、落る涙流る水、何れとわきて知がたし。頓てかみをそり落し、我が庵室に具しにける。其の後宗任等、降参の由をきゝて、則任法師も出にけり。人皆云く二世までと契り

し妻いとをしき子、目の前に水に入しを見ながら、幾程命のをしければ出家となるの見苦さや、人と生れては死すべき時に死せざれば、他人の嘲を招ぐとは此の人に限るべからず。

### 降参人の事

貞任が伯父、安部爲元、貞任が弟家任等首をのべ降参す。其の後又數日を經て九人、將軍の御陣に来て歸降し命を助け給へと歎く、將軍うち案じ給よ。真人申けるは、命ばかりは御免したまはり候へ、某も内縁につき少のよしみも侍れば、強に歎き申も不便に候ふ御あづけ給はり候へと、恐入つて言す。將軍宣ふ我れ思ふ旨あり、汝がのぞみに任す、必ず悪く仕ふべからずと仰せける。此の由宗任に語れば、悦ぶことかぎりなし。宗任宥されたと聞へしより、此彼より出て來る。同く十二月廿七日の國解に曰く斬獲賊徒安部貞任、同く重任、藤原經清、散位

### 義家弓勢の事

平孝忠、藤原重久、散位物部維正、藤原經光、同く正綱、同く正元、歸降者の安部宗任の弟家任、則任(出家して歸降す)散位安倍爲元、金爲行、同く則久、同く經永、藤原業近、同く賴久、同く遠久等なり。此の外貞任が家族遺類あることなし。但正任一人未だ出て來らず云云。僧良昭亡て出羽國に至て守源齊頼の爲めに生虜れて來る。正任初め出羽光賴が子、字は大鳥山太郎賴遠が許に隠る。後に宗任歸降の由を聞て、出て來り了ぬ。斯りしかば、出羽、奥陸の國、悉く平治せり。

合戦の際、義家甲士を射るごとに、皆弦に應じて死ぬる者の數を知らず。後日清原武則、義家に申けるは、君の弓勢を見侍ん、一矢射て見せ給へ。奥方の武士等、常に鳥なき里の蝙蝠とかやにて、廣言

吐ちらす殿原に見せ申んと、堅甲三領打ち重ね、木の枝に掛くる。義家許諾し、弓矢を番ひ放て三領残らず射とほす。武則大に驚き言すやう、これ神明の變化なり。さらに凡人の堪る所にあらず、武士の爲めに、歸伏せられ玉ふ所、理りやと聲をあけ嘆にけり。これを見ける武士等云ことなく、あつと云てぞ感じける。其の弟義綱が、驍勇騎射、其の兄に亞ぐ、是れ又世人稱譽嗷々たり。

### 貞任等が首を京都に上る人々

#### 恩賞に預る事

同六年二月十六日源頼義朝臣の使者、貞任、經清、重任等が首三級を持せ上洛す。京都の貴賤壯觀を爲して車は殺を撃つて望み、人は肩を摩て見物しけり。同く二十五日除目の間だ勳功を賞す。朝義朝臣を拜し、正四位下伊豫守と爲す。嫡子左衛門尉源義家を従五位下出羽守と爲す。次郎源義綱を左衛門尉と

なす。清原武則を頼義朝臣の申しによつて、従五位下鎮守府將軍となす。首を獻ずる使者藤原季俊を左馬允と爲す。物部長頼を陸奥の大目と爲て、賞を行はる。其の後頼義上洛して大内に参内す。君御感あつて、粉骨比類なきの旨仰せ下さる。賊に武將の榮、士帥の面目なりと、人皆うらやみける。此の合戦永承六歳より康平五年に至り十二年の間だなり。頼義久しく、奥州に在陣して朝敵を平ぐるにより、其の軍功先代にも例なければ、威勢關東にあらはれ、東八ヶ國の大名、此の時よりして、源氏の譜代被官となる。

### 貞任が首を獻ずる使者、貞任

#### が首を梳つて涙を垂るゝ事

首を獻ずる賤夫の使者は、貞任が從者の降人なり。貞任が頭の髪を梳り揃へて、實際に備んと欲するに揃なき由を申す。使者季俊、長頼の曰く、汝が私に

用る櫛あらん、其を以て之を梳づるべしと云へば、  
擔夫則ち己が櫛を出して首を梳る。涙を垂れて嗚  
咽して曰く、吾主君貞任存生の時、之れを仰ぐこと高  
天の如し。其の時吾垢づける櫛を以て、添くも貞  
任卿の其の髪を梳ることをせんやと云て、悲哀して、  
梳るに忍びず、衆人上下の人々皆涙を落す。呼  
擔夫と云へ共、忠義尊敬の心人を感じしむるに足れ  
り。身方の將、敵に負れば復又此の如し。所謂人を  
以て言を棄てずとは、今此の首を擔ひ來る賤丈夫  
たりとも、禮義と言とは棄へけんや。されば人々  
具足固々圓性の仁義禮智信あつて、時として出るを  
知べしとは古賢も言へり。宜なるかな、かの賤擔夫  
が涙を垂るゝことや。

### 義家歌の事

康平六年の春のことなるに、八幡太郎義家は父と共に  
奥州に御座在るが、歸京の日も定めぬ。亦もと思ひ

しよりも、知れざる名所あり、名にあふ名所舊跡を尋  
んとて屋を出て玉ひ、あなたに吟じ、こなたに嘯さ、  
遊歴する處、狂蝶の花を尋るに異ならず。されば名  
に流れたる奈古會の關と云ふ所に至る。三月半ばす  
ぎなんと侍りし頃、山路の花所々散かたなるに折  
節、俄かに心なき、山嵐吹て空もかき曇るほどに花  
の散りてければ

吹風をなこそその關と思へども

道も瀬にちる山ざくらかな

と詠じつゝ、日すてに西の山にかたひけば、駒にと  
騎りいそぎ家路に歸りける。歸京の後、院の御所  
において、東路の名所見たりやと、御尋ね侍りしに、  
なこそその關にて花の散つもありたるに、山をろしの花  
吹きちらすと見候ひて斯仕り候と、奏しければ、汝  
其の軍たちの關しき紛にもかゝるやさしき詠歌をな  
ん仕りけるかと、大に御感に入仰せ下されける。

### 頼義出家の書

伊豫守鎮守府將軍源頼義朝臣は、純友將門よりも  
猛かりし貞任を退治して、御悦びは、かぎりなし。  
是れ誠に偏に石清水八幡、ことには多田満慶公の  
神力にて伐つことを得たり。去るに仍て、丹誠を  
抽んで御祈の爲め多田の廟所に参詣して、神力  
の著るしさを感じ、いよく信心を興し源氏の末、  
憑もしくぞ思はれける。満信宅にして、二三日御  
逗留ましくけり。後下向あつて奏聞して、多田院  
殿満慶公の御影堂を造營し玉ふ。金銀珠玉を以て彩  
り飾り、其の結構奇麗言ふばかりなし。其の外の堂  
社にも修復を加へ給ひけり。同じ歳に、又相模國由  
比郷の山をうがち、瑞籬を建て、康平六年八月に、  
山城國男山に石清水を勧請し鶴岳と號す。これ又社  
殿金をちりばめ馬場には砂をしき、緋の玉垣色めき  
て、峰の紅葉とあらそへり。神女日夜に再拜して、

祭禮ことに新なり。頼義謂らく功成り名遂て身退く  
は天の道とて世を遁れんも此の時なりと、義家に世  
を譲り、終に發心して、伊豫入道頼義とぞ云ひける  
貞任討ちしきさみ人の首を切るに凡そ一萬八千餘  
人とぞ記せり。此の罪業我一人に迫れり、何んとし  
てか生死を免がるゝことを得んやと、深く罪を恐れ  
涙を流し念佛して居玉ふ。常は又庵室に入りて至極  
甚深微妙のまどの内には、眞理衣裡の玉をみがき後  
夜晨朝の鐘の音には、生死の眠や悟し、深省を發し  
いと頼しく思はれける。彼の死ぬる者の屍を集めと  
り納め寺をつくり甘納寺と號し常に念佛たゆる事な  
し。此の吊にこたへて、敵も味方も、修羅の苦患  
をまぬかれ、邪見の劔をすて、仇をば恩にて報じ、  
未來には實の友ともならんと賢くも有難かりけり。

### 大瀬三郎近宗發心の事

伊豫入道殿の郎等に、大瀬三郎近宗は、双びなき剛

の者也 數度の軍功によつて、丹後の國守となつて、家富心に蒐る山の端も、有まじと人皆思ひけるに、頼義公に具して、貞任を攻めける時多くの者を殺したりける罪を怖れて、常は心を澄して、念佛をぞ申ける。斯て年月を過すほどに、然るべき善智識にもや侍りけん、日比つれたりける妻さしもの事も無かりけるに、氣悪く墮立ちて、心の煩夥しく立ちあがりけるを見て、手づから本結をさきり、所々へ行き念佛し侍りける也。善惡につよき心なればにや道心かぎり無くぞ見へ侍りける。あちこちさそらへ行きけるに、僅かなる草庵を結びて賢く居を卜てけり。著たる麻の衣のまとふなる外には露ばかりも持たる物も侍らざりける。明暮の食事は人の憐にて、兎角してぞ過ぎける。或時人の飯をもて行きたれば、今日よりも、五日差な入れ給ひそ、少つゝましき事侍ると云、抱なしと事受けて約束の儘に、五日はさしも入れ侍らず、斯て五日のすぐるや遅しと六日の朝

かの庵室に超て見れば、西にむかひ往生しけり。其の姿生きたる人の如く、誠に有難かりける。人皆よりて結縁しけり。或人これを聞て涙かき敢ずして仰せられしは、哀有難き事に侍らずや、理りを辨ふる人すら此のかせきは去りやらぬ事なるを思ふらん。量なき身にも嘆息をいとひて住狎しさかひを捨て頓く忍入りつらん、意せば喩へもなくぞ侍る。大方隨心淨良淨土とも説かれ侍れば、心に澄みなば何の所も淨土ぞかし。澄みがたきには、惡ささかい惡き友に遇ひなんには何かは亂れざるべき、我が嘆息を起さじと念じ侍れ共、人の故なく腹立ちには、又我も發ることこそ。然ば是を振棄て、知らぬ所にも行べきを、心弱さの願みてこゝ住みよしと思はねども、我とさせざる思ひ失せやらて、離れえぬ思なり。鈿心なれば何とてか佛の御心にもとづき奉るべきと、其の事をさし思ひやれば只今もさる心侍るは、縁起難思の力やらん最尊とくぞ侍ると感涙せられける。

箕和道、心往生並忠俊地獄に落る事

箕和次郎と云ふ武士あり、是れも貞任追討の時、將軍にしょくし數度の粉骨をつくして、軍勞比類なく敵を多く殺しけり。其の罪を怖れて遁世し、箕和道心と云ひけり。此の道心が造れる堂は、伊豫入道殿の家向ひ、さめらじ西の洞院也、箕和堂とぞ云ひける。彼の堂にて行ふあひだに、昔の罪をくひ悲みける涙、板じさに落ちつもありて大床につたはり、大床より餘り流れて土に落る迄なん泣ける。其後語て云く今は往生の願うたがひなく、遂なんとす。勇猛剛情なる心の發る事、昔衣河の館を落さんとせし時に異らずとなん云ひけり。後實に終り目出度て往生したり。斯る猛き兵の心に後世の罪を懼れ世をのがるゝ意ばせ有難ぞや。陣に出て人を殺害するは武士の職なり、王命也、主命なり、恣の殺生にもあらず、去とて慚愧

の心なくば、地獄の報ひ疑ひなからんか、然るとて卑下すべからず深く信を起して、勉行へば往生する事はの如し。此の箕和道心の子に、五郎忠俊とや云者あり。是は終に善智識もなく、懺悔の心も起さざりければ、罪ほろぶべき方なし、重き病をうけたりける比、向に住ける女房の夢に見るは様々の姿したる恐しきもの數も知らず、其のあたりを打圍めり。如何なる事ぞと尋れば、人を擲んとするなりと云ふ。かく計ありて、男を獨り引立て行前に札さし揚たるを見れば、無間地獄の罪人と書たり。夢心に其の地獄にはいかなる苦みが侍ると問へば、委細に語ると覺て夢さめて後に人をして尋るに、この曉はや失給ぬとなん云ひける。淺猿と云ふ計なりし。

永覺箕和五郎忠俊に値事

後三條院の延久三年の春の始より、永壽阿闍梨の御弟子永寛と云ふ僧東路を修行して歸りがけに、駿河



國富士のすそ野に至る。折りしも九月半のことなれば、麓は千草みだれあひて虫の聲とりく身にしみて、悲しきも面白きも秋は此野に止まりけれ。はるく嶽を見上れば、雪につゝめる八葉の峰、蒼天に抽て崑崙高ければ、青池に白蓮の生るに似たり。紫の雪山の腰をさしるは來迎引攝の時節も斯やと最有難し。薄に結ぶ白露、はなにしあふ宮城野にも、遙に勝り。花の色々咲匂て言ん方なし、猶も奥深く入見まほしく覺えて、細き道をたどく行程に俄に日暮ぬ、行ん方なく覺えて如何せんと思ふ所に、火の細く見えしを遙々と尋ねより見れば、片折戸なる内に、火ばかりありて人なし。恐しき餘りなるに依つて、内に菟け入りて見るに、法華經の巻かけたるあり。永覺嬉しくも、有り難く思ひて讀みけるに、俄に雷なり風吹ささはぎ、時雨降りて身の毛も悉く堅ち上がる程怖しるさに、何かは知らず山も崩るゝ計りの聲して、物を追ひまはすと覺ゆる所に、良あつて、牛

の頭又は馬の頭の如くなる怖ろしき者、色々の手鉾ひつさげ、六人して一人の男を引立て來て云はく、汝一生に一善をもなさず、常に殺生を事とす、其の外惡業多くあるによつて此の如きぞ、他人の責るにあらず、汝が罪の汝を責るなり。今我等をうらみ悲むは愚なり。汝が竟に落つべき地獄は更に隙なきが故に、無間と名づけ、今の苦患は譬へば九牛の一毛なりと云ひつゝ、様々の呵責勝て算るに足らず、永覺は怖さの餘り、壽も消えて夢のごとくになりぬ。其の間はなはだ久し、夜もすでに明けなんと、おぼゆるに野寺の鐘うちひびきければ、彼の怖き者は去つて男ばかり、草村に泣きうだき居たり。怖くも哀に覺えて立ち寄りて見れば、年來見馴れし、箕和五郎忠俊也。互に夢の様におぼえ、何としてか爰にして角愛目を見玉ふや、五郎苦げにして云はく、我は過ぐる七月に身まかりたりと覺え候。然るに我一生物の命をとつて樂みとし、異には民を哀む心な

かりしに由つて、彼等が爲にとらはれて、此の所に來れり。思へば一歳永壽阿闍梨に逢ひ奉りし時、御守り本尊の地藏菩薩を一拜し奉り侍りしが、此苦みの内にも、彼の菩薩と覺へ、御助け度々なり。今又貴僧に値ひ奉るも、然るべき菩薩の御助けかと、嬉しくこそ侍る。此の由を妻子に御語りそへて彼の佛を供養し、我を助くべきと仰せ給ひ候へや。是を形見にとて一尺八寸計りなるさしぞへを、永覺に渡し立つよと見しが、永覺計り草村に忙然として御坐ける。哀さの餘り經よみ念佛申しかたのごとく吊ひつゝ、形見を袖にをしつゝみ、泣くゝ里にぞ下られる。

多田五代記卷第九 終

多田五代記卷第十目錄

- 頼義入道殿往生の事
- 眞衡秀武不和の事
- 秀武清衡家衛等を憑む事
- 源義家奥州下向の事
- 清衡家衛敵味方と成る事
- 家衛將軍を追ひ返す事
- 金澤合戦源滿秀箭に中る
- 並高木、滿秀の勘氣を蒙る事
- 新羅三郎義光奥州下着の事
- 源氏の陣引き拂ふ事
- 將軍伏兵を知り給ふ事
- 將軍剛臆の座を定め給ふ事
- 源滿秀軍氣を見る事
- 附龜次鬼武勝負の事
- 金澤合戦の事
- 金澤城落つる、武衡家衛一家亡ぶる事
- 義家國解を捧ぐる事

多田五代記 (卷第十)

多田五代記卷第十

多田兵部輯

頼義入道殿往生の事

伊豫入道頼義公は、一生殺生を以て業とし給ふ。さきに征東の任にあつて十餘歳の間、只鬪戰を事とし人の首をさきり物の命をたつこと、勝けて計へ盡すべからず。其の後堂をたて佛を造り深く罪障を悔い多年念佛し、終に以て出家す。眼目の後多く往生極樂の夢あり。定めて知る、十惡五逆なほ迎攝をゆるさる。何況やその餘をや。此の一兩を見大に歡喜し給ふ。多年すぎて後遠例し給ふ事一兩日僧を請じ西に向ひて念佛し、永保二年十一月十三日竟に大往生を遂げ給ふ。御年八十八時に紫雲宅に懸るとぞ。

眞衡秀武不和の事

永保三年白川院の治天に當つて、奥州六郡の内に清原真衡と云ふ武士あり。荒河太郎武貞が子、鎮守府將軍武則が孫也。この真衡が一家は昔出羽國仙北の者なり。康平年中に前の伊豫守源頼義朝臣、安部貞任等を追討の節、武則一萬餘騎の兵を率ゐて、味方に與力するによつて、貞任宗任等の大敵を討ちとる。頼義朝臣其の軍功を感じて、奏聞をとげ、武則を陸奥國の守護とし給ふ。かゝりしほどに武則が子孫六郡の主となる。此れによりて真衡が威勢父祖に勝れて、肩を双ぶる武士なし。心正直にして癖事行はず、國宣を重くし朝威を忝うす。此れにより東國の内、兵革長く治まりぬ。真衡子なき故、海道小太郎成衡と云ふ者を子とせり。この成衡に妻をとるに、當國の武士は一家ながら從者となれり。隣國にて是を尋ぬるに、常陸國多氣權守宗基と云ふ武士あり。此の娘頼義朝臣の子を生む。昔頼義朝臣、貞任宗任を退治の折節、旅のかり屋の内にして彼の女に

あひ、女子一人を生めり。祖父宗基これを請けとつて養ふこと淺からず。此の女良將の子なればとて迎へて成衡が妻とす。新しき婦を娶せんとて、當國隣國そこばくの郎等ども日ごとに事をせさす。陸奥の習ひ地火鑪ついでとなん云ふなり。諸々の喰物を集むるのみにあらず、金銀絹布馬鞍やうの物まで、人におとらしと持ち來つて捧ぐる中に、出羽國の住人、吉彦秀武と云ふ猛者來る。これは武則が母方の甥又は甥なり。頼義朝臣貞任を攻めたまひしをり武則一家を率し、當國に來つて桑原郡にて諸陣の手分けを定めし時、秀武は三陣の頭に仰付けらるゝほどの者なり。然りと云へども真衡が父祖に勝れて、一家の輩みな恐れ重んずるによつて、秀武も同じ家人の内に催されて、朱の盤に黄金を塊高につみ、目の上に擦げて庭上に跪き居たり。真衡ある入道法師と圍碁を打ち入つて、數尅うつれども目も見かけず。秀武老の力疲れて苦しく、心に思ふ様、我は

正しく一家の者なり。果報の勝劣によつて、主從の振舞をなす、昔周公旦は髪を洗ふ時、訴人來れば、髪を握つて逢ひ、飯を食する時賓客來れば、哺を吐いて對面し給へり。是は異國、近き我朝にも源頼信公、一年賀茂次郎義綱御誕生のとき罷りたるに、奥に召して禮義あつく對面して饗應たまはりぬ。又當時八幡太郎殿こそ、名大將軍と云ふはなんぞや。訴人の者あれば直に召して、身やせ疲れたる者には、仰せて飯をあたへ、其後委細に尋ねさせ給へり。推參なる真衡が體や。身不肖なりと云へども、我も亦一家なり。禮儀を存せば庭上に下り迎へて袴の腰を結びかけても早く對面致すべきに、老の身を屈めて庭に斯く跪きたるを、目も係けず。無禮と云ひ、情なき振舞返す。奇怪なり。只一打ちと太刀の柄に手をかけぬ。又思ひ出すは我今、年老て、いにしへに變りしを忘れたり。爰にて本意果さんこと成りがたし。所詮無禮なる人に誂はんより、爰を勘忍し本

國にかへり、やがて義兵を起し、无禮なりつる真衡成衡等に思ひ知らせ、今の耻を雪めんと、郎等共の聞く様に獨言して、金をば庭上に投げちらし、俄に立ち走り門の外に出て、そこばく持たせ來る長櫃の進物共打ち散らし、酒肴飯糧は皆從者に與へつゝ、させなが取り出だし著て、郎等共に物の具せさせ、出羽國へはせ歸りける。真衡碁を打ち果して後、秀武を請す。しかくの體にて、罷りぬると言す。真衡大きに嘆り、忽ちに諸郡の兵を催し、秀武を討たんと云へば、精兵、雲の如く集る。ことわりや六郡の内は言ふにおよばず、隣國の内にも殘る者なれば、楯を荷はせ旗をさし、山野忽に人馬の伏しどくなる。日比あだやかに目出度かりし六郡あわて男女山谷をもとめて逃げはしる。真衡も馬に打ちのり、秀武を討ちとらんと、鞭と鎧を打ち合せて、急ぎける。

秀武、清衡家衡等を憑む事

秀武は己が本國に還つて、つくづく案ずるに、我は小勢なれば、手痛き程の合戦も決せず、真衡が爲に討たるべし。去れ共遺恨を遂げず屍を曝さんも口惜かるべし。如何せんと進退煩ひ居たりしが、陸奥國の住人清衡家衡等を語らはんと思ひ出だす。此れは鎮守府將軍武則が子なり。兄を武衡と云ひ弟を家衡と云ひて父の跡を相嗣ぐ。貞任が黨類に、わたりの權太夫藤原經清と云ふ者あり。此れは儀藤太秀郷が後胤なり。其の子に清衡家衡と云ふ者あり。經清貞任に相具して討たれに後、武則が子太郎武貞、經清が妻を娶つて家衡を生ませたるなり。清衡も母の嫁する時、來て武貞が子と成りて其跡をつぐ。然れば清衡と家衡とは父かはりて母一つの兄弟なり。秀衡此の二人が許へ使者を馳せて云ひ送るやう、真衡に斯く常に家人の如く持成されけるは、无念に思ひ給はずや。今度、成衡に妻とる悦びに、某もまかり、庭に金を捧げ敬拜してありしを、見も入れざ

りしかば、奇怪に存じ立ち走り罷り歸つて侍る。定めて近日寄せ來るべし。我れ防ぎ戦はん。其の跡にて、真衡が館におしよせ、彼の妻子をとり、家をやし拂ひ給へ。時すてに至れり。真衡妻子をとられ住宅を焚きはらはれぬと聞かば、我雪の頭、真衡にえられん事、さらに愁ふる事にあらず。我がのぞみを果し給はれと云ひ送る。清衡家衡も内には妬みうらみければ、幸の悦びをなし、真衡押しよすると聞かば、やがて真衡が館其の跡へ廻つて攻むべしと、牌し合はせ、真衡が館へ襲行く道にて、伊澤郡白鳥村の在家四五軒を、かつく焼き拂ふ。真衡又これ聞き、道より引かへし、清衡家衡と先づ戦を決せんと馳せかへる。清衡家衡が曰く、九牛が一毛なり。真衡が勢には當るべからずとて、是も軍を引き入れけり。真衡兩方の戦をせざりしかば、大きに嘆りて、なほ兵を集め、秀武、清衡、家衡等を、誅罰すべしと、軍の相談し、必死命さける。

### 源義家奥州下向の事

同年秋七月三日、東國靜謐ならざるの由、京都に聞こえしかば、是を治めんとて出羽守源義家朝臣を、陸奥守鎮守府將軍に任じて、俄に下り給ふ。父頼義朝臣入道し給ひて後は、其の跡を嗣いで京都の警衛たり。頼義入道貞任追討の刻、義家武勇拔群なりしかば、鬼神の働なりとて、恐れ重んずるに仍つて穩ならしめんため、白河院の御宇、永保三年の秋七月三日都を立つて、道々見めぐりて、秋の末、奥州に下著あり。真衡も合戦のことはさしあき、新司を獲應せん事を營む三日厨と云ふ事あり。日毎に上馬五十疋なん引さける。其の外様々の珍物、金並に鷹の羽、水豹、絹布の類を捧げ、道橋を作り、さま／＼持て成し終りて、扱て我宅にかへり、なほ遺恨を果さんと兵を分け、我宅をかためて、我身は前のごとく出羽國へ出陣す。真衡出羽へ越えぬと聞きて、

清衡家衡又前の如く襲ひ來つて、真衡が館を攻む。此のをりふし、國司の郎等に參河國の住人兵藤太輔正經。儀仗助兼と云ふ者、真衡が館ちかく巡見して通りしが、真衡が妻、使を以て言す。真衡秀武がもとへ行き向へる間に、清衡家衡押寄せ來たれり。すでに戦に罷りなり侍る、然れども士卒多くして防ぎ戦ふに其の恐れなしと云へども、但女人の身、大將軍の器ものにあらず。來り給ひて大將として戦のありさまをも、國司公に申さるべき由云ひこせり。正經助兼これを聞きて、主にて侍る義家の下知なくて、私には、えこそ參らめと終にことははず。真衡方には情をしらぬ無道仁なりとぞ云ひける。

### 清衡家衡敵味方と成る事

正經助兼等歸つて將軍へ申し上ぐるによつて、義家朝臣の使者、清衡家衡が方へ行き、何事に由つてかゝる亂を企て申さるや。存する旨あらば、其の子

細を言上すべし。但承引なき方においては、罪科たるべしとの御使なりと云ふ。清衡對面して畏り存じ候と云ひかへす。家衡立腹して、昔より今に至るまで、侍の遺恨を國司に申すことやある。御身は何方までも参り給へ。某に於ては参るまじ。清衡が云ふ尤もさは有れども、眞衡において、我等身に當てたる敵にもあらず。ことに當將軍は我等が先祖に恩あり。今日より將軍へまゐり、眞衡と和睦せん。家衡聞いて、いや御身はまゐり給へ、家衡は行くまじ。清衡重ねて云ふ、家衡朝敵と成り給ひなば清衡こそ敵よ。重ねて對面いたすまじと、兄弟左右にひきわかれ、清衡は將軍の御陣に出てければ、家衡は己が國、出羽へかへつて合戦の企より更に他事なしと聞えし。眞衡が方へも仰せ渡されければ、急ぎ陣をはらひ、將軍の下知を守る。秀武も御陣に参るべしと仰せけれども、未ださたらず。

家衡將軍を追ひ返す事

將軍の入部をさいて、武衡は異議なく伺候す。家衡は出羽にありて出仕せず。寛治三年の春二月將軍出羽の國へ入らんとし給へば、家衡、新關をかまへ國中へ入れざりしかば、是非なくして遠計奥州に歸り給ふ。武衡、初は奥州に在つて、家衡が策に従はざりしが、將軍を防いで追ひかへすことを聞き、義家ほどの名將を國中へ入れざること武士の面目なりとて、陸奥の國より手勢を振つて出羽に越て、家衡が館に行つて云はく、君ひとり身の人にてかばかりの人を敵にえて、假ひ一日にてもあれ追返すと云ふ、名を揚ること貴邊一人の高名にあらず。既にこれ武衡が面目にもあらずや。此の國司、昔し貞任、宗任等と戦ひの時、わづかに七騎となりしを、二十にもたらて、大弓を彎き軍兵の目を駭かす。人皆傳へ云ふ、これ人間の所爲にあらずと恐をなす。猛將をか

く輒く防ぎ給ふこと、總じて申す限りにあらず。今日より我も相共に力を合せ、合戦すべしと云ふ。家衡悦び言ふ、君と我同心に策をかまへ軍せば、恐らくは日本が動くとも、争か本意を遂げざらんや。金澤の柵は、この柵には莫大に勝りたりと、二人打ち連れ、沼の柵をさしきき金澤の柵に籠り、堀をほりまはし柵を結び、混に軍の企よりさらに他事なし。將軍の方にも家衡等を攻めんと、諸國に廻文をなし兵を招ぎ給ふ。

金澤合戦、源滿秀矢に中る

並高木滿秀の勘氣を蒙る事

將軍の召によつて、國々より馳せ集まり、兵士雲霞のごとし。七月二十二日矢合せと定め、金澤の柵に寄せ、時の聲を三ツ度合せてためらふ處に、寄手五百余騎、我れ先きと城戸口近く攻めよせたり。城内には本より支度のことなり。搔楯の上の精兵ども一騎

々々を主付けて、差詰め、射ける矢に馬ども射させてはね落されて、起んくとする處を、歩立ちの若侍逆もぎの間よりはひ出で、打殺し刺殺しければ、寄手には生きるもの少なく、死する者は多かりける。寄手叶はずして引き退く。爰に源滿秀は郎等引具し、二三百余騎入れ替へ、戦ひける。郎等に松山八郎、高木助市と云ふ者ども二三人、人は引けども退かず。敵は替れども主従三人は替らず。一の城戸口打ちやぶつて、二三の木戸口まで攻めつけ、死生知れずに責めたりける。城中よりも散々にこれを射る。甲冑に立つ處の矢十四五計りづ、折かけ、責め入りつゝ、退くことなかりける。武衡云ひけるは、あはれ大剛の兵かな。軍は斯くこそあるべけれ。昔も渡邊の綱など云ふ武士こそ斯くはあるらめ。當時日本の内にこれこそ、よき武邊者とも云ふべけれと感じける。家衡云ふ、あれ射つべきものはなきか。惜しき者なれども射とめよと下知しけ

る。武定云ふ、鳥海矢三郎こそ、弓勢も矢音もはしたなく、矢尻全く候。彼れに仰せ候へと云て矢三郎を招ぎ、あの満秀射とめよと云ふ。畏り候と、太くたくましさ荒木の弓のいまだ手あらなるを押張つて手なれし征矢二つとりだし、櫓の上より見渡せば、満秀主従三人、二段ばかり隔つて、次第く責めよつて門の中へはね入らんと思ふ氣色なり。矢三郎十三東三つ伏、しばし固めて颯と射る。前に進みたる松山八郎が甲のてへん射つて、後にひかへたる満秀が肩の上を射碎いてけり。二人ともに東西に伏しにける。高木二人を肩にかけ、味方の陣へ入りにける。満秀かく命を戰場になげうつ事、將軍の曰く、東國の武士は心剛にして義重し。都の武士はかたち尋常にして、心又臆病なり。死生のせり合ひ合戦は東國武士こそ勝りたれと、或人の仰せられしはなんぼう遺恨に思ふなれば、今日の合戦に命を惜み給ふなと宣ひ、さいはいを満秀に預けたまへば畏

り候と斯く自らはたらさける。松山八郎は一日あつて死にける。満秀は十日が内に癒えける。満秀、高木を召し、汝存外の不覺人なり。我れ此の度の合戦に心ず死して生さんと志しなし。然れば我が首を敵に渡してこそ、討も打たるも武士の本意なれ。名も後代に高かるべし。討たるも敵も名は高かるべし。大死させんと仕たる御邊我が前へ出づべからず。早々本國に登るべしと云ひて二た度見えず。高木は袖をかほにあて、泣くくそこを立ちければ、満秀も暫時是を見おくりて甲冑の袖をぬらしける。此の満秀は多田新發意満仲の嫡子、満正の孫多田左近満信が子なり。満仲の跡をついで、多田太郎と云ふ。頼義朝臣の御將軍の妹嫁なり。

新羅三郎義光、奥州下着の事

茲に將軍の弟に新羅三郎義光、此のころは兵衛尉にて、禁中に宿直せられしが、奥州にて合戦の山をさ

い、御暇を申しけれども勅許なきにより、夜中に大内を忍び出て奥州に下着し、將軍の御陣に来て云はく、ほのかに戦ひの由を承り、身の御暇を給はらんと奏聞仕り侍ると云へども、勅許なきに由て、竊にしのび罷り下り侍る。先づ御つゝがなく悦び入つて候と云ふ。將軍悦びの涕を抑へて、今日足下の來り給へるは故入道殿生かへりて、二度御座たるところを覺え侍れ。御身すでに副將軍となり給へば、武衛、家衡が首を得んこと掌の内にと御悦び限りなし。去るほどに出羽の國に合戦發りぬと聞えしかば、國々より馳せ集る中に、秩父の十郎武綱、初參なりしかば、是をさせとて白旗をたびけり。武綱これを差し上げて悦ぶこと淺からず。則ち先陣の軍すでに攻め寄せて、時の聲を發すれば、城中よりも同く時を合せ兩方を棄て戦ふ。矢の亂れ遇ふこと雨のごとく、寄手の兵疵をかうひる者多し。茲に相摸國の住人鎌倉權五郎景正は地白に尾花をぬいたる直

垂に、卵の花威の鎧に、同じ毛の五枚甲を若し、藤の弓に二十四指たる矢負ひ、鶴毛の馬にうちのり生年十六歳大軍のさきに進んで射合しが、蒐る處に城中より黒糸威の腹巻に、太くいさめる馬にうちのり大音をあげ、先程より兩陣の中にしていさぎよき働さし給ふを、權五郎殿と見るは僻目か。斯く云ふは鳥海矢三郎とて、東國に名を知られたる矢なり。一矢受けて試み給へと、三人張に十三東、弦音高くさつて放つ。无残やな權五郎が弓手の眼を射通す。景正矢にはにだうと倒れしが、又おき舉つて當の矢を射返さんとしたり。矢三郎之を見て我が矢を眼に受けとめて、ことともせぬは人間にてはあるまじと、鞭を打つて引き退く。景正是を抜かんとせず、其のまゝにて矢三郎をねらひ伺ひ、終に矢三郎を射とり、本陣に返つて景正手負ひたりと甲をのけさまに倒れぬ。爰に同國の住人に三浦平太郎爲次、立ち寄つてこれを見るに、右の目より首を射貫き、甲の針

付の板に射付られぬ。爲次機はさながら、景正が顔をふまへて矢を抜かんとす。景正臥ながら太刀を抽いて爲次が草ずりを取つて、上さまにつかんとす。爲次驚きこはなど斯くはするぞ。景正言く、弓矢に中りて死ぬるは武士の本意なり。争か生ながら足にて顔を陥むや。但し汝を敵とし我愛にて死なんと云ふ。爲次舌をまさ云ふことなく膝をかためて、顔を抑へ矢を抜きけり。軍勢みな云ふ、景正が勇力比類なしと、群る中にも感じける。此の城四方嶺嶮岨にして、高く峙ち壁のごとし。遠きものは矢を以て是れを射、近き者は石弓をはづし打ちひしぐ。死ぬる者數もしれず。

源氏陣を引き拂ふ事

寛治四年九月十日、早朝より戦ひ始めて止ことなし。爰に備仗助兼と云ふ者、日々軍のさきに立つ。將軍これを感じ、薄金と云ふ鎧をさせ給はる。助兼これ

天くらんで雪のさにはひとし。將軍今日までも此の陣に御座なば、忽ち雪に埋れ飢寒寒え、故なき死をし給はんに、此のこを知り給ふこと、但し天運に叶ひ給ふゆえとぞ見えたりける。今年は寛治五年、春二月に至るまで、雪絶えずつて人馬通はず。兼ては雪消えて三月末に出陣と仰せ出されけれども、同三月末になれども桃花未だ開かず。青草少なきに由て四月中旬より向はめと定め給ふ處に、四月十日頃より將軍病に臥し給ひて延引す。

將軍伏兵を知り給ふ事

寛治五年八月二十三日矢合せと、將軍方には兼ねて相ふれられければ、同じく源氏の門葉、其の外國々より馳せ下る。先づ伊豆守源満綱、藏人仲守、駿河守定宗、信濃守爲公、河村平太實義、左衛門尉實國、伊豆守國房、左衛門尉頼綱、福田次郎頼遠、右衛門尉正盛、上野守維時、藏原友久

を忝く思つて、なほ岸ちかく攻め寄せたり。敵石弓を落しかけたり。既に中りなんと見えしが、身くぐめ臥ければ甲ばかりうちとされ、甲はくだけ失せにけり。斯く攻むること度々なれば、味方拔群打たれ、其の上兵糧乏しく人馬ともに疲れ暮々しからず。是によつて人馬を休め、又勢を集め重てまかり向はめと、寛治四年十月二日諸陣くり引きにして國府に歸り給ふ。是れは雪の降るべきことを覺つてなり。城中の兵悦び云ふ、敵は怖へず没落したり。追蒐け息をつかせず討とるべしと、旗小幡さし鬚し馬に打ち乗りひしめさける。家衡下知して云はく、敵も敵による。知謀兼備たる義家なれば、如何なる心入にて味方を挑出さん策にても有らん。先づ扣へ然るべきと留めけり。士卒の中にも、進むべきを知つて進まざるは、後を全うせん爲なりとは、時によるものをと云へば、ある人が云く、備へ亂にして旌旗紊るをこそ討つべきにと云ふ族もありける。同十月三日

瀧口源太輔直、三矢五郎守俊、泥藤次郎經正、谷五郎政春、石道五郎長光、關十郎正近、原田太郎宗正等夜を日について下りける。此の外年比の高恩を被りし人々爰かしてより來り集まる。玄甲天に耀き地を動かす。九月十日金澤の柵に至る。然る處に一行の斜鷹雲上を渡る處に、鷹陣たちまち破れしかば、將軍これを見とがめ、軍奉行多田源満秀を招いて、怪しや、あの澤草むらに伏森吏あらん。さか寄せにして討ち給へとの仰せによつて、士卒を入れさがし求む。案のごとく藪澤の中より伏兵四五十餘人かけ出て喚てかゝる。去ればこそとて大勢して中に取巻さんく、に打合ふ。終に三十余人打ちとり殘兵方々へ逃げかくる。義家これを知ること人間の所爲にあらずと云ふ。義家昔し宇治殿へ參じて、貞任を攻めんこと申されしに、江帥の匡房卿立ち聞きて、器量はよき武士の合戦の道を知らぬよと、つぶやき給ふ。義家の侍これをさし、我主ほどの猛將を、けや

けきこと云ふ人かと思ひ、主君にかくと語る。義家  
さし給ひ、さるとも有らんと匡房の館に推参して、彼  
の卿に會ひ、彼の卿文を讀みけり。終に軍旅を傳ふ。  
義家これを知らざりせば爰にして武衛が爲めに破ら  
るべきに、誠に文武は車の兩輪の如しと。信なるか  
な。一道だにあきらめず。増てや兩道をや。天晴れ明  
大將軍かなと皆な感じけり。摠じて義家朝臣に武士  
の十徳をなはると、匡房卿などの仰せられしとなり。  
かくて士卒の足音、武者ほこり馬のいばへる聲、響  
き渡つて、軍勢山野にみちくたり。其の文は今の  
訓聞集と云ふ軍書なり。本大江惟時并に匡房入唐の  
後ち作りて今世に行はる。是れ箕壁翼參大星の大事  
と云ふことあり。大秘事、月此の四星に懸るにつ  
て、軍の勝負を知る口傳多し。兵の野に伏すとき、  
鷹行をやぶると云ふこと侍る。軍書に見えたり。子孫  
に見え

將軍、剛臆の座を定め給ふ事  
寄手日數をへて攻めけれども、たやすく靡けがたし  
將軍兵を勵さんかため、日ごとに剛臆の座を定む。  
一つにても功の勝れたるを上座とす。臆病なる者を  
下座にすえけり。各々臆の座につかじと氣を勵まし  
勇を進む。

寛治五年九月十五日剛の上座

瀧口源太輔直

秩父十郎武綱

瀧口秀方

鎌倉權五郎景正

御座

多田源滿秀

備仗助兼

三浦平太郎爲次

腰次郎直俊

藤原友久

將軍自らこれ等を覽應じて曰く、明日よりして猶ほ  
功あるを上とし、次なるを中とし、臆病なるを下と  
して、上座を五種、中座を三種、下なるを一種とす  
べし。必ず忠功を拙づべし。歸京の後は上奏にそな  
へんと仰せによつて、皆々剛の座に登らんことを  
樂しむ。

吉彦次郎秀武、將軍の御陣に來りて罪を悔ゆ。仰せ  
によつて、眞衡と和睦す。

源滿秀、軍氣を見る事

附龜次、鬼武勝負の事

源滿秀は搦手にありしが、萌黄の生絹の直垂に、品  
革威の鎧を著、鹿毛なる馬をひかせ、將軍の御前に  
跪き申しけるは、城も究竟のかまへ、主も勇者と見  
え、士卒固く守つて御方の兵これになづみ候。但し  
戦を留め城を卷守り給はし、味方は雲の如く重なり

賊徒は水にせまりし魚の如く、霜雪の朝日に逢へ  
るが如く己と消え侍らん。今敵陣の氣を見るに、烟  
羅き上つて天上す。これ律氣とや申さん。強儀に責  
むるとも輒く責め靡け難からんか。兵糧つきたば兵  
弊えずして利全かるべきかと言上す。將軍の曰く争  
を全うすべきには圍みの法もあれば然るべく計り給  
へと、仰せによつて向城をかまへ、一方は將軍卷さ  
守り給ふ。一方は義元、滿秀、滿綱卷きたまふ。一  
方は清平、重宗、仲守、定宗、友久等向城に籠つて  
卷き守り居たり。將軍以爲く、昔し安部貞任誅罰の  
時、父頼義公、石清水八幡太神と、多田の滿慶尊影  
に心願を起し、かば、忽ち神風吹て勝事を一時に得  
給ふなれば、我も神力を憑まんには如かずと云ひて  
觀念を起し給ふ。かくて日數を送る程に、武衛がも  
とに、龜次、並次と云ひし二人の打手あり。双びな  
き兵なり。是をこはうちと名付けたり。武衛使を將  
軍の陣へつかはして消息して云はく、戦ひやめられ



て徒然かぎりなし。龜次と云ふこはうちなん侍る。召して御覽すべし。そなたよりも然るべき撃手の一人出し召しあはせ、互につれくなくさめられ侍るべきかと云ひ送れり。將軍出すべき討手を求むるに、次任が舍人鬼武と云ふ者あり。心たけく身の力ゆゑしからけり。是をえらびて出す。龜次城の中より下り立ちて、二人の戦ひの場により合へり。兩方の軍目もたかず是を見る。兩方已により合ひて撃ちあふこと半時ばかり、互ひに何れの透間ありとも見えず。去るほどに、龜次が長刀の末、しきりに上るやうに見ゆるほどに、龜次鎧着ながら鬼武が長刀の末に懸りて落ちぬ。將軍の軍悦びのときをつくり罵る聲天地を響かす。是を見て城中の兵龜次が腹をとられしと、くつばみを双てかけ出る。將軍の兵又龜次が首をとらんとて同くかけ合ぬ。又兩方亂れ交りて大に戦ふ。將軍の兵、數多くして城より下る處の兵を悉く討ち取りぬ。

金澤合戦の事

東軍には龜次討たれて由なき使を將軍へ遣はし、耻の上の損なりと思ひ、又今度は龜次に勝りたる大力士を城内より出しける。其の長け七尺ばかりの大男大荒目の鎧を着、黒月毛なる馬に乗り大音上げ、これは武衛の御内に悪五郎直次とて、隠れなき兵なり。昔は源氏方には四天王獨武者などと云ふ勇者ありしよし、其の末葉はあはせずや。直次が腕の力又は太刀、刃の程こゝろみ給へ。戦ひを止められ寂しく候へば、兩陣の目さませ申さんと廣言吐いて立ちたり。源氏方にも誰をか出すべきと云ふ處に、源太輔直進みいで、敵より四天王が末と云ふなれば誰懸むべきにあらずと、品革威の鎧とつて打ちかけ、月毛の馬に打ちのり、四天王が子孫とあれば身不肖に候へども、これは渡邊黨に瀧口源太輔直と云ふ者なり。昔も四天王が流れあまた侍れども、今

此陣には某ばかり。いざ仕らんと、直次は太刀、源太輔は長刀にて、弓手へかけちがへ、妻手にひらき合ひ、直次はたと打てば源太輔受流す。源太輔すそより拂へば直次又押しながす。かくすること半時ばかり。今日の軍の花これなりと、數萬騎の兵、拳を握り見物す。透間ありとも見えずりける。去る程に、直次受太刀になるよと見しほどに、甲冑さながら源太輔が長刀の末に掛りて馬より下に落ちて失せにけり。源氏方には流石綱が子孫ほどありと、時を作りぬる。城中には又死益の争ひに損の上の損なり。あの直次が首をとられしと響をならべかけ出る。寄手又直次が首を採れとて同じく蒐け合せ、兩方みだれまじり大に戦ふ。旗小幟のひらめきて北へまくり南へまくりかへす有様は、千草亂る、秋の野に薄を風の分くるに異ならず。人馬堀を埋め攻め寄せ、血劍の光大地紅にそめかへす。城中の士卒多く討たる。爰に未割四郎惟弘と云ふ者、臆病の座につきしを深

くはぢ、今日の軍にこそ我が剛臆は定まるべきにと云ひて、先づ飯酒多く喰ふて緋威の鎧を着、芦毛の馬に打のつて云ひしまゝさきにかゝる。流れ矢來て頭の骨に中り馬より下に落つ。射さられたる切目より、食たる食すがたも化らずして出てたり。見る者哀れがりけり。將軍悲んで宜ふ。元來心に發らぬ高名だて、一旦はげみ前をかくる。必ず死ること此の如く、喰ふ處の食物腹に入らずして咽に留る。大臆病の者なりとのたまふ。然る處に家衡が乳母子に千任と云ふ者、櫓にのぼり大聲して將軍に云ふ。汝が父頼義、安部の貞任を打ち得ずして名簿をさしげて、故武則公を憑み偏へに其の力によつて適打ち得たり。すでに恩を被り徳を戴きながら、而も相傳の郎等の身として、忝なくも重恩の君に向つて弓矢を放ち奉る不忠不義の罪、天道の責を被るべしと云ふ。軍兵みな口々に返答せんとす。將軍制して千任を生捕にしたらん者は、恩賞のぞみに給ふべしと、

いよく、暝り日敷を送る。城中食つぎ男女歎きかなしむ。武衡、義光につき降を乞ふ。義光この由を將軍に語らる。將軍許諾し給はず。武衡なほも義光を憑む。我が君、忝くも城中へ來り給へ。其の御伴に参りなば、去りとも助かりなんと云ふ。義光行くべきかとあれば、將軍の曰く昔より今に至りて大將次將の敵に呼ばれて行きし例様未だ聞かず。君城中へ捕り籠られなば、千度百度悔ゆとも何の甲斐あらん。讒を萬代の後に残し、嘲りを千里の外に招がんと云ひ恥ぢしめ給ふ。武衡重て義光に云ひおくるは、御身わたり給ふこと叶はずば、然るべき御使一人を給はゞ存する旨を申入れんと云ふ。義光侍の中に誰か行くべきと仰す。瀧口秀方、某まからんと云ふ。然るべしとてゆるさる。秀方は布衣の上に五尺ばかりの太刀を帶たり。城戸を開かせ内に入る。兵垣のごとく弓矢太刀刀、林の如し。秀方身を側て歩み行く。武衡が宅に至り座敷につく、武衡悦び對面して、さま

くもてなし、貴殿をこれへ請すること、さらに別義にあらず。我等將軍に對し弓引き矢放ち申すこと更々心より發りたるに候はず。思はざるに郎等共のなせることなり。然るを我々君の敵とまかりなると、然るべき天魔の所爲と存じ、猶もまげて助けさせ給へと、兵衛殿へ申さん爲なりとて、金多くとり出し秀方が前に積む。秀方言く、城中の財物今日給はずとも、殿原落ち給ひなば我等が物なりと云ふ。武衡大なる矢を取出し、これは離の矢にて侍るにか。此の矢の來るごとに、必ず中る者たえなんと云ふ。秀方見てこれは、某が矢なりと云ふ。乃ち又云く、我をとり籠めんと思さば、只今爰にて如何にもし給へとて、太刀を抜きつるげ、眼を暝らして居たり。武衡云ふ大形あるべき事にも侍らず。只とく歸り給ひ、能く／＼申し給はれと、秀方本陣に歸りぬ。兎角するに秋もすぎて冬にもなりぬ。城中いよく飢にのぞむ。下女重部など木戸を披き走り落る。

兵どもみな／＼道をあけて通す。悦び我れ劣らじと群り降る。末武、將軍の御前に出て申しけるは、此の降る所の下部、みな首をさき給へと云ふ。將軍其のゆゑを問ひ給ふ。末武言すやう、目の前に殺さると見ば、残る奴ばら降らじ。然らば城中に兵糧とく盡くべし。既に雪の期になりたること、夜日これを恐る。暫時も早く落なんことを存ず。この降る稚女童男は兵どもの愛妻愛子どもなり。獨りうち食つて妻子に物喰せぬことあるまじ。然らば一時も早く俄申さんかと言上す。將軍さもあらんと降る奴ばらを目の前にさき殺しぬ。これを見て木戸を閉て重ねて降る者なし。

金澤城落ち、武衡、家衡一家亡ぶる事

藤原小太郎資道は、將軍の身親しき郎等なり。夜日身を離ることなし。夜半ばかりに將軍資道を起し

て命ず。武衡等よろこびて今夜城をすて落つべし。凍えたる兵どもに、假屋に火をつけ手をあぶらすべしと下知すべき由、資道奉行す。士卒異しく思へども、仰せなれば陣小屋に火をつけ身をあたしも。防く兵もなし。實に今夜没落す。人々これを神のごとく思へり。圍む軍は一方を闕と云ふこと兵書にあれば、將軍是を用ひ給ふなるべし。已に寒の比ほひに及ぶと雖も、天道將軍の志を補けたまひけるにや、雪あへてふらず。城内食物こと／＼くつき。寛治五年十一月十四日の夜、終に落ちゆき畢りぬ。城中の美女どもは、軍兵みな争ひ取りて陣の中へ將て來る。男の首は鉢にさゝれて前に行く。女は涙をながして後に行くぞ哀れなる。武衡は逃げ得ずして城中の池の内にとび入り水に沈み、顔ばかりを草むらに差出し居たり。満秀これを見付け、引き上げ生捕にしたり。義光の郎等は千任を虜る。家衡は花柑子と云ふ馬を持ちたりける。奥州六郡第一の馬な

り。是れを愛すること妻子に過ぎたり。逃げん時に此の馬、敵の取りてのらんこと妬しと云ひて繋ぎ、自ら射殺しつ。楮異の下女のまねをし、香々落のびけり。將軍武衛を召して自ら罪を責めて云く、軍の道他人の勢を駆て敵を討つは、昔も今も定まれる例なり。是れを將の謀の善の善なること、す。古の軍法なり。武則、且は官符の旨にまかせ、且は將軍の語ひにより御方に参り加れり。然るに、先日僕從千任丸に教へて名簿ある由を申すは、定めて件の名簿汝傳へたるか、速に取出すべし。武則夷の身を以て、忝くも鎮守府に將軍の名を汚せり。これ我が父賴義公の申し行によつてなり。是れ己に功勞を報いるにあらずや。何に況んや汝等は其の身に聊かの忠心もなく、剩へ謀叛の企これ何ごとによつてか。今命を助け得さすべしや。其上重恩の主と名乗る其の心、慥に申すべしと責めらる。武衛頭を地に付け居たり。則ち大宅光房に仰せて其の頭を斬る。次

に千任を出し先日櫓の上にて云ひしこと、其の舌を抜くべしと仰せらる。源の直と云ふ者あり。寄りて手を以て舌を引き出さんとす。將軍大いにいかりて曰く、虎の口に手を入れんこと甚だおろかなりとして金箸を取り出して舌をはさまんとす。齒をくひ合せて開かず。齒をつき破りて其舌を引出して是れを斬つ。其の後手をくくり木の枝につり上げ、足を地につけず足の下に武衛が首を置く。千任泣くく足をかいて踏まず。少時ありて力つきて足を下げて、終に主の首を踏みけり。將軍見給ひ、二年の曠り今日すてに愁眉を開きぬ。心に懸かることは家衛が首を見ざることをとのたまふ所に、縣小次郎次任と云ふ者、落人の逃るうら道をしきりて固む。十人が九人は次任が爲めに討たる。其の中に家衛下女にまぎれて逃げんとす。次任見つけ打殺して、其首を縣小次郎が郎等鋒に刺して跪きて云く、縣殿の手作りに候ふと云ひける。陸奥の國には手づからす

ることをば手づくりとなん云ひける。將軍の御前に持ち来る。將軍の悦び心骨に徹り、自らくれなるの絹とりて次任に被かしむ。且又鞍置馬を賜りける。其の外武衛、家衛が郎等どもの中に宗徒の士四十八人が首を斬り、將軍の陣の前にならぶ、残る兵皆降人となり来る。斯りしかば出羽、奥州靜謐になりぬ。萬民恐れ重んずること、風に草木の靡くに似たり。源氏の繁昌目出度かりける御世なりし。

義家、國解を捧ぐる事

將軍國解を奉て申すやう、武衛家衛が謀反已に貞任宗任に過ぎたり。私の力を以て適討ち平らぐることを得たり。早く追討使の官符を給ひて、首を京都へ奉らんと申す。然れども私の敵たる由聞ゆ。官符を賜らば勘賞行はるべし。仍て官符なるべからざる由定まりぬと聞きて、首を道に捨て、空しく京へ上りにけり。其時古老の曰く、征夷將軍の號あるとき

は、掌る處に國亂れば、征伐の役なれば、暴逆の凶徒あつて定るに、可かずんば罪を鳴して伐平げずんばあるべからず。上天皇に言上に及ぶべからず。討て後に天皇へ申す可し。孔子此のことを説き給ふこと魯典に見えたり。兩葉摘まざれば斧柯を用ゐんと欲するの患あり。必ず是を未前に制すべし。且つ漢王韓信を將軍に任ずるとき、壇に拜して穀を推し、京關の外將軍に任ずるの言あり。然るときは則ち私の追討にあらず。時の執政の大臣此の法を用ゐざるか、知らざるか、不審と云へり。易に曰く箱を履んで堅き氷至る。小人傲なりと雖も長すれば則ち漸く盛に至る。故に初に戒しむ。義家公之れを取り給ふか。

此の多田五代記録十卷は攝北多田兵部の家に藏する處年向し。本と街説途談を輯め、村夫田翁の卑語甚だ野にして俗なり。多くは浮誇にして理同うして大に眞を誤る。西談に實多きは則ち正して之

を取り、東話に虚に近き者は削りて用ゐず。之に依て源氏諸家の記録及び家譜を考へ、實多くして真に隨する者は之れを取る。奇言異字を除き烏鴉馬の差を訂し、典故を改め因て之を潤色して至當に歸して後に止むのみ。此書たるや、上み滿仲公より下も義家公に至て王家を尊び伯業を開り。軍忠戰伐、百たび戦ひ百たび勝ち、治國天下の功勳として人目を眩し、榮然として後賢を勵ます。初は王道を説き中頃武功を振ひ終りに國家を治む。殊に勸善を多くして懲惡を少くし、亂臣賊子を誅しむ。蓋し此の集や日東の鱗經、源家の龜鑑に準ぜんか。吁夫れ多田滿仲公は智仁勇三達徳あつて、常に諸葛孔明の心の秤を用ゐて、權あつて中を執り、勝敗の輕重を量り天下の政ごとを誤らず。生物を主るを心とす。天の道に愜へり。仁心の神武、扶桑武將の最たり。豈に齊桓の下風に立たんや。仍て卷尾に跋すと爾か云ふ。

元祿四年卒未春三月吉旦  
 染翰於銅駝城下昌樂菴瀧川育子欽稿

多田五代記卷第十 終

星月夜顯晦錄